
ACE + リリカルなのは ~もう1人の黒い魔導師~

黒仮面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ACE+リリカルなのは ～もう1人の黒い魔導師～

【Nコード】

N8958H

【作者名】

黒仮面

【あらすじ】

ロボットアクションゲーム、ACE（Another Century's Episode）シリーズのキャラが、リリカルなのはの世界に来たら…という設定のクロス小説です。独自設定がある上に、文章制作に関しては素人です。その手の作品を不快に感じる方は読まない方がいいかも… 完結に伴いタイトルを変更

第1話（前書き）

あらずじでも書きましたが、作者はかなりの素人です。
それでも不快じゃない方はどうぞお読み下さい。

第1話

「ベルクトオオー!!!」

爆発を繰り返す真ドラゴンに向かって、青い機体ーイクスブラウを駆る少年ーバレルは叫んだ。

バレルはイクスブラウを真ドラゴンに接近させた。

「バレル、危険よ!」

イクスブラウのもう1人のパイロットーフェイはバレルに言った。
これ以上接近すれば真ドラゴンの爆発に巻き込まれる可能性がある。
そうなる自分たちが危ないのだ。

しかしバレルはフェイの言葉など聞こえてないかのように
イクスブラウを真ドラゴンの至近距離まで接近させた。

「脱出しろ!」

再びバレルは叫ぶ。

薄暗い真ドラゴンの機体の中、バレルと瓜二つの少年ーベルクトは
両膝を地面につき、俯いたまま静かに呟く

「もう…終わった。」

そう、終わったのだ。

バルドナ・ドライブの完全稼働による、地球同士の衝突による世界滅亡

その最後の障害となるバレルとその仲間達

それを排除すべく完全な進化を遂げた真ドラゴンを駆って戦いを挑み、そして敗れた。

もう自分には何も残ってはいない。

自ら殺した父親からは、たまたま生まれた

バレルではない何かとその存在を否定され

その怨恨による世界滅亡のみが唯一絶対の望みであったベルクトにはもはやこの世界に生きる意味も目的も無かった。

「終わってない！」

バレルは叫び続ける。

ベルクトは更に呟く

「どちらかが否定される…その事はわかっていた筈だ。」

もう1人の自分自身に敗れた以上、自分には価値などない。

同じ人間が2人もいるのは不自然な事なのだ。

「そんなの…知るかよ！…俺達は違うだろ！」

しかしバレルは、そんなベルクトの気持ちを否定するように言葉を

重なる。

「俺は俺だ。そして、君は…君だ！」

確かに生まれた時は同じだったかもしれない。

しかし同じ時、同じ世界を過ごしたわけじゃない。

目の前にいる人間は姿形は同じだがバレルではない
ベルクトという1人の人間なのだ。

ベルクトはその言葉にハツとしたかのように立ち上がる。

（俺は…俺か。）

ここまで来てその事に気づいたベルクト。

だが、気づくのが遅すぎた。

自分1人の怨恨の為に世界中に恐怖と混乱をもたらしてしまった。
そんな中で自分がのうのうと生きられるとは到底思えない。

だからこそ

「なら…ここからはお前だけの道だ。」

最後の最後で大事な事を気づかせてくれた
バレルを巻き込むわけにはいかない。

ベルクトは崩れ行く己の機体からイクスブラウを遠ざけるように、
真ドラゴンの腕で彼の機体を払い飛ばした。

「うわあああ！！」

巨大な真ドラゴンの腕によってイクスブラウは引き離された。

爆発を繰り返しながら落下していく真ドラゴン。しかしベルクトの表情に不安は無かった。

「…ありがとう、バレル。」

ベルクトは真ドラゴンの爆発の中に消えた。
そして真ドラゴンは爆散した…

何かの物音がしてベルクトはふと目を開けた。

「ここは…」

ゆっくりと上半身を起こして、あたりを見回す。
どうやらどこかのビルの屋上らしい。

時間は夜らしく、空には月が輝いている。
しかし…

「どういう事だ…」

自分は確かに真ドラゴンの爆発に巻き込まれて死んだ筈だ。
運良く爆発で死ななかったのだとしても

あの高さから地上に落下したのならひとたまりもないはずだ。

なのにほとんど無傷の状態でここにいる。

それに目に映る街の様子もおかしい、何とか平和すぎる。
先程のバルドナ・ドライブの発動によって、両方の地球の至る所で
尋常じゃない被害がでているはずである。
なのに目に映る街の姿は、そんな事など夢だったかのように穏やか
だ。

「ここは…一体何なんだ…」
状況がさっぱり理解できないベルクトは
額に手をあて、俯いたまま考え込む。

そんな彼の姿を見る二つの影が空に浮かんでいた。

第1話（後書き）

というわけでACE3よりベルクトが登場です。
今後は彼が主役として動きます。

タックやバレルの活躍を期待してた方、正直スマン。
ACE側のキャラはしばらくベルクト1人なのでご了承下さい。

ご意見、感想、指摘などを貰えると非常にありがたいです。

第2話（前書き）

ベルクトがあの人と接触します。

第2話

ベルクトはしばらくの間、状況を整理しようとビルの屋上を歩き回っていた。

すると、後方から何かが近づいてくる気配を感じた。

「…ッ、誰だ！」

ベルクトは腰のホルスターから拳銃を抜き、後ろを向いてそれを構えた。

するといつの間にか現れたのか

金髪で黒いマントを羽織い、杖のような物を持った少女がこちらを見ていた。

「……………」

「答える、お前は何者で、いつの間にここに来た？」

少女は黙ったまま答えない。自分を警戒しているのだろう
まあいきなり銃を向けたりしたら無理もない。

だが油断はできない。

目の前の少女からは普通な気配を感じられない。

纏っているのは兵士のそれと変わりない、いやそれ以上とも言える。
ベルクトは銃を構えたまま言った。

「…俺も正直何がなんだかよくわかってない、お前がみた目通りの女の子じゃないのはわかるがこんな場所で争っても仕方ない、まずは話だけでも…」

そこまで言いかけてベルクトは再び後方に振り向き、銃の引き金を引いた。

ビシュッ

放たれた弾丸が赤毛の女性の頬をかする。

「気づかれた!？」

「アルフ!!」

金髪の少女は赤毛の女性「アルフに向かって叫んだ。

ベルクトはそのまま2人から距離をとった。

「言つたろう…俺は話がしたいんだと、妙な真似をしようというなら抵抗する…」

距離をとったままベルクトは言った。

「まずは聞かせて貰おうか、貴様らは何者だ？」

「…フェイト・テストロッサ、魔導師です。」

「あたしはアルフ、この子の使い魔よ。」

「魔導師? 使い魔?」

聞き慣れない単語にベルクトは首を傾げる。

「あなたは管理局の魔導師ではないのですか？」

「俺は魔導師とかいうものではない…

管理局というのも知らない。」

ベルクトの答えを聞いて、アルフがおかしいという風に言う。

「だってアンタ、リンカーコアを持ってるじゃないか！」

「リンカーコア? それも初めて聞く。」

不思議そうに答えるベルクトにアルフは更に言う。

「アンタの首に下がってるそれはアンタのデバイスじゃないのかい?」

「…?」

言われてベルクトは首下を見た。

すると、見たこともない赤と黒で彩られた二枚の羽のオブジェが銀の鎖に繋がれて、ぶら下がっていた。先程まで混乱していたので全く気づかなかったが
少なくともこんな物はここに来るまでは持っていなかった筈だ。

どうにも埒があかないと感じたベルクトは、銃を下ろしてこう言った。

「どうやら一度じっくりと話し合う必要がありそうだな。」
フェイトも杖を下ろして警戒を解いた。

まず先にフェイトから話した。

ここは日本の海鳴市という場所であること。

自分はとある理由でこの街に滞在する魔導師であること

この近くを移動中に巨大な魔力反応を感じたので

行ってみたらベルクトがいたこと

管理局の魔導師の可能性もあったので、自分が引きつけてる間にアルフの魔法で捕縛しようとしたが失敗し、今に至ること。

次にベルクトが話す。

自分は巨大な機動兵器を駆る軍人だったこと

バルドナ・ドライブで2つの世界を行ったりきたりしていたこと
重要な作戦をこなす為に大規模な戦いを行ったこと

それに敗れ死んだはずだが、気がついたらここにいたこと。

互いに重要な部分を隠しながら情報を交換する。

「魔法か…おとぎ話みたい事だな。」

「私からすりゃ巨大なロボットで戦ってたって方が信じられないよ。」

腕を組みながらそう言うベルクトに対して

アルフが頬をかきながら言う。

（しかし…俺の知らない世界がまだあったとはな）

右手で顎を抑えながらベルクトは思った。

バルドナ・ドライブで並行世界を行ったりきたりしていたとはいえそれ以外の世界が存在するとは考えてもみなかった。

それよりも驚くのは自分がこうして生きている事である。

（アルフが言っていたが…リンカーコアというヤツの影響だろうか？）

（だとすると…俺も魔法とやらが使えるのか？）

（いや、それ以前に何故俺の体にそんなものがあるんだ？）

1人であれこれ考えるがとりあえず大事なのは

「あの…貴方はこれからどうするんですか？」

そう、フェイトが言うように今後この世界でどう生きていくかである。

「わからんな…正直俺は1度死んでるからな、今後どうすればいいかなどさっぱりだ。」

ベルクトの答えに対してフェイトが言った。

「もし良かったら私の家に来ませんか？」

「…いいのか？」

「はい。」

思いもよらぬフェイトの提案にベルクトは驚く。

だがこんな状況である以上、こういう申し出はありがたい。

「なら、しばらく世話になろう。今後よろしく頼む。」

後で彼女にこの世界の常識や魔導師について聞いておこう。

そうすればこの世界でもやっていける筈だと、ベルクトは思った。

（色々不思議ではあるが…こうして生きている以上何らかの意味がある筈だ。）

（なら…を探していくとするか…俺として、ベルクトとして生きていく為に…）

ベルクトは新たな人生を歩むのを決意したのであった。

（バレル、俺も俺の道を行くでしょう…）

遠い世界のかつてのもう1人の自分に対してベルクトは心の中で呟いた。

「良かったのかい、フェイト？」

「どうしたのアルフ？」

ベルクトを連れて家に帰る途中、アルフはフェイトに尋ねた。

「いや…フェイトがあんな知らない男を家に招くとは思わなくてさ。」

歩きながらフェイトは答える。

「うん、あの知らない世界に飛ばされて困ってたみたいだし、助けになれなかなって思ってた…それに…」

「それに…何だい？」

「あの人、何だか他人のような気がしないんだ。」

「どういう事だい？」

フェイトの返答にアルフが首を傾げる。

「私にもよくわからないけど…あの人私に似てる気がしたから。」

「ふーん、まあフェイトがいいなら私はかまわないけどさ。」

言われてアルフは一応納得する。

確かに物静かな感じがするし、魔導師の事を知らないとはいえ戦闘に関しても素人なわけじゃない、むしろかなりのセンスを持っている。

そういった意味では似ているかもしれないとアルフは思った。

だがフェイトはそれ以上に、自分もまだ知らない…

どこか大きな部分でベルクトと何か似ている部分があるのではないかと思うのであった。

第2話（後書き）

というわけでベルクト魔導師化フラグです。
ハイ早くも独自設定です。

ロボットと魔導師の共闘シーンなど俺には無理だ…
考えついた苦肉の策がこれです。
なのはファン、ACEファン共に不快に思われたのなら非常に申し
訳ないです…

ご意見、感想、指摘など待っています。

第3話（前書き）

ありきたりな日常の風景、そしてベルクトはフェイト達の目的を問う

投稿直後にミスを発見して修正。

すみません…これからはもっと落ち着いて投稿するよう心がけます。

第3話

海鳴市のとあるマンション

まだ日が出て間もない時間帯に、ベルクトはベランダから外の風景を眺めていた。

「随分と呑気な世界なんだなここは…」

フツとため息を吐きながらベルクトは言う。

（まあ…俺や俺の世界の方が異常だった可能性もあるか…）

利用する目的だったとはいえ連邦軍にいたベルクトの居場所は常に戦場だった。

コーリアンやインベダーの脅威。

連邦軍と革命軍による泥沼の戦い。

バルチャーによる身勝手な略奪行為。

シベ鉄の圧迫やクダンの限界に対する恐怖。

これだけ戦いの火種があつた世界からやってきたベルクトにしてみれば

街に銃の穴痕1つ無い上に、血やガンオイルの匂いが全くしないのは非常に新鮮だ。

そんな所から来たベルクトにしてみれば

ここは平和を通り越して、呑気に見えるのも無理はないかもしれない。

ふと物音がしたのを感じて、ベルクトは振り向く。

どうやらフェイトとアルフが起きてきたようだ。

アルフはまだ眠たいらしく、目をしきりにこすっている。

「おはようベルクト。」

「ああ。」

「ふあゝあゝアンタ随分と朝が早いんだね。」

欠伸をしながらアルフは言った。

「俺は元々軍人だったからな、その時からの体質みたいなものだ。」

ベランダの戸を閉めながらベルクトは答えた。

そんなベルクトを見ながらフェイトは聞いた。

「何をしていたの？」

「いや、大した事じゃあない。この街は平和だと思ってただけだ。」

「まあ、アンタは軍人だったわけだしね。」

何でもないという風に答えるベルクトに対して

アルフはまだ眠そうに目をこすりながら言った。

（しかし…こんな何気ない会話をするなど何時振りだ？）

あの頃は世界滅亡の事しか頭になかったのだ

そんな些細な話を話す余裕も無かった。また、ベルクトの身の回り
といえば

ただ命令を下す上司や、黙々と仕事をこなすだけの部下

根っからの軍人で戦争事以外に関心の薄い副官のアンジェくらいし
かいなかった。

故にそんな些細な会話などほとんどした事がなかったのである。

怨恨や戦争という柵から解放された今のベルクトには
日常のちょっとしたあらゆる事に新鮮味を感じていたのであった。

朝食の時間

この街や魔法に関する簡単な説明は昨夜の内に一通り聞く事が出来た。

だからベルクトは食事の間に更に詳しい情報を聞こうと考えていたのだが。

「アルフ…貴様の食べてるそれは何だ？」

若干の頭痛を感じつつ、ベルクトはアルフが持つ箱を指差して言った。

「これ？ドッグフードだけど。」

箱を片手にアルフは答える。

ベルクトは冷ややかに言い放った。

「貴様は犬か？」

「な！？失礼だね！アタシは狼の使い魔だよ！」

「その状態で言われても説得力に欠ける。どう見ても狼には見えん。」

「喧嘩売ってんのかいアンタは！！」

「騒ぐな、食事は静かに食べる。」

「アンタが犬とか言うから！」

「ア、アルフ落ち着いて…」

怒鳴り散らすアルフの言葉を、悪魔でも冷静に受け流すベルクト。
フェイトはアルフを落ち着かせるのに必死だった。

さて、そんなやり取りをした後、
ベルクトは唐突に切り出した。

「お前たちが何なのかは昨日で大体わかった。だがこの世界でも魔導師は普通にいるような存在じゃあないらしいな。」

差し支えが無ければお前たちがここで何をしているかを聞かせ
てほしいんだが。」

その言葉を聞いて2人は一瞬ドキリとしたが
しばらくの沈黙の後、フェイトがその問いに答えた。

「…私たちはジュエルシードを集める為にここにいる。」

「ジュエルシード？」

「簡単に言えば願いを叶える宝石みたいなもんさ。」

ベルクトの疑問にアルフが即座に答える。

「ここら周辺に散らばった21個のジュエルシードを集めるのが私の目的。」

「21？そんな宝石が21個もあるのか？」

予想外の答えにベルクトは多少の動揺を見せる。

「願いを叶えるって言うても万能じゃない、大抵は使用者を巻き込んで暴走しちまうのさ。」

アルフが再び答える。

「しかし何でお前みたいな少女がそんな危険な物を集めている？」
ベルクトの問いに、フェイトは俯きながらどこか寂しげに答えた。

「私の大事な人が…母さんが、必要としているから…」

急に雰囲気が変わりどこか決意めいた顔をするフェイト、
そんな彼女を見てアルフは心配そうな顔をする。

（どうやら何かわけありのようだな。）

2人の様子を見て、ベルクトはそう思い、そして決めた。

「わかった。俺も協力しよう。」

「「え!?!」」

ベルクトの発言に2人は驚いた。

「危険がつきまとう上にかなりの数がある、戦力が多いに越した事はない。」

「だけど…無関係のベルクトを危ない目には…」

「そ、そうだよ!アンタには関係が無いじゃないか!」

フェイトが戸惑いながら、アルフが必死な感じで言った。

「昨夜も言っただろう?俺は本来死んでいた筈の身の上だ。」

どうせ手持ち無沙汰だしタダ飯タダ寝をするのも息苦しいしな。

「

悪魔でも協力するという意見を曲げないベルクトを見て

フェイトは疑問に思い、聞いた。

「私たちは昨日偶然会っただけなのに…どうしてそんなに親切にしてくるの?」

普通なら誰もがそう思うであろう疑問をベルクトに投げかけた。

ベルクトは顎に手を当て俯く。

そう、他人に情けをかけたり、心配したりするなど到底自分のガラではない。

目的の為に利用できる者は誰でも利用し

時には自分の部下さえ手にかかる冷酷非情。

利害関係抜きで他人と関わりを持つなど有り得なかった。

(だが、俺は…)

そう、昨日自分は決意したのだ。
死に際にバレルに言われた言葉

（君は…君だ！）

あの瞬間からベルクトの世界は変わったのだ。
自分はバレルではなくベルクトである。

あの時からベルクトという新しい自分が始まったのだ。
そしてそのまま死ぬはずだったが、生きてこの場にいる。

「俺は今まで機械のように人を殺したり利用したりするばかりだった…」

だから…人の役に立つという事をしてみたいんだ。」

顔を上げ、固い表情のままベルクトは言う。

今までは自分の為にしか動かなかった。

だから他人の為に何かをしたい。

それがベルクトが最初に決めた生きる目的だった。

「ベルクト…」

「そんな顔するな、俺は軍人だったからな、簡単には死なんぞ。」

尚心配そうに自分を見つめるフェイトを安心させるようにベルクトは言った。

「それに…お前と俺はどこか似ている感じがしてな、何となく放っておけない気がする。」

「え…」

ベルクトの言葉にフェイトは動揺する。

（私と同じ事…思ってたんだ…）

フェイトは少し顔を赤らめた。

その様子を不思議に思ったベルクトが尋ねた。

「どうした？」

「うつん…何でもない。」

「そうか、出来る限りの事はやらせてもらっ。これからよろしく頼む。」

「うん…よろしくねベルクト。」

「はあ、まあこんだけ決意固いなら仕方ないか。アタシからもよろしくなベルクト。」

3人は互いに手を取り合った。

「そうだ、もう一つ聞いておきたい事がある。」

互いの手を離れた後、ベルクトはアルフに対して尋ねた。

「アルフ、お前は初めて会った時に俺はリンカーコアとデバイスを持っていると聞いたな。」

「ああ、多分間違いないと思うよ。」

アルフの返答を聞いて、ベルクトは更に口を開いた。
「だったら俺にも使えるはずじゃないか、魔法とやらが？」

第3話（後書き）

というわけでジュエルシード争奪戦にベルクトが参戦決定です。

どこの異世界のベルクトだ？とか言わないでくれ…

2話を書いてる途中あたりからどんどんベルクトが

俺の頭の中でいい子に変わっていくんだよ…怖いくらいに…

次話では遂にバトルシーンが入りますが

あんまり自信無いんだよなコレも…

ご意見、感想、指摘、ヘタれた作者への叱咤激励など、お待ちしております。

第4話（前書き）

遂にベルクトが魔導師として動き始める。

第4話

とあるビルの屋上にベルクト達3人は来ていた。
因みにフェイトはバリアジャケットを纏い、バルディッシュを持っている。

「このデバイスというのはどうすれば使えるんだ？」

首に下がった羽のオブジェを片手にベルクトは尋ねた。

「デバイスの名前が起動確認の合図になってるから、名前を呼べば起動する筈だよ。」

アルフが質問に答えるが、同時に思い出す。

「といってもベルクトはいつの間にかそれを持ってたんだよね…」

何かその羽のオブジェを見て思い浮かぶ物はないかい？」

アルフの言葉に、ベルクトは額に手を当て考える。

（羽…赤と黒……やはりあれか？）

考えた末に彼は口にする、かつての愛機の名を。

「ブラッドアーク」

そう呟いた瞬間、ベルクトの体が光に包まれた。
そして光がおさまった後に立っていたのは

赤と黒を基調にしたバリアジャケットを身に纏い
背中と両踵に大小3つのリングパーツ

両肩に等身大の筒状のパーツを備え

右手にライフルを持ち、両手の甲を籠手で覆ったベルクトだった。

それと同時に頭の中にデバイスの能力が流れ込んでくる。

ベルクトは目を瞑り、それらの情報を整理する。

(……出力や動力源、攻撃に使用される物質の差違を除けば
後は兵器のブラッドアークとほとんど同じだな。)

ベルクトはそう結論づけて目を開き、フェイトに向き直ってこう言
った。

「フェイト、悪いが少し模擬戦に付き合ってくれ。さっきはああ言
ったが

魔法での戦闘経験が無い以上少しは慣らしておいた方がいいだろう。

「
フェイトは頷いて答える。

「では早速行くぞ。」

そう言つてベルクトは右手のブラッドシッドライフルを構えた。

青い魔力弾がいくつも発射される。

フェイトはそれを上に飛んで避けた。

ベルクトもリングパーツを展開して空を飛び、フェイトに接近する。

（速い…！）

予想以上のスピードに驚きながらも、

フェイトはバルディッシュを構え、刃を形成し、ベルクトに斬りかかった。

「カオスブレード」

ベルクトも籠手から黄色い魔力刃を形成し、フェイトの斬撃を素早く防ぐ。

キリキリと互いの刃が軋む、だが徐々にベルクトが押していた。

「ハアッ！」

フェイトはベルクトの刃を切り払い、高速後退して一旦距離を取る。ベルクトはそこに容赦なくライフルを連射する。

「クッ！」

フェイトはとっさにシールドを展開し、ライフルの弾を防ぐ。

そのまま横に流れながら黄色い魔力弾をベルクトに向けて放つ。

ベルクトはそれをとっさに下に高速移動して回避した。

「ウソだろ…何て強いんだい、ベルクトの奴…」

戦いの様子を眺めるアルフは驚きを隠せないでいた。

フェイトの実力はかなりのものだ。

見た目の幼さからは想像できない程の魔力量と戦闘センスがある。

少なくともそんじょそらの魔導師では相手にならない。

それは使い魔である自分が一番よく知っている。

そのフェイトを相手に、たった今魔法を使い始めたばかりのベルク

トが

ほとんど互角に戦っているのだ。

（軍人とは言ったけど…だからって初めて使う魔法でここまで…）
アルフは顔に驚きの表情を浮かべたまま、2人の模擬戦を眺めるのであった。

「フォトンランサー！」

フェイトはバルディッシュを前方に向け

先程とは比べ物にならない量の魔力弾を発射する。

やや離れた距離でベルクトは両肩の筒パーツを前方に展開した。

「デモニツクダークネス。」

2本の筒の間から、いくつもの漆黒の魔力弾が発射される。

二種類の魔力弾はそれぞれぶつかり合い、爆煙を巻き起こした。

爆煙で視界が閉ざされる。

（前…いや違う。上！）

ベルクトが気づいた時には、フェイトがかなり近くまで接近し
バルディッシュの刃を自分に振り下ろさんとしていた。

（チッ…間に合うか…）

舌打ちをしながらも、ベルクトはリングパーツを展開する。

「エナジーシエイブ。」

ベルクトがそう呟くのと同時に、彼の周りに黒いフィールドが発生する。

「何！」

突如フェイトは体が硬直して動けなくなった。

すぐに体制を立て直そうとしたが

カオスブレードを構えたベルクトが眼前に迫る。

「これで終わりだ！」

ベルクトがその刃をフェイトに振り下ろす。

だがフェイトはそれを紙一重でかわし、直後にベルクトの背後を取る。

「何だと！」

勝ちを確信した気持ちを覆され、目を見開いて驚くベルクト

だが気づいた時には、バルディッシュの刃が首にかけられていた。

こうして模擬戦はフェイトの勝利で終わった。

ビルの屋上に降り立った後、冷静な顔でベルクトは呟いた。

「やはり魔法戦闘はお前の方が上だな。」

「うん…でもすぐに追いつけると思う。ベルクトはとても強いよ。」
フェイトはどこか嬉しそうにそう言った。

「いや、エナジーシエイブやデモニックダークネスが決まったのも
運が良かったただだからな。」

もう少し攻撃発動までのタイムラグを正確に掴まなくてはな。」
「それでも初戦であそこまでフェイトと戦えたんだよ！アンタは十
分凄いよ！」

悪魔で冷静な態度を崩さないベルクト

そんな彼の肩バシバシ叩きながらアルフは嬉しそうに言った。

「でもこれなら思った以上に期待が出来そうだねフェイト！」

「うん…そうだね。改めてよろしくねベルクト。」

「ああ…」

2人に素直に誉められて、ベルクトはどこかこそばゆい気持ちになった。今までこんな事を感じた事は一度もなかった。

（だが悪くない…寧ろ心地よいな。）

自分が信頼されるのはこんなにも嬉しくなれるのかと感じた。こんな気持ちにもっと早く気づけたらと思ったのであった。

（…俺はここで生きていこう、あの2人の為に）
ベルクトが更に決意を固くするのであった。

第4話（後書き）

ということでベルクトの初戦闘でございます。

今後他のACEキャラが出る場合も、このような形になると思います。

ブラッドアークの中2臭い武器名も

リリカルなのはの世界になるとあまり違和感がないから不思議（笑）

次回では、ようやくなのはが登場すると思います。

先に断っておきますが、

この小説はベルクトとフェイトを主軸に進める予定なので
なのはの出番はあまりないと思うのでご了承下さい。

第5話（前書き）

ベルクトはフェイト共にジュエルシード探しを始める。
その先にいたのはもう1人の魔導師であった。

第5話

海鳴市、月村邸

茶髪の少女・高町なのはは、友人である月村すずかの家に同じく友人であるアリサ・バニングスと共に遊びに来ていた。

数日前までは極々平凡な小学3年生だったなのはだが偶然出会った異世界から来たというフレット

・ユーノ・スクライアの「ジュエルシードを集める」という目的を手伝うために、魔法少女になっていた。

3人は今、庭で紅茶を飲みながら会話を楽しんでいる。周りには月村邸で飼っている多数の猫がいる。

「しかし、相変わらずすずかの家は猫天国よね。」

「でも、子猫たち可愛いよね。」

すずかの方を向いてアリサとなのはが言った。

「里親が決まってる子もいるから

お別れもしなきゃならないけどね……」

少し寂しげにすずかが言う。

「そつか…それはちよつと寂しいね。」

「でも、子猫たちが大きくなっていつてくれるのは嬉しいよ。」
なのはの言葉を聞いて、すずかは微笑みながら言った。

「ッ！」

ふと、何かの気配を感じてなのはは目を見開く。
側にいたユーノも気づいているみたいだ。

（なのは！）

（うん、すぐ近くにジュエルシードが…）

（どうする？）

（えーと…えっと…）

なのははどやってこの場を離れようか考える。

因みにアリサとすずかは今、猫と遊んでいる。

だが、流石に何の理由も無く自分がいなくなったら
きつと怪しまれるに違いない。

（そうだ！）

するとユーノが突然、森の方へ駆け出していった。

「ユーノ君！？」

一瞬何事かと思うのはだが、すぐにその真意に気づいた。
その様子を見てアリサが不思議そうに尋ねる。

「ユーノ、どうかしたの？」

「何か見つけたのかも…ちょっと探してくるね。」

そう言っただけなのははその場をうまく離れるのであった。

反応があつた方へ2人は走っていく。

するとその先にはジュエルシードを興味深げに

いじっている、一匹の猫がいた。

猫がジュエルシードを銜える、するとジュエルシードが光りだした。

「発動した！」

走りながらなのはが言う。

するとユーノが突然立ち止まり、付近を見回した後
なのはの方を見上げてこう言った。

「ここだと人目が…結界を作らなきゃ。」

「結界？」

ユーノの方を向いてなのはが言う。

「最初に僕と出会ったときと同じ空間、魔法効果の生じてる空間と通常空間の置換進行をずらすんだ。」

そう言っただけユーノは後ろに振り向き、目を瞑った。

すると目の前に白い魔方阵が現れる。

「この付近くらいなら何とか…」

魔方阵が光だし、そこを中心に周りがグレーになっていく。

なのははその様子を見て驚いているようだった。

突然猫がいた方から巨大な光が発生した。

2人はそれに気づき、そちらの方に振り向く。

そして光がおさまった末にいたのは……

とてつもなく巨大化した先程の猫だった。

「ニャ~~~~~」

猫が2人の方を向いて一声鳴く。

なのはとユーノはただ呆然とその猫を見つめていた。

「あ、あれは…？」

「多分…あの猫の大きくなりたいて願いが、叶えられたんじゃないかな」と

呆然としながら尋ねるのはに、同じく呆然としながらユーノが答える。

それを聞いてなのはは、左手で頭をおさえた。

「だけど、このままじゃ危険だから元に戻さないと…」

「そうだね、あれじゃすずかちゃんも困っちゃうだろうし…」

そしてなのははレイジングハートを構えた。

「なのは達がジュエルシードを見つける少し前。

ベルクトとフェイトも月村邸の方に向かっていた。

因みにアルフは他のジュエルシードを探すために、別行動をとっている。

「この辺りだな…」

「うん、反応が大きくなってきた。」

2人は眼下に映る街や森を見渡す。

しばらくした後、ベルクトは巨大な猫を見つけた。

「あいつだな…あれがジュエルシードの力という奴か。」

「うん、多分暴走はしてないと思うけど…」

「余計な手間が省けて助かるな。」

淡々と話すベルクトにフェイトは疑問を投げかけた。

「あんまり驚かないんだね。」

「昨日今日までの出来事に比べれば大した事じゃない。」

それ以前に元いた世界には、コーリアンやインベードーみたいなのが沢山いたのだ。

今更巨大猫を見たくらいでは、ベルクトは驚かなかった。

巨大猫の方に向かっていこうとしたベルクトだが、ふと足を止めた。

ジュエルシード以外にも何か強力な力があるのを感じたからだ。

「フェイト、これは何だ？」

「多分だけど、私たち以外に魔導師がいるのかもしれない

この森の一定区域に結界もはってある。」

2人はまた辺りを見渡す。

するとベルクトの眼下に、白いバリアジャケットを身に纏った茶髪の少女が目映った。

「あいつだな。」

「うん、あの娘の狙いも恐らくジュエルシード。」

「だろうな、それ以外にここにいる理由がない。」

（だけど…母さんの為にも…ジュエルシードは…）

グツと拳を握り、表情が強張るフェイト。

ベルクトはそんな彼女の方を見て言った。

「俺がアイツを引きつける、その間にお前は封印を行え。」

「そんな、危ないよ!」

フェイトもベルクトの方を向いて心配そうに言った。

「アイツの魔力はフェイトと同じ位か、やや下回る程度という感じだ。」

手練れでも封印を終えるまでの時間稼ぎくらいは可能だ。」

「で…でも…」

ベルクトはフツと表情を和らげ、フェイトの頭に手を置いた。

「…母親が待っているんだろう?俺は大丈夫だから、早く封印してこい。」

「…うん、気をつけて。」

顔を赤らめながらフェイトは言った。

フェイトが後方に飛び去った後、ベルクトはふと思った。
（随分と丸くなったものだ…俺も。）

他人の為に何かをすると決意を新たにしたとはいえ
ああいうのはやはり自分のキャラじゃない気がする。

ベルクトは自分の中の急激な変化に少し戸惑っていた。

（だが…今は目の前の敵の排除が先だな。）

しかし直後、ベルクトはすぐに冷たい表情になる。

本来の彼の姿である戦場の兵士の顔だ。

ベルクトは可能なら相手の魔導師を殺す事も頭に入れていた。

一度生まれ変わり、他人の為に何かをすると決めたとはいえ
人間ほんの2、3日で完全に変わったりはしない。

本来のベルクトは目的の為にどんな障害でも必ず排除する性格だ。
基本的に赤の他人にかける情けなどは持つてはいなかった。

なので、自分が助けになろうと思ったフェイト達の障害になる可能性がある

目の前の魔導師を殺せるなら殺そうという考えも、彼にとっては当然といえるものだった。

後方のフェイトがバルディッシュからフォトンランサーを放つ。

それを合図にする様に、ベルクトは敵に向かって一直線に飛んでいった。

第5話（後書き）

というわけで次回、ベルクト対なのはバトル開始です。
終盤でようやく本来のベルクトらしさを多少出せた感じです。

しかし、なのはとの戦闘マジどうしよう…

二次創作にありがちな俺TUEEEE！になりそうでかなり不安だ…

こんな感じでグダグダ続いているこの小説ですが
どうか温かい目で見守ってくれると幸いです。

ご意見、感想、指摘、ヘタレ作者への叱咤激励などをお待ちしております。

第6話（前書き）

ベルクト、フェイト対なのは、ユーノの戦い

第6話

なのはがレイジングハートを構えたその時

背後から黄色の光が飛んできた。

その光は一直線に猫に直撃した。

「ニャ〜〜〜！」

猫が鳴き声をあげながらよろける。

なのはとユーノは光が飛んできた方に振り向く。

そこには、金髪のツインテールの少女と、茶髪の青年が空に浮かんでいた。

「だ、誰！？」

「今の、魔法の光…！」

予期せぬ乱入者の出現に2人は驚く。すると、茶髪の青年の方がこちらに向かって突っ込んできた。

ベルクトはカオスブレードを展開し、なのはに襲いかかる。

なのははとっさに飛んで、ベルクトの刃をかわした。

ベルクトはリングパーツを展開し、なのはを追う。

そして再びカオスブレードをなのはに向かって振り下ろす。

「ッ！」

反応が遅れたなのはは、手に持ったレイジングハートでそれを防ぐ。

ベルクトの攻撃を抑えながら、なのはは苦しい表情で言う。

「何で、こんな事…」

ベルクトは無言のまま冷たい目でなのはを見つめる。

そしてカオスブレードの出力を上げ、レイジングハートことなのは切り払った。

「きゃあああ!!」

なのはは悲鳴をあげながら、そのまま地面に叩きつけられた。

「なのは!」

ユーノが叫ぶ。

ベルクトは地面に降り立った。

（魔力はそれなりだが…戦闘に関しては素人だな。）

両者とも魔導師になって日が浅いとはいえ

ベルクトには軍人の頃に養われた基礎身体能力と

戦闘での判断力があるので、その点で優位に立っていた。

（今すぐに消す必要はないか…）

ベルクトはそう思っていた。

障害になるなら排除するに越したことはないが

少なくとも今、目の前にいる少女にはそこまでの脅威は感じられない。

出会った当初のバレルと同じで、今すぐだという気にはならなかったのだ。

最も、バレルの場合には、楽に死んでもらっては困るという理由もあったのだが…

（だが…向かってくる気力ぐらいは削いでおくか。）

そう思ったベルクトは、ようやく立ち上がったなのはに向かってデモンニックダークネスの発射態勢をとった。

ところが、ベルクトは背後から伸びてきた数本の光の鎖に縛られてしまった。

「何ッ…？」

驚いたベルクトは、背後を向く。

そこには魔法陣を展開し、そこから鎖を出す一匹のフェレット、ユーノがいた。

「ユーノ君！」

「僕は大丈夫！今の内にジュエルシードを！」

ユーノの言葉を聞いて、なのはは猫の方に飛んでいった。

（逃したか…マズいな、フェイトがやられるとは思わないが…）
鎖に拘束されたベルクトは、多少の焦りを見せていた。

一方、拘束しているユーノの方も安心はしていなかった。

（何とか捕らえたけど…この姿で何時まで捕まえておけるか…）
魔力消費を抑えたフェレット姿では、魔法の性能はどうしても落ちる。

それにもう一人の方の金髪の少女も、かなりの実力者だと感じられた。

今のなのはにはキツイ相手であろう。

このまま行けばやがてこちらが追い込まれるのは目に見えていた。

フェイトは猫からジュエルシードを取り出そうとバルディッシュを構える。

その時、背後から桃色の魔力弾が数発飛んできた。
フェイトはそれに気づき、横にかわした。

視線の先には先ほどの茶髪の少女、なのはがいた。

（まさか…！）

フェイトは不安になり、辺りを見回す。

そして、なのは後ろの方で光の鎖に拘束されてるベルクトを見た。

（ベルクト！）

フェイトは念話でベルクトに叫ぶ。

ベルクトはそれに対して冷静に答えた。

（俺は大丈夫だ、お前は封印を続ける。）

（でも…）

（最優先事項はジュエルシードだ。コイツは俺を抑えてる以上お前の相手はできない。

早くしないと、その魔導師に先を越されるぞ、その前にそいつを倒して封印を行え。）

（……）

（それに鎖の魔力も弱まってきている、もうすぐで抜け出せるだろう。

だから大丈夫だ、お前はお前の仕事を進めろ。）

（…わかった。）

フェイトはそう答えると近くの木の上に着地した。

なのはがフェイトの方を向いて叫んだ。

「何で、何でジュエルシードを狙ってるの！、あなた達の目的は何なの！」

「…答えても、多分意味がない。」

そう言つてフェイトは、サンダースマッシュャーの発射態勢をとる。なのはもそれを見て、デインバスターを撃つべく杖を構えた。

（多分、私と同年くらい…けどこの娘。）

何かを考えつつもなのはは、魔力をためる為に集中する。

互いのデバイスに光が収束していく。

そして、まさに発射されるという段階で

フエイトが発射を止め、上に飛び上がった。

「え！」

フエイトの意外な行動になのはは驚いた。

「なのは危ない！」

突如ユーノの叫び声が聞こえて、なのはは後ろに振り向く。

その眼前には紫色の閃光が迫っていた。

（さて、もう少しか…）

拘束されながらベルクトは考える。

鎖の力も大分弱まり、もう少しすれば力づくで抜けられるだろう。だが万一フエイトがあゝの魔導師に手傷を負わされる可能性もある。念には念をと思い、ベルクトは拘束から逃れている、リングパーツを展開した。

「エナジーシェイプ。」

ベルクトが呟くと同時に黒いフィールドが広がっていく。

すると、光の鎖は拘束力を失ってほどけた。

「そんな！」

予想外の事態に驚きを隠せないユーノ。

（魔法で作られた物質の力も一時的に奪うか…便利だな。）

そう思いつつベルクトは、ユーノに向かってライフルを数発発射する。

ユーノはとつさに避けたが、地面に着弾したライフルの爆煙で吹き飛ばされてしまった。

「うわあ！」

ユーノが吹き飛んだのを確認して、ベルクトは肩の筒を構える。

（フエイト、発射を止めて上に飛べ、そいつは俺が仕留める。）

事前にフエイトに退避勧告を念話で送り、魔力を集中させる。

2本の筒の間に赤褐色の魔法陣が展開し、光が収束していく。

「デモニツクダークネス・マキシマム！」

ベルクトがそう叫ぶと、紫色の閃光がなのはに向かって発射された。

なのはは慌ててシールドを展開するが、

デモニツクダークネスの閃光は不完全なシールドを破り

なのはをそのまま吹き飛ばした。

なのはは数メートル程飛ばされて、そのまま気絶してしまった。

「なのは！」

ユーノが名を叫びながらなのはの方に駆け寄っていく。

ベルクトはそれを見送った後、フェイトの方に向かって行った。

フェイトは丁度封印を終えたところだった。

目の前には普通のサイズに戻った猫が横たわっている。

「終わったか。」

「うん、ベルクト…大丈夫？」

「問題はない、大した怪我もしてないしな。」

「そう、良かった。」

ベルクトの無事を確認して、フェイトは安心して微笑みを浮かべた。そして2人はその場を離れようとしたが、その時ユーノと目があつた。

ベルクトは念話でフェイトに聞く。

（コイツらはどうする？当面の脅威にはならないと思うが。）

（…大丈夫、そのままでもいい。）

（わかった。）

会話を打ち切り2人は上空に飛んでいく。

ユーノはそれを、ただ黙って見ている事しかできなかった。

夜、マンシヨンの屋上で3人は互いの成果を確認しあっていた。

アルフは自分たち以外に魔導師がいる事に驚いていた。

「それで、アンタ達は大丈夫だったのかい？」

「多少の不覚はあったが、封印自体は滞りなく行つた。」

心配そうに尋ねるアルフに、ベルクトは冷静に答える。

「だが…奴らもジュエルシードを集めている以上、また会うこともあるだろう。」

現状こちらより弱いとはいえ、油断は禁物だな。」

ベルクトの言葉にフェイトとアルフは頷いた。

「でも…あの娘たちは何でジュエルシードを。」

フェイトは疑問を口にする。

「いわく付きの品だからな、狙う人間など山ほどいるだろう。」

ベルクトが答えた。

「ともあれ、今日は少し疲れたな…やはり魔法の戦闘はまだ慣れない。」

悪いが先に寝かせてもらおうぞ。」

「うん、お休みベルクト。」

そう言った後ベルクトは部屋に戻って行った。

ベルクトを見送った後、フェイトは今日の事を思い返した。

（ベルクト…）

心の中で彼の名前を呟く。

今までアルフと2人きりだったので

アルフ以外の人間（厳密には使い魔だが）にはあまり関わった事
がなかった。

そしてベルクトはフェイトの中ではかなりの好感を持たれている。

まだ出会って間もないとはいえ、自分たちの役に立ちたいと言っ
てくれた。

今日の戦いも、彼のおかげで順調に事が運んだと言える。

今まで自分に優しくしてくれたのは、アルフ以外にはほとんどい
なかったのだ。

自分を信頼し、助けようとしてくれるのは素直に嬉しかったのだ。

（ベルクト…）

もう一度彼の名前を心で呟く。

そんなフェイトの顔は大分赤くなっていた。

第6話（後書き）

ということで戦闘終了です。

前回ベルクトにあんな物騒なことを想像させといて

結局そんなに暴走しなかったのがちよつと失敗だったかな…

まだまだキャラを掘みきれてないみたいです。

その辺の描写が上達するように、今後も精一杯頑張ります。

ご意見、感想、指摘、ヘタレ作者への叱咤激励などをお待ちしております。

第7話（前書き）

海鳴温泉、再び相対するフェイト達となのは、ユーノ

アクセス数が10000を超えました。
全ての閲覧者の皆様に対して感謝です。
今後もしよろしく願います。

第7話

ベルクト達3人は、『海鳴温泉』という名前の旅館の近くに来ていた。

昨日のアルフの探索によると、この近くでジュエルシードの反応があったという事だ。フェイトとベルクトは正確な位置を絞り込む為に、側にある木の上に腰掛けて魔力を集中させていた。因みにアルフは温泉に入りに行っている。

「…まだ、少し遠いな。」

「でも、大分絞り込めてきた。」
目を瞑りながら2人はそう言った。

ふと、ベルクトは気になる事があり、フェイトの方を向いてこう質問した。

「フェイト、お前の母親というのはどういう人間なんだ？」

「え、どうしたの急に？」

フェイトもベルクトの方を見て尋ね返す。

「こんな危険な物を自分の娘に探しにいかせるんだ何か理由がありそうだと考えるのが普通だろう。」

ベルクトの言葉を聞いて、フェイトは少し俯きながら答える。

「母さん…今は体の具合が悪くて、自由に動けないの…だから私が集めなくちゃいけないんだ…」

「他に人材はいなかったのか？わざわざ自分の娘に危険な事を…」

「母さんは私を頼りにしてるから…私を信頼してくれてるから…だから…私が期待に応えなきゃ…」

どこか焦燥感すら漂わせる口調でフェイトは言った。

（親を本気で愛してるのか…これは俺にはわからんな。）

フェイトの言動を見て、ベルクトはそう思った。

物心ついた時から、父であったジル・バルドナは

もう1つの世界にいるバレルに会う事にしか興味関心が無く

自分はバルドナ・ドライブの為の、道具としてしか見られなかった。

そこには子供に対する親の愛情など、全く無かったと言っている。

なので、親を愛しく思う気持ちというのが、ベルクトにはわからなかった。

ベルクトがそう思っていた時、今度はフェイトが彼に聞いた。

「ベルクトはどうなの？」

「何がだ？」

「その…ここに来る前は、お父さんとかお母さんとか、いなかったの？」

「む…」

言われてベルクトは返答に困ってしまう。

何せ今、あれだけ母親への気持ちを聞かされたばかりなのだ。

そんな空気で、自分は父親を殺したなどとはとてもじゃないが言いづらい。

ましてや母親など、顔も名前も知らないのだ。

（どうするか…）

ベルクトが悩んでいたその時、アルフから念話が届いた。

（あゝもしもし？こちらアルフ、聞こえる？）

ベルクトは内心で助かったと思いつつ、アルフの念話に答える。

（ああ、聞こえている。）

（ちょっと見てきたよ、アンタ達の言ってた白い魔導師を。）

アルフの会話を聞いて、ベルクトが少し意外そうに言う。

（ここにいたのか？）

（ええ、茶髪でフェレットを肩に乗せてたからね、間違いないと思うよ。）

（そうか、お前から見てどうだった？）

（ん〜どうって事ないね〜、ベルクトやフェイトの敵じゃないよ。）

（そうか。）

くつろいだ感じでアルフは会話する。

今度はフェイトがアルフに念話を送った。

（こつちも少し進展、ジュエルシードの位置は大分絞り込めた。

今夜には捕獲できると思うよ。）

（ナイスだよフェイト！流石アタシのご主人様♪）

嬉しそうにアルフは答える。

（ありがとうアルフ、夜にまた落ち合おう。）

（ハ〜イ♪はあ、くつろぎくつろぎ…）

アルフの極楽そうな声が脳内に響く、それを聞いてベルクトは言った。

（アルフ、温泉にでも入っているのか？）

（その通り、とっても気持ちいいよ〜）

ベルクトも来れば良かったのに〜。）

アルフの声を聞いて、ベルクトはまた冷ややかな口調で念話を飛ばす。

（風呂に入ってくつろぐ…貴様はやはり犬か？）

（何度も失礼だね！アタシは狼だよ！）

（そんなだらけた感じでは、狼の迫力などまるで感じん。精々犬がお似合いだ。）

（何ですってええ！！）

（2人共…ケンカはやめて…）

またしても同じようなやり取りになり

フェイトは2人を宥めながら、内心でため息を吐いていた。

夜、3人は指定の場所で落ち合った後、

それぞれ散らばってジュエルシードを探し始める。

しばらくした後、アルフが橋の近くの川で

ジュエルシードの輝きを確認した。

「ビンゴ！見つけたよ、フェイト、ベルクト。」

少しした後、フェイトとベルクトがやってくる。

ジュエルシードからは、夥しい量の魔力が溢れているのが感じられる。

その光景を見ながらアルフはフェイトに尋ねた。

「アンタのお母さんは何であんな物騒な物を欲しがるのかねえ……」

少し俯き、目を瞑ってフェイトは答える。

「わからないけど…理由は関係ないよ。母さんが欲しがってるなら

……」

フェイトは顔を上げて目を開き、右手を前に出す。

「バルディッシュ、起きて！」

フェイトがそう言うと、右手の手袋の甲についた黄色い三角形が杖の形に変形する。

「さて、俺も一応構えておこうか……」

そしてベルクトも、首につり下がった赤と黒の羽のオブジェを掴む。

「起動しろ、ブラッドアーク。」

ベルクトがそう言うと、体が光に包まれ、何時もの魔導師姿になった。

「封印するよ、アルフ、ベルクト、サポートをお願い。」

「へいへい。」

「わかった。」

そしてフェイトはジュエルシードの封印を始めた。

封印が滞りなく終わったその時だった。

「あれは！」

なのはとユーノがその場にやって来た。

「あゝらあらあら、子供はいい子でって言わなかったかな？」

アルフが白々しい声で言った。

「それを、ジュエルシードをどうする気だ！それは危険な物なんだ
！」

ユーノがフェイト達に向かって叫んだ。

「さあな、答える意味も理由も無い。」

ベルクトが前に出ながら言う。

「それにアタシ言ったよね？いい子にしないとガブツといくつて
……」

アルフはギロリと目を光らせる。

すると、人の姿から巨大な狼の姿へ変化を遂げた。
側にいたベルクトは、感心したように言った。

「…前言撤回だなアルフ、お前は立派な狼だ。」

「嬉しいね、やっと狼って言ってくれたよ。」

その光景を見ながらユーノが言った。

「やっぱり、アイツはあの子の使い魔か！」

「使い魔…？」

なのはの洩らした疑問にアルフが答えた。

「そう、私はこの子に作ってもらった魔法生命
命と力の全てを使ってこの子を守るのさ！」

アルフは後ろを向いてフェイトに言った。

「先に帰ってて、ここはアタシとベルクトで片付ける。」

「…無茶しないでね。」

「わかってるって！行くよベルクト！」

「了解した。」

アルフは飛び上がって、ベルクトは一直線に、
それぞれなのはに向かって突っ込んでいった。

「あ！」

突然の行動になのはは慌てる。

しかし、なのはに襲いかかる寸前で

ユーノが防御魔法を唱えてシールドを展開し、2人の攻撃を防いだ。

「なのは、あの娘をお願い！」

防御魔法を維持しながらユーノは叫んだ。

シールドを破ろうとしながらアルフが叫ぶ。

「勝てると思ってるの！」

「やってみせるさ！」

同じくカオスブレードでシールドを攻撃しながら両者のやり取りを
見るベルクト。

（固いな…この前の鎖といい、なかなかの手練れの様だ。）

ふと前回の戦闘を思い出したベルクトは、アルフに念話を飛ばす。

（アルフ、上に飛べ。）

そう言いながら、ベルクトはエナジーシェイプの構えをとる。

「あれは…ええい！」

ユーノはそれを見逃さなかった。

そして素早く移動魔法を唱える。

「何だ…？」

「マズイ…！」

2人がそう感じた時には既に遅かった。

ベルクトとアルフの姿はそのまま消えてしまった。

相対するなのはとフェイト、

しばらくしてフェイトから先に口を開いた。

「で、どうするの？」

「話し合いで何とか出来ないかな…？」

「私たちはジュエルシードを集めなくちゃいけない…それはあなたも同じ事…」

だつたら私とあなたは、ジュエルシードを求めて争う敵同士って事になる。」

フェイトの言葉になのはが叫ぶ。

「だから、そういうのを簡単に決めつけない為に！話し合って必要なんだと思う！」

フェイトは目を閉じる。

「話し合うだけじゃ…言葉だけじゃ何も変わらない…変わらないんだ！」

目を見開き、瞬時になのはの背後に周り、バルディッシュを振るう。とっさになのは下にかわす。再びバルディッシュが襲ってくる。なのはそれを飛び上がってかわす。

フェイトもなのはを追って空を舞う。

飛び上がりながらなのはは叫ぶ。

「だからって！」

「賭けて、互いのジュエルシールドを1つずつ。」

言いながらフェイトは更に高く飛び上がり

バルディッシュに魔力刃を形成させ、なのはに襲いかかった。

なのははシールドを展開してそれを防ぐ。

フェイトは一旦攻撃を止めて距離をとり、バルディッシュを構える。

足元に黄色い魔法陣が展開する。

フェイトはサンダースマッシュを発射した。

それに対してなのはもレイジングハートを構え、ディバインバスタ

ーを放つ。

黄色の閃光と桃色の閃光が互いにぶつかり合う。

なのはは叫んだ。

「レイジングハート！お願い！！」

すると桃色の閃光は威力を増し、黄色の閃光を打ち消した。

地上で様子を見ていたユーノは驚いていた。

「なのは…強い！」

同じく様子を見ていたアルフが呟く。

「けど…甘いね。」

デイベインバスターはフェイトには当たらなかった。

とっさに避けたフェイトはなのはに向かってバルディッシュの刃を振り下ろした。

「…!!」

なのはが気づいた時には、バルディッシュの刃が首にかけられていた。

すると、レイジングハートのコアからジュエルシードが一つ出現した。

「レイジングハート…何を!？」

「…きつと、主人思いのいい子なんだよ。」

フェイトがジュエルシードを受け取る。

その時なのはの背後に影が迫った。

「え!」

「何…!!」

なのはもフェイトもそれを見て驚く。

次の瞬間、なのははそれに思いきり蹴り飛ばされた。

「きゃあああ!!」

態勢を崩しながらなのはは落下していく。

「お別れだ…」

先程の影ーベルクトは落下していくなのはに向かってデモニックダークネスを撃とうと構える。

2本の筒の間に魔法陣が展開し、光が収束していく。

「やめて!」

だがフェイトはそれを制止した。

ベルクトはフェイトに尋ねる。

「何故止める？」

「ジュエルシードはもう手に入れた。

これ以上は必要ないよ……」

だがベルクトはそれを拒んだ。

「奴らはまだジュエルシードを所持している。いずれにせよまた敵対する事になる。」

だったら今この場で排除した方がいい。」

「ま、待って！」

フェイトの言葉を無視し、デモニツクダークネス・マキシマムを放とうとする。

すると今度は地上にいたアルフがベルクトに向かって叫んだ。

「ベルクト！やめておくれよ！」

ベルクトがアルフの方を向く。アルフは更に叫んだ。

「ジュエルシードは手に入れたんだ！もういいじゃないか！

フェイトだっては本当はこんな争いは望んじやいないはずだ……！

フェイトは優しい子なんだ、だからあの娘の気持ちを考えてやってくれ！」

黙って聞き続けるベルクト。

そして、両肩の筒を元に戻し、フェイトの方を向いて言った。

「すまない、フェイト……」

「ううん、大丈夫……」

そして2人は地上に降り立った。

「帰ろう、アルフ、ベルクト……」

アルフもフェイトの方へ行き、3人は歩き始めた。

「待って！」

丁度今、地上に降り立ったのはが3人を呼び止める。

フェイトは振り向かずに行った。

「出来ればもう、私たちの前に現れないで。」

今度会つたら、どうなるかわからないから…」

「名前…あなたの名前は！」

なのはが慌ててフェイトに尋ねる。

フェイトは目を瞑り答える。

「フェイト…フェイト・テストロッサ。」

「わ、私は…」

なのはも名前を言おうとするが、その前にフェイトとアルフが飛び去ってしまった。

1人残ったベルクトはなのはの方を振り向いて言った。

「フェイトに感謝するんだな…でなければお前は消えていた。」
冷たく言い放つベルクト。

なのはは背筋に冷たい物を感じつつ、ベルクトに尋ねる。

「あなたは…何なの？あなたはあの娘の…フェイトちゃんの何？」
言われてベルクトは沈黙する。

しばらくして口を開き、こう言った。

「俺は、ベルクト…わけあってフェイトに協力している…それだけだ。」

そしてベルクトはその場を後にした。

「フェイトちゃん…ベルクト…さん…」

なのははベルクトが去った方を静かに見つめていた。

第7話（後書き）

ということで海鳴温泉編終了です。

ジル・バルドナについてはほとんどが自己解釈ですが
ACE3内のベルクトの会話を聞く限りでは
まともな扱いはされなかったんだろうなと思い
こんな感じになりました。

ベルクトがやや暴走。

やはり本来の彼はこういう冷たい感じなんだろうなあと考えています。

「こんなんベルクト違う！」とか思った方、申し訳ないです…

次回、いよいよベルクト以外のACEキャラが登場予定です。

正直ベルクトの介入でフェイト側にパワーバランスが傾いてるので
ここいらで修正を…っていう理由も含んでたりしますが…

ご意見、感想、指摘、ヘタレ作者への叱咤激励などをお待ちしてお

ります。

第8話（前書き）

三たび対立するフェイト達となのは達
そして現れる新たな来訪者…

第8話

夜、あたりはすっかり闇に包まれている。

フェイトもアルフも大分前に寝てしまっている。

そんな中ベルクトは、ソファーに横たわりながら考えていた。

（親から愛されてないか…嫌な部分が似ていたものだ。）

話は少し前に遡る。

マンシヨンの屋上でアルフとベルクトは会話していた。

「あの娘はあれだけ必死なんだけど…あの娘のお母さんはそうじゃないんだ。」

「フェイトがあれだけ気にかけているのか？」ベルクトの言葉に対して、アルフは顔を俯かせたまま呟く。

「あの母親は…プレシア・テストロッサはフェイトの事を何とも思っちゃいない。」

「ジュエルシードを集めさせてるのも全部自分の為なんだよ。」

「……………」

「それでもフェイトは苦しいのを全部我慢してジュエルシードを集めようとしてる。」

本当だったら前みたいに他人と争ったりはしたくないはずなんだよ…でも、あの娘は母さんの為だからって言って無理してるんだよ…」

アルフの目にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「アタシ…辛いんだよ、そんなフェイトの姿を見るのが。」

涙ながらにアルフは訴える。

「……」

ベルクトは黙ったまま考える。

以前、自分とどこか似ていると感じてはいたが
まさかこんな部分で共通しているとは思わなかったのだ。

子を道具の様に扱う親

ジル・バルドナもそうだったのだから。

いや、自分の父は自分を子供とさえ思っていなかったのだ。
そしてベルクトはその果てに親の殺害と

自分の存在理由が無い世界の滅亡という道を選んだ。

フェイトもふとした弾みで、かつての自分と同じ様な道を辿る可能性もある。

だがそうなる可能性がぐっと減る決定的な違いもあった
それは

「だからこそ、俺たちが支えてやる必要があるだろう？
フェイトの心が折れないように。」

かつての自分の周りには助けになってくれる人などいなかった。
だが、フェイトは違う。

アルフという大切な家族がいて、今は自分もいる。

だったら自分達がフェイトの助けになってやればいいのだ。

ベルクトの言葉を聞いて、アルフは顔を上げる。

「うん…そうだよな、アタシ達が頑張らないと…」

だから、ベルクトも約束してほしい。」

アルフは真剣な目つきでベルクトに言った。

「前も言ったけどフェイトは優しい子だ。本当は人が傷ついたりましてや死ぬのなんか見たくはないはずなんだよ。」

「そうか。」

「だから、またあの白い魔導師や、他の連中と争うような事になっても

その…あまりやりすぎないでほしい。」

「……………」

「確かに、アンタは軍人だったって言ってたから疑問に思うかもしれない。

でも、フェイトに辛い思いをさせない為に…」

こちらを見て言うアルフを、真っ直ぐに見返すベルクト。

暫くの沈黙の後ベルクトは言った。

「わかった…フェイトによほどの危険がない限りは、お前の言うとおりにしよう。」

「そうかい…ありがとなベルクト。」

アルフは少し笑みを浮かべながら言った。

そして現在に至る。ソファから体を起こし、ベルクトはまた考える。

（俺は…本当にアイツの為に動いてるのか？）

アルフの言うとおりなら、フェイトは自分ではなくほとんど母親の意志で動いている事になる。

だとしたら、それに協力している自分も、真に彼女の助けにはなっていないのではないか？

この世界で新たな命を得て、今度は他人を助ける事をしてみようと決心した。

そして、フェイト達の手伝いをする事と決めたのだ。

だが、今している事は本当にフェイトの為にしているのだろうか？

そこまで考えてふと思考をやめ、ベルクトは思った。

（本当に変わったものだ…俺も。）

以前も何度か自覚していたが、やはり自分は丸くなったと思う。

利害関係なしで他人と関わりを持ち、お互いを信頼しあって生きる。

そして信頼した人間に対して、心配したり、情けをかけたりする。

そんな生活に充実感を覚え始めていた。

前の世界で常に1人だったベルクトは、最初は困惑した事もあったが今ではそれも悪くない、寧ろ今の自分の方が良いと感じつつあったのだ。

（まあ、細かい事はフェイトの母親に会った時にでも考えればいい今は目の前の事に集中するでしょう。）

そう思った後、ベルクトは眠りについた。

だが彼はまだ知らなかった。
フェイトの母親が自分の父、ジル・バルドナ以上に冷酷な人間だ
という事を…

翌日のまた夜遅く

3人は海鳴市のビル街のとあるビルの屋上にいた。

「大体この辺りにあるのはわかるんだけど…大まかな位置しかわ
からないんだ。」

「確かにこれだけ入り組んだ地形だと、探すのも骨が折れるな。」
フェイトの言葉にベルクトが答える。

そしてフェイトはバルディッシュを掲げてこう言った。

「ちよつと乱暴だけど…周辺に魔力流を撃ち込んで強制発動させる
よ。」

「ちよつと待った、それアタシがやる。」

フェイトが始めようとした時、狼形態のアルフが前に出ながら言っ
た。

「大丈夫？結構疲れるよ…」
心配そうにフェイトは言う。

「心配ないよ、このアタシを誰の使い魔だと思いで？」

「わかった、じゃあお願いね。」

そしてアルフが始めようとした時、今度はベルクトが口を開いた。
「始める前に1つ聞かせてくれ。」

2人は後ろにいたベルクトの方に振り向く。

ベルクトはフェイトを見てこう聞いた。

「フェイト、お前は母親が好きか？」

「え？」

「母親の事を本当に大切だと思っているのか？」

脈絡のない質問に少し困惑するフェイトだが、やがてこう答えた。

「うん、母さんは私にとって本当に大切な人だよ……」

「そうか……お前は優しい奴なんだな。」

フェイトの答えを聞いてベルクトはそう言った、だがその顔はどこか釈然としない。

「……ありがとう。」

ベルクトの顔に疑問を抱きながらも、フェイトは頬を赤くしながらお礼を言った。

ベルクトが言ったのは皮肉でも誤魔化しでも何でもない、本音だった。

フェイトの母親に対する気持ちを見て、理解できない以上にフェイトは本当に純粋に優しい人間なんだと感じていた。

（血の繋がりでここまで愛せるとはな……）

境遇が似ているとはいえ、自分とは大違いだと感じていた。

そして、だからこそその優しさによって心が折られないようにする
為にも

自分やアルフが最大限サポートしなければと、
決意を新たにもするのであった。

2人のやり取りを見終わった後、アルフが言った。

「じゃあ、そろそろ始めるよ！」

アルフがそう言うと、彼女の足下にオレンジの魔法陣が表れた。

「はああああ！！」

アルフが魔力を集中する、あたりには雷鳴が轟き出した。

同じ頃、なのは達もジュエルシードを探していた。

「こんな街中で強制発動！？」

別々に探していたユーノが異変に気づき、叫んだ。

「結界…間に合え！」

ユーノの足下にグリーンの魔法陣が展開した。

ビル街の一角からジュエルシードの光が見えた。

「見つけた！」

フェイトがそれを見て叫んだ。

「だが…奴らも近くにいますようだな。」

ベルクトがそう言ったと同時に、世界の色が変わっていく。
そしてフェイトはバルディッシュを掲げた。
「早く終わらせよう…バルディッシュ！」

丁度同じ時、なのはもジュエルシールドを封印すべく、レイジングハートを構えていた。

「リリカルマジカル！」

レイジングハートに桃色の光が収束していく。

「ジュエルシールド、シリアル19！」

バルディッシュにも黄色の光が収束していく。

「封！」

「印！」

互いのデバイスから閃光が放たれ、ジュエルシールドに直撃した。

そして光が収まった後、ジュエルシールドが鈍い光を出しながら宙に浮いていた。

「なのは！早く確保を！」

ユーノが近づきながら言った。

「そうはさせるかい！」

上空からアルフが襲いかかってきた。

ユーノはとっさになのはの前に飛び出し、シールドを張る。

シールドに阻まれたアルフは一旦後方に下がって距離をとった。

ユーノはアルフを引きつけて、なのはから離れていった。

そしてシールドが割れた時、目の前にはフェイトとベルクトがいた。

フェイト、ベルクトらと対峙するのは。

（目的がある者どうし、ぶつかり合うのは仕方ないのかもしれない……）

なのはは一步前が出る。

（だけど……知りたいんだ！）

そして、なのははフェイト達の方を見つめて言った。

「この前は自己紹介できなかったけど、私、なのは！高町なのは！私立聖祥大付属小学校3年生！」

なのはがフェイト達に自己紹介する。

だが、フェイトは黙ってバルディッシュを構えた。

「……！」

なのはもレイジングハートを構える。

そして、フェイトがバルディッシュを振り上げた時、ベルクトがそれを止めた。

「待て、フェイト。」

ベルクトに止められ、バルディッシュを降ろすフェイト。
ベルクトは更にこう言った。

「アイツに少し話がある、下がってくれ。」

「…うん。」

ベルクトはなのはの方を向いて口を開く。

「なのはと言ったな、貴様は何を望んでいる？」

少し俯きながらなのはは答える。

「私は話し合いがしたいんです、フェイトちゃんやベルクトさんと

…」

「話し合いをして何か意味があるというのか？」

「フェイトちゃんは言っていました…話し合うだけじゃ何も変わらないって…」

顔を上げ、口調を強くしながらなのはは続ける。

「けど…言葉にしないと伝わらない事も、きっとあるはずなんです…！」

「伝えたところでどうなる？それでは何も解決などしない。」

「何もわからないままぶつかり合うのは…私、嫌なんです！」

口調を荒げるなのはに、ベルクトは更に聞く。

「なら聞こうか、貴様は何でジュエルシードを狙う？」

「私がジュエルシードを集めるのは、ユーノ君のお手伝いの為…」

お手伝いを始めたのは偶然だったけど、今は自分の意志でそうしてる…

ジュエルシードによって、周りの人が傷つくのは嫌だから！

これが…私の理由！」

なのはの答えを聞いて、目を瞑り俯くフェイト。

だが彼女が口を開く前にベルクトが言った。

「なら貴様のジュエルシードを渡せ、それで解決する。」

「え!？」

思いがけない言葉になのはは驚く。

「フェイトも本当はお前とぶつかり合うのを望んではない。それが嫌なら貴様がジューエルシードを渡せばいいだろう?」

「そ、それは…」

「当然出来ないだろう? 無論俺たちがジューエルシードをお前に渡す事も出来ない。」

困惑するのには対して、ベルクトは冷たく言い放つ。

「言葉で相手に思いを伝えるのは簡単だ。だがそれでは何も変わらない。」

貴様は何も知らないままぶつかり合うのは嫌だと言っていたが知ろつが知るまいが争い合うのには変わりはない。」

ベルクトは目を瞑って続ける。

「貴様はあのフェレットの為にジューエルシードを集めている。

だが我々も同じように集めている。それを共有したり譲り合ったりは出来ない…」

ベルクトが言い続ける途中で、フェイトが口を開いた。

「ベルクト、もういい…」

そう言いながらフェイトはバルディッシュを構える。

ベルクトはフェイトの方を見て、念話で話しかけた。

(いいのか?)

(大丈夫…母さんの為には仕方ない事だから…)

フェイトは上空に高く飛び上がり

バルディッシュに魔力刃を形成してなのはに襲いかかる。

「フェイトちゃん!」

なのはもそれを見てレイジングハートを構え

降下してくるフェイトに向かっていく。

そして両者が正にぶつかり合うというその時だった。

「止まれ!!」

突如何者かの声が響いたかと思うと

なのはとフェイトの間に青白色の魔法陣が表れ、まばゆい光が迸る。そしてフェイトのデバイスは光の中心にいた人物の右手に持つライフルによって

なのはのデバイスは左手に装備されていた盾によって受け止められた。

そして光が収まった時、その場にいた全員が驚愕した。

「ウソだろ…」

遠くでユーノと戦っていたアルフが言う。

「あれは…」

同じくユーノも驚いている。

「ベルクト…さん…!?!」

「ベルクトがもう1人…!?!」

なのははとフェイトも目の前の人物を見て、驚きを隠せない。

だが、誰よりも驚いていたのはベルクトであった。

青白色のバリアジャケットと濃紺色のマントを身に纏い

ライフルとシールドを構えるという、見たことない格好をしているがその顔や髪型は見間違えるはずがなかった。

「馬鹿な…何故お前がこの世界に…!!」

目を見開き、その人物に目が釘付けになるベルクト。

「やっぱり…お前だったんだな、ベルクト…」

その人物はベルクトを見下ろしながら彼の名を言い

そして己の名前と目的を言った。

「俺はバレル・オーランド、時空管理局より君たち5人の任意同行もしくは強制連行を命じられている、一緒に来てもらいたい。」

第8話（後書き）

ということでACE3より、主人公のバレルが登場です。

散々引ッ張っておきながらチョイ役ですが…

彼は次回に大暴れする予定ですから今回はこれで勘弁してください。

話が進む度にベルクトが理屈臭いキャラになっていく気がする…

いや、私的にはACE3を見る限りでは、ベルクトって結構

ベラベラ喋るタイプに見えてましたから…

でも、これは流石にやりすぎたか…？

次回、バレルも巻き込んだバトル勃発の予定。

ご意見、感想、指摘、ヘタレ作者への叱咤激励などをお待ちしております。

第9話（前書き）

突如現れたバレル
そして始まる大混戦

第9話

ベルクトは驚きを隠せない。

何故バレルがここにいるのだ。

何故今になってこのような形で現れたのだ。

だが何より気になった事は

（あいつから魔力反応があるだ…！）

宙に浮いて、なのはとフェイトのデバイスを受け止める。

そんな事は生身の人間には到底出来ない。

ましてやあの奇妙な格好、魔導師が纏うバリアジャケットにしか見えない。

どう考えても今、目の前にいるバレルは魔導師としか言えなかった。

すると、突然バレルに向かって黄色い魔力弾が放たれた。

「クッ！」

バレルは左手の盾―スティールディフェンサーを構え、それを防ぐ。

魔力弾を放ったのはアルフであった。

（フェイト、離れて！）

念話でフェイトに呼びかけるアルフに、ベルクトが同じく念話で言

う。

（アルフ、何を！）

（アイツがアンタの何なのかは知らないけど

アイツは時空管理局から命令を受けてるって言ったんだ！

このまま捕まるのはマズいんだよ！）

言われてベルクトは黙り込む。

時空管理局についてはフェイト達に出会った初日に大まかな説明は聞いている。

自分たちの行為は、時空管理局に目をつけられるとマズいというの
も教えられていた。

そしてバレルはその時空管理局と関わりがありそうなのも間違いない。

（…やむをえないか。）

本来このような場所でバレルと争うなど、ベルクトには望ましくない事だ。

だが、バレルがフェイト達の敵となりうる者と関わりがあるという
なら仕方ない。

ベルクトは戦闘態勢をとるのであった。

「いきなり撃ってくるなんて、無茶苦茶だよ…」

バレルが盾を下ろし、困ったように言う。

すると突然、近くにいたフェイトがジュエルシードに向かって飛ん
でいった。

「まずい！ジュエルシードを！」

地上にいたユーノが叫ぶ。

するとバレルが再び盾をフェイトの方に構え、叫んだ。

「スティールワイヤー！」

すると盾の先から、銀色に光る鎖に繋がれた大鋏が発射される。

「ああっ！」

フェイトはジュエルシールドに辿りつく前に、鋏によって捕縛された。

「フェイト！」

アルフが叫ぶ。

「出来れば手荒な真似はしたくない…大人しくついてきてくれないか？」

バレルがフェイトに向かって言う。

すると、今度は2人の間に黒いフィールドが展開する。

そして、バレルのスティールワイヤーの力が弱まり、フェイトの拘束を解いた。

「今のは…！」

見覚えのある攻撃だと思いつつ、ふとバレルは下を見る。

そこにはエナジーシェイブを放ったベルクトがいた。

ベルクトはカオスブレードを形成し、バレルに向かって突っ込む。

それを見てバレルも左手の甲の魔力刃ーレーザーエッジでベルクトの刃を受け止める。

「ベルクトッ！」

「お前の相手は俺だ…！」

その光景を呆然と立ち尽くしながら見つめるのは。
すると突然、ユーノからの念話が響いた。

（なのは！今の内に早くジュエルシールドを！）

（あ……うん！）

その事に気づいたなのはジュエルシードに向かっていく。
だが、フェイトのフォトンランサーによってそれは止められた。

「フェイトちゃん！」

「……………」

フェイトは黙ってバルディッシュを鎌状に変形させ、
瞬時になのはの背後に回り込む。

それに気づいたなのはが、更にフェイトの後ろに回り込む。

そしてレイジングハートを構え、ディバインバスターを放った。

フェイトはそれをシールドを展開して受け流す。

「フェイトちゃん！」

フェイトに向かってなのはは叫んだ。

「お願い、教えてほしいの！フェイトちゃんは どうしてジュエルシ
ードを集めるの！」

「……………」

「このまま何もわからずにただ争うしかないなんて…私、嫌だ！」

「……………私は………」

なのはの言葉に戸惑い、口が開きかけたその時

「フェイト、答えなくていい！」

アルフがそれを止めた。

「優しくしてくれる人達の所で、又ク又ク甘ったれて

暮らしているガキンちゃんになんか、何も教えなくていい！」

アルフの言葉に今度はなのはが戸惑う。

すると今度は、右側から多数の黒い魔力弾が飛んできた。
なのははそれをシールドで防ぐ。

飛んできた方向には筒を構えたベルクトがいた。

ベルクトは俯きながら呟く。

「高町なのは…お前は甘い…」

「え!?!」

「ユーノという奴の手伝いをする、それがフェイトと争う原因になるんだよ…」

「そ、そんな筈はない! 私はフェイトちゃんの事を知りたいだけ! そして出来るなら力になりたいの!」

(!!)

なのはの言葉にフェイトが驚く。
だが、ベルクトは更に続ける。

「…それが甘いと言うんだ。」

「だからって!」

「目の前にある全ての人間を救えるほど…」

ベルクトは顔を上げ、なのはに叫ぶ。

「世界は…甘くはない!」

「!!」

ベルクトの言葉になのはが動揺する。

「確かに俺も出会ってからまだ日が浅い…フェイトの全てを知っているわけではない…だが!」

ベルクトの筒パーツの間に魔法陣が表れる。

「あのフェレットもフェイトも助ける…そんな甘い考えのお前にフェイトの気持ちなどわかるものか!」

ベルクトはデモニックダークネス・マキシマムを放とうとする、だが

「デイスパーションダガー！」

突如飛来してきた2機の鋏形の物体から放たれた魔力弾によって発射を止められた。

そして3人の近くに腰に6つの鋏のようなパーツを備えたバレルが現れた。

その姿を見てベルクトは驚く。

（やはりイクスブラウと同じ…しかも自由に形態を変えられるのか！）

3人を見ながらバレルは思った。

（あつちの白い娘は抵抗する気配は無いな…

いくらTフォームでも3人同時はキツイ…とりあえずは！）

バレルは腰の鋏を全て分離させた。そして左手を前に掲げて叫ぶ。

「行け、デイスパーションセイバー！」

ダガーを含めた大小8つの鋏がフェイトとベルクトの

周囲を飛び交い魔力弾を同時に放つ。

ベルクトはそれを何とかかわしていくが、フェイトは避けきれず魔力弾に当たってしまう。

「ああああっ！！！」

「フェイトー！！！」

落下していくフェイト。それをアルフが受け止めた。

「…バレル！」

珍しく怒りを露わにしてベルクトがバレルに向かっていく。

バレルは飛ばしていたディスプレイションを体に戻した。

「イクスブラウ、Bフォームに移行！」

バレルが叫ぶと、ディスプレイションダガーとセイバーが消え、バレルの両足の外踝と右肩に実体剣が装備される

バレルは右肩の剣を両腕で掴んだ。

「ツーハンデッドブレイカー！」

バレルが剣を振るうと、衝撃波が飛んでいく。

ベルクトは難なくかわしてバレルに向かって刃を振るう。

バレルはそれを実体剣で受け止める。

「ベルクト、お前の目的は何だ！」

ベルクトを切り払いバレルが叫ぶ。

「それを知る意味はお前にもない！」

ベルクトが右手のライフルから魔力弾を放ちながら言う。

「ジュエルシードは危険なんだぞ！それをわかっているのか！」
魔力弾をかわし、バレルも右手のマシンガンから魔力弾を放つ。

「あれが何だろうと俺には関係ない！俺には俺の目的がある！」

バレルの魔力弾をかわし再び上空から襲いかかるベルクト。

バレルはそれをかわし、今度はレーザーエッジを振るう。

だが、その刃はベルクトの力オスブレードに止められる。

一進一退の攻防が続いていた。

（埒が明かない…それなら！）

バレルはベルクトを切り払い、一旦距離をとる。

ベルクトはバレルに向かって突っ込む。

バレルはそれを見て実体剣を構えた。

「ツーハンデッドストーム！」

バレルが叫び、剣を振り回すと、周囲に多数の衝撃波が飛び交った。

「ぐあああ!!」

ベルクトはそれをまともに食らってしまふ。
バリアジャケットでダメージを軽減できるとはいえ、被害は大きかった。

「くそっ!...」

部が悪い事を悟るベルクト。

だがその時、黄色い魔力弾がバレルに向かって発射される。
とつさにバレルはそれをかわす。

「ベルクト、今日はもったいいい!撤退するよ!」

人間形態になったアルフが、気絶したフェイトを抱えながらベルクトに叫んだ。

「...仕方がない...か。」

ベルクトはバレルに背を向け、アルフの方に飛ぶ。

「待てベルクト!」

バレルはその後を追う。

ベルクトは追われながらバレルに言った。

「バレル...お前には感謝している。」

「え...!?!」

「最後の最後で俺に大切な事を教えてくれた。」

ベルクトの意外な言葉にバレルは驚く。

「だが...その事と、今はまた別の話だ。」

「ベルクト...」

「お前が時空管理局と関わりがある以上...俺は再びお前の敵となる。」

ベルクトがアルフの前に降り立つ。

そしてすぐに、3人の姿は消えてしまった。

「…逃がしたか。」

3人が消えた場所に立ち尽くし、バレルは呟く。

（けど…やっぱり変わってたな、あいつからあの嫌な感じがしなかったし。）

バレルがそんな事を考えていると、彼の前になのはとユーノが降り立った。

「えっと…君たちはついてきてくれるって事でいいのかな？」

バレルの問いに、2人は頷いて答えた。

その時両者の間に魔法陣が表れ、そこに緑髪の女性が映し出される。

「バレル君、お疲れ様。」

「すみませんリンディさん…何人かは逃がしてしまいました。」

緑髪の女性―リンディ・ハラオウンにバレルは申し訳なさそうに言った。

「まあ、君のイクスブラウの実戦テストって理由もあったわけだし…多分、大丈夫だと思うわ。」

リンディが答える。

すると、彼女の横に今度は緑髪の女性が顔を覗かせた。

「バレル…本当に、ベルクトだったの？」

「うん…間違いないよフェイ。」

緑髪の女性―フェイ・ロシユナントにバレルは答えた。

「まあ、詳しい事はアースラに帰ってきてから話しましょう。」

ロストログアの回収と、彼女達をお願いね。」

「わかりました。」

そこまで言った後、魔法陣は消滅した。

「さてと…」

ジュエルシードを回収した後、バレルはなのは達の方を見て言った。

「任意同行という形にしてくれて感謝するよ。」

君たちをこれからアースラに連れて行こう。」

そしてバレルがなのは達に近づき何かを呟くと、3人の姿は瞬時に消えた。

こうしてなのはとユーノは、アースラに招かれる事になった。

第9話（後書き）

ということで戦闘終了、何気にフェイもちよこつと登場。

バレルはやはりリクスブラウというわけですが
任意で全てのフォームが使えるという少しチート臭い性能に。
でもデバイスの概念考えると、これが無難かなと
思ったわけです。ハイ…

明日から少し忙しくなるので、更新が遅れる可能性があります
そのまま書き逃げという事には絶対致しませんので
応援してくれてる方は、どうか気長にお待ち下さい。

ご意見、感想、指摘、ヘタレ作者への叱咤激励などをお待ちしてお
ります。

第10話（前書き）

プレシアと対面するベルクト
そしてもう1人…

応援、感想、アドバイスなどのメッセージありがとうございます。
これらを励みにより一層頑張りたいと思います。

第10話

翌日の午前中。

ベルクト達はマンションの屋上にいた。

今日はフェイトの母にこれまでの報告を兼ねて、ジュエルシードを渡しに行くのだ。

ちなみにフェイトはケーキの入った箱を抱えていた。

母親へのお土産である。

「ベルクト、1つ聞きたい事があるの。」

母親の場所に行く前に、フェイトはある意味当然であろう質問をした。

「あのバレルって人は何者なの？」

そう、ベルクトにそっくりな魔導師についてだ。

本当は昨日帰ってきてからすぐに聞くつもりだったのだが

ベルクトが疲れたと言って先に寝てしまったので聞けなかったのだ。

「それはアタシも興味があるね。」

フェイトの質問にアルフも割って入る。

ベルクトは答えた。

「…あいつは、その…俺に大切な事を教えてくれた奴だ。」

「大切な事？」

いまいちはずきりしない回答に、フェイトは首を傾げた。

「アイツはあんたの家族とかじゃないのかい？」

アルフが更に質問を重ねる。

だが、ベルクトは返答に困っているようだ。

「すまない…その辺の事情はあまり言いたくはない…」

実際問題ベルクトはバレルとの関係や、

自分の所業についてはあまり語りたくなかった。

というのも、ベルクトは今あるフェイトやアルフとの

互いを信頼しあう生活に、思ってた以上の満足感を得ていたからだ。
自分が世界を滅ぼそうとした人間などという事を知られば、

今の生活が、変わってしまうのではないかと恐れを抱いていたのだ。
それほどまでにベルクトという人間は変わり

この世界での生活に順応していたのだ。

（とはいえ…隠し事ばかりでも信頼は無くす可能性もあるな。）

ベルクトの現在の最優先事項は、フェイトの助けになる事である。

その為に自分は変わるのだと決心したのだ。

なので、自分を信頼する人間に隠し事ばかりをするのも
やはりどこか後ろめたい物があったのだ。

悩んだ末にベルクトは、肝心な部分はぼかしながら説明する事にした。
た。

「…俺が軍人だという事や、バルドナ・ドライブの事は説明したな
？」

ベルクトが急に語りだして少し驚いたが、2人は頷いて返答する。

「あいつは俺がもう一つの世界の方で活動してた時に、
たまたまバルドナ・ドライブでこちらに来た敵兵だった。

最初バレルがいた軍は、バルドナ・ドライブについては何も知らなかった。

そこで、あいつの仲間がドライブが作動した時にいた俺を狙い始め

た。

その最中で俺は2つの世界を行き来しながら何度となく衝突した。」

ベルクトの説明を真剣な顔で聞くフェイトとアルフ。

ベルクトは続ける。

「そして俺がここに来る直前…

バルドナ・ドライブを使った大規模な作戦を行う為に

俺は1人でヤツらと戦って、そして敗れた。

そして死に際にバレルが、俺に大切な事を教えてくれたのさ…」

そこまで言って空を仰ぐベルクト。

その表情はどこか儚げである。

(ベルクトにそんな過去が…)

ベルクトを見て、フェイトは思う。

肝心な部分は教えてくれなさそうだが

少なくともバレルという人物が、ベルクトのかつての敵で

今では大切な人間なのだと思ったのである。

だが、今いち納得しきれないアルフは、ベルクトに更に訪ねる。

「大体はわかったけど…じゃあ何でアイツはベルクトにそっくりなんだ？」

「…すまない。」

「もう、教えてくれたっていいじゃないか！」

声色が強まるアルフ。

だが、フェイトがそれを抑えた。

「アルフ、やめて…」

「フエイト…」

「ベルクトにだって、話したくない事の1つや2つくらい、あるんだよ…」

フエイトの言葉を聞いて、反省の色を顔に浮かべるアルフ。

その後、フエイトはベルクトを見て申し訳なさそうに言った。

「ごめんねベルクト…」

「何がだ？」

ベルクトは首を傾げる。

「バレルって人、敵だったけど今は大事な人なんですよ…？」

「…ああ」

「その…私の所為で、大切な人と戦う事に…」

俯むきながら言うフエイト。

ベルクトはフツとため息を吐いて、フエイトの頭に手を置く。

「それを何でお前が謝る必要がある？」

「えっ…でも、だって…」

想定していないベルクトの言動に戸惑うフエイト。

ベルクトは更に続けた。

「あいつが何故魔導師になり、時空管理局にいるかはわからない。

だがなフエイト、俺はあの日に言っただろう？」

俺は今度は人を助ける為に生きてみたいと。

その為に、お前に協力し、お前と共にいたいと思っている。」

「…!!」

フエイトの顔が少し赤らむ。

「あいつは確かに死に際で俺を変えてくれた…

でもフエイト、それはお前やアルフも同じだ。

お前たちは俺に新たな、生きる中での喜びを教えてくれている。

今の俺にはお前たちも大切な存在なんだよ。」

「ベルクト…」

フエイトの顔が更に赤くなる。

「例えあいつと戦う事になっても、俺はお前たちを裏切らない。

今の俺はお前たちの助けになる為に生きている、だから気にするな。

「……ありがとう、ベルクト。」

頭を撫でながら言うベルクトに、フェイトは顔を真っ赤にしてお礼を言った。

（ベルクト……アンタ……）

アルフはベルクトの思いを聞いて、少し涙ぐんでいた。

「さて、話も終わった事だ、そろそろいいか？」

フェイトの手から頭を離し、ベルクトは言った。

ちよつと照れくさそうである。

（全く……本当にガラじゃないな。）

今までこんなセリフは言った事がなかったので、

ベルクトはどこか落ち着かなくなっていたのである。

そんなベルクトを見て、フェイトは微笑みながら言った。

「うん、じゃあ行くよ。」

そしてフェイトは目を瞑り、言葉を紡いでいく。

「次元転移、次元座標、 8 7 6 C …… 4 4 1 9 …… 3 3 1 2 …… 2 6 9 9

……」

フェイト達の足下に黄色の魔法陣が表れる。

そしてフェイトは最後の一言を口にした。

「開け、誘いの扉、時の庭園、テストロッサの主の下へ！」

そして3人の姿は、魔法陣と共に消失した。

そしてこの後ベルクトは知る事になる。
フェイトとその母の悲しい関係を……

3人は時の庭園に到着した。

「随分と薄暗いんだな……」

周りの風景を見てベルクトは呟く。
しばらく廊下を歩いた後、フェイトが立ち止まり、ベルクトを見て言った。

「じゃあ、ベルクトはここで待ってて。」

母さんにジュエルシードを渡してくるから。」

「わかった。」

そう言ってフェイトはアルフを連れて、奥の方へと消えていった。

（子を道具と見なす母親か……）

1人になってしばらくした後、ベルクトは額に手を当て考えていた。
ビル街でバレルと戦った前日、アルフに聞いた話によれば
フェイトの母は自分の為にジュエルシードを集めていて
フェイト自身には愛着がそんなに無いという事を思い出していた。
目的の物を持ってきたとはいえ

フェイトが何か落ち込むような事をされているのではないか？
ベルクトはそう思い、フェイトが心配になってきていた。

（やはり、行ってみるか…）

自分もフェイトの母とは一度会って、話を聞いてみたかったのだ。
なら丁度よいだろう。

ベルクトはフェイト達が行った方に歩いていった。

しばらくすると大きな扉が見えてきた。

ふと、何かが目に入る。

（あれは…）

アルフであった。しかもどこか様子がおかしい。
うずくまって震えているではないか。

ベルクトはアルフに駆け寄って、尋ねた。

「アルフ、どうした？」

「ベルクト…！」

アルフが顔を上げる、目には涙が浮かんでいた。

アルフはベルクトに抱きついて、必死な声で言った。

「フェイトが…フェイトが…！！…うつつ…」

「フェイトに何かあったのか？」

ただ事ではないというのを感じ取るベルクト。

その時、扉の先から何かを叩く音と、フェイトの悲鳴が聞こえた。

「ッ…！…フェイト…！」

ベルクトはデバイスを起動して、扉を思い切り開けた。

広い部屋に出た。

そして部屋の中央を見て、ベルクトは目を見開いた。

そこにはバリアジャケットが破れ、傷だらけになったフェイトが倒れていた。

その側には黒髪で、手に鞭を持った女性がいた。

「いきなり入ってきて、あなたは何なの？」

女性が見下すような口調で言った。

ベルクトは何も答えない。ゆっくりと部屋の中央まで歩いてきた。

「ベ……ル……クト。」

かすれた声を出しながらベルクトを見上げるフェイト。

だが、突如背中に冷たいものが走った。

こんなに冷酷そうな表情をしたベルクトは見た事なかったからだ。

外面上は落ち着き取り払ってるように見えたが

目の奥には憎悪の炎が宿っていた。

「あなたは何者だ？」

ベルクトが冷たい口調で切り出す。

女性は強い口調で言い返した。

「いきなり入ってきたあなたの方から名乗るべきではなくって？」

「……私はベルクト、フェイトに協力してジュエルシードを集めている。」

「そっ……知らないお節介だわね。」

冷たい口調を崩さないベルクトに、女性はうつとしいという風に答える。

そして自分の名を名乗った。

「私はプレシア・テストロッサ、偉大なる大魔導師よ。」

「つまり、あなたがフェイトの母親なのか？」

「そうよ。」

どこか普段の彼とは違う、不自然な口調で話すベルクトにプレシアは答える。

ベルクトは質問を続けた。

「何故、フェイトにこのような事を？」

「その子は偉大な魔導師たる私の娘、

それに見合った成果を挙げられなかったから躰をただけよ。」

「何故？フェイトはあなたの言いつけ通りにジュエルシードを持ってきた。

寧ろ誉めてやるべきではないのか？」

「これだけの時間を費やしておきながら…

回収したジュエルシードはたったの3つだけ…

私の娘としてはあまりにも相応しくない、無様な結果なのよ。」

「フェイトは病弱なあなたの為にたくさんの苦勞をしたのだが？」

「そんなの…私の知った事ではないわ。」

ここまで淡々とやり取りを続け、黙り込むベルクト。

そんな彼を見て、プレシアはうんざりしたように言った。

「言いたい事はそれだけ？ならさっさと…」

プレシアは言い切る事が出来なかった。

突如ベルクトがプレシアを思い切り殴り飛ばしたのだ。

「かはっ…！」

数メートル程吹き飛び、床に倒れるプレシア。

その光景を見て、フェイトが苦しげに呟く。

「ベル…クト…やめ…て…！」

だがベルクトはフェイトの言葉など聞こえてないようにプレシアに近づいていく。

「偉大な魔導師の私に…よくも！」

プレシアは床に転がった杖を取ろうとする。

だがベルクトは瞬時に移動してそれを蹴飛ばし

倒れているプレシアに向かって、腰の拳銃を引き抜き銃口を向けた。

「まさか…ジル・バルドナより腐った奴がいるとは…思わなかった。」

冷たい口調でベルクトは言い放つ。

そして銃の引き金に手をかけた。

「死ね。」

そしてその弾丸はプレシアを…

「やめてえええ!!」

撃ち抜かなかった。

銃が発射される直前、フェイトがベルクトにしがみついていたのだ。

「フェイト…!」

「いくらベルクトでも…母さんには!!」

怒りの形相でベルクトを睨みつけるフェイト。

その時背後にいたプレシアが立ち上がり、杖を構えた。

「あなた…よくも!」

杖を掲げるプレシア。

だが彼女の前にフェイトが立ちふさがる。

「やめて母さん!」

フェイトは必死の表情で叫ぶ。

だがプレシアは虫けらを見るかのように言った。

「どきなさいフェイト…母さんはその男に殺されそうだったのよ…」

そんな奴を庇うというの?」

フェイトは両膝を地面につき、頭を下げてこう言った。

「ごめんなさい…母さん…でも、ベルクトは大切な人なの…」

私を手伝ってくれた優しい人なの…

きっと私の姿を見て何か勘違いしたただだから…だから…」

必死に呟くフェイト。

プレシアはそんなフェイトとベルクトを交互に見た後、口を開いた。

「…まあ、いいわ今回は許してあげる。

でも次は無いわよフェイト…」

「はい…」

プレシアは後ろを向いて言った。

「いい、フェイト…あなたは優しいから躊躇ってしまつのかもしれないけど…」

ロストロギアは母さんの夢を叶える為にどうしても必要なの…

邪魔する者は潰しなさい…どんな事をしても！」

「はい…母さん。」

「しばらく眠るわ…次は必ず私を満足させてちょうだい…

私の大切な娘…かわいいフェイト…」

そう言つてプレシアは扉の奥に消えていった。

「フェイト…！」

部屋から出てきたフェイトを見て、アルフが駆け寄った。

「フェイト！大丈夫かい…！」

「大丈夫…平気だよ。」

「だつて！ちゃんと言われた物を持つてきたのに…あんな酷い事されるなんて…」

「酷い事じゃないよ…母さんは…私の為を思つて…」

「思つてるもんか…あんなのただの八つ当たりだ！」

涙ながらに訴えるアルフ。だがフェイトの態度は変わらない。

「違うよアルフ…だつて、親子だもの」

「それがあんな親でもか…」

ここでベルクトが口を開いた。

「あんな親でも…お前は大切だというのか…？」

「母さんは不幸で…ずっと悲しんできたから…私、何とかして喜ばせてあげたいんだ。」

ベルクトが口調を荒げる。

「貴様は何とも思わないのか！あの女はフェイトを何とも思っていない！

それでも貴様は信用するのだろうか！？」

「そんなわけない…母さんは…私を信頼してたから…ああしたんだよ…」

だから…私、もっと母さんの為に頑張らないと…」

「フェイト…！」

「家族だよ…自分の親なんだよ…それを大切に思う事はいけないの？ベルクトには…それは違うというの？」

怒りさえ見せるベルクトを真っ直ぐ見据えてフェイトは言った。

「それは…」

黙り込むベルクト。

言えない、いや今の彼女に言っても恐らく変わらない。

自分の父の事、それを殺した自分の事

親だからといって子を可愛がるとは限らない事。

プレシアを盲信している今のフェイトに言ってもきっと理解しないだろう。

フェイトは2人を見ながら、悲しげな微笑みを浮かべて言った。

「大丈夫…きっと大丈夫だよ。ジュエルシードをちゃんと集めてくれれば…」

きっと母さんも笑ってくれる…昔の優しい母さんに戻ってくれる…そうすれば…きっとアルフやベルクトにも…優しくしてくれるよ…」

フェイトはマントを羽織って続ける。

「だから行こう…今度はきつと…失敗しないように…」
そう言ってフェイトは歩いていってしまった。

「フェイト…」

フェイトの後ろ姿を寂しげに見つめるアルフ。

一方ベルクトは壁に向かって拳をたたきつけていた。

「クソッ…!!」

フェイトの助けになる為にここまで頑張ってきたのだ。

今し方決して彼女を裏切らないと、共にいたいと言ったのだ。
だがこれでは何の為に…

「俺は…俺は…!!」

ベルクトはまるで見えない壁にでもぶつかった気分になった。
どうすればいいかわからなくなっていたのだ…

「あの男…」

部屋に戻ったプレシアは、椅子に腰掛けて考えていた。
病弱とはいえ、大魔導師たる自分が全く反応できなかった。
しかも、保有している魔力量もかなりのものだと感じていた。
その点から見ればかなりの魔導師といえる。

そんな事を考えていると、突然扉が開いた。

「らしくないわね、冷酷な大魔導師のあなたが遅れをとるなんて。」

そこには濃いブルーの髪的女性がいた。

プレシアは女性の方を見て言った。

「何の用かしら…？」

「別に、珍しいお客がいたから気になっていただけよ。」

女性は笑いを浮かべながら答え、更に続ける。

「それにしても、酷いものねえ…大切なお人形さんにあんな事するなんて…」

「やっぱり私に任せてみない？お人形さんよりはうまくやる自信があるわ。」

「何をわけのわからない事を言っているの？フェイトは私の大切な娘よ。」

あなたの出る幕は無いわ。あなたは黙って兵隊を作ってればいいのよ。」

プレシアは女性を睨みながら言い放った。

「わかったら早く出て行きなさい。」

「はいはい、わかりました。」

小馬鹿にするような口調で言い、女性は部屋から出た。

部屋から出て扉を閉め、誰もいない広間で女性は呟く。

「そう…本当に珍しいお客さんだったわね…」

フフツ…最高だわ、彼のあんな姿を見れるなんて。」

女性は笑いを浮かべた。そして直後、表情が強張る。

「ベルクト…まさかアンタもこっちに来ていたとはね…」

その顔に怒りを携え女性「アンジェ・レイバーはそう呟くのだった。

第10話（後書き）

ということでは対面終了。

ベルクト大暴走

当初からキャラ変える予定だったとは言え

ここまで感情的になるベルクトは書いてて凄い新鮮だ…

そしてもう1人、アンジェが登場です。

誰だっけ？とか言わんといてな、影薄いけど。

何でACEの彼女はあんなに扱いが悪いのだろう？

エリゴルなんか、あの鈍重さが

凄い洪くて、個人的には好きなんだけどなあ…

今回はアースラ内でのバレルやなのは達の話になります。

前回の引きを見て、先にこっちを期待してた方正直すみませんでした…

プレシアとの対面が思ったより長くなり

次回に持ち越しとなってしまいました…

ご意見、感想、指摘、ヘタレ作者への叱咤激励などをお待ちしております。

第11話（前書き）

アースラ内に連れてこられたなのは達
そしてバレルがアースラにいる理由とは？

アクセス数が20000を突破しました。
正直驚いています。

これからも応援してくれる方々の為に
一生懸命やらせて頂きますので
どうかよろしく願います。

第11話

なのはとユーノはバレルに連れられて、アースラに来ていた。

バレルについて廊下を歩くなのはとユーノ

だが、なのはは周りをキョロキョロ眺め、落ち着きがないみたいだ。すると、歩いている途中でバレルが口を開いた。

「まあ、落ち着かないのも無理はないよね、

正直僕も、まだ魔法だの次元転移だのって、そういうのには慣れないし……」

バレルの言い回しに疑問を感じたユーノが尋ねる。

「あなたは時空管理局の正式な職員じゃないんですか？」

「うーん……民間協力者って感じかな？」

僕もしばらく前まではただの人間だったしね。

まあ、詳しい事はこの後全部話すから。」

そう言っバレルが扉を一枚開き、中に入っていく
なのはとユーノもそれに続いた。

扉の先には、先程見かけた銀髪の女性と

黒髪で、なのはと同じ年くらいに見える少年がいた。

「バレル、お疲れ様。」

「ありがとうフェイ。」

フェイはバレルの方を向いてこう言い、彼もそれに返答する。

「その娘たちが、そうなのか？」

「そうだよ、クロノ」

続いて少年―クロノがバレルに尋ねる。

そして、3人は自己紹介をした。

「ちゃんとした自己紹介はしてなかったね

僕はバレル、バレル・オーランドだ。」

「私はフェイ・ロシュナンテよ、よろしくね。」

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。」

「あ、はい……私は高町なのです、よろしくお願いします。」

やや戸惑いながらも、なのはは3人に対してお辞儀をしながら言った。

なのはが顔を上げた後、フェイが言った。

「なのはさん……だったわね、いつまでもその格好じゃあ窮屈でしょう？」

「バリアジャケットは、解除して大丈夫よ。」

「あ、そうですね。」

言われてなのはバリジャケットを解除し、普段着に戻った。

続いてクロノがユーノに向かって言った。

「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

「あ、そういうばそうですね。ずっとこの姿でいたから、忘れてました。」

「え？」

なのはが首を傾げる。

すると、ユーノの周りが光り輝き、やがて光がおさまると

そこにはなのはと同じ年くらいの黄土色の髪をした少年がいた。

「なのはにこの姿見せるのは、久しぶりになるのかな？」

ユーノがなのはを見てこう言った。

だがなのは目を点にして、ユーノを指差しながら固まっていた。
しばらくして...

「ふえええええ！」

なのはの叫びがアースラ内に響いた。

ユーノが不思議そうなのはに尋ねる。

「ユーノ君って、ユーノ君って……その、何！？」

そんな2人を見て

バレルがそう言い

魔法って、本当に何でもありなのね……」

「君たちの間に、何か見解の相違でも……？」

ユーノが少し困ったようになのはに聞いた。

「違う違う！最初からフェレットだったよ！」

しばらくして、思い出したように言った。

「だよ、そうだよ！ビックリした……」

そして、なのはとユーノは艦長がいる部屋に案内された。

扉が開く、そこは盆栽や畳などが置いてある和風な部屋だった。そして部屋の畳の上で艦長のリンディが正座で座っていた。「お疲れ様、さあ、どうぞどうぞ、お二人とも楽にして。」リンディは2人に向かってにこやかに言った。

畳の上になるのは、ユーノ、クロノ、バレル、フェイ、そしてリンディが座る。

ユーノは自己紹介をした後、これまでの事を話した。

「なるほど、そうですね…あのロストロギア

ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね。」

「それで、僕が回収しようと…」

リンディの言葉に対して、

ユーノがやや俯きながら答えた。

「立派なことじゃない。」

「だが、同時に無謀でもある!」

フェイが感心したように言い、次いでクロノが強い口調で言った。

クロノの言葉に、ユーノは目を瞑り更に俯いてしまう。

「あの…ロストロギアって何ですか?」

疑問に思ったのはが尋ねた。

リンディとクロノが説明を始めた。

次元空間内にはいくつもの世界がある事

その中に、稀に進化しすぎた世界が存在する事

その世界の進化しすぎた科学や技術が己の世界を滅ぼし

その失われた技術の遺産を総称してロストログアと呼ぶ事

「…詳しい使用方法はわからないが、使い方によつては

世界どころか、次元空間さえ破壊しかねない、危険な技術。」

「然るべき手続きをして、然るべき場所に保管しなければならない品物

それがロストログアなの。」

リンディとクロノの説明を聞いて、なのはは驚いていた。

難しい部分はわからないが、少なくとも自分たちが

とてつもなく危険な物に関わっていたのを知ったからだ。

リンディ達は更に説明を続ける。

「ジュエルシードは、次元干渉型のエネルギー結晶体

いくつか集めて、決まった方法で起動させれば、次元震を引き起こし

最悪の場合、次元断層さえ起こしかねない危険物。」

「たった1つ、それも何万分の1の発動でもかなりの影響がある。

複数個集まって発動した時の影響は、計り知れないんだ。」

途中でユーノが口を開く

「僕も聞いた事があります。次元断層が起きた時の事を…」

「ああ、あれは酷いものだった。」

「隣接する並行世界がいくつも滅んだ、歴史に残る悲劇…」

クロノとリンディが目を瞑り、悲しげな表情で言った。

しんみりした空気の中で沈黙が続く。

しばらくして、再びユーノが口を開いた。

「そうだ、もし良かったら教えてもらえませんか、彼の事を。」

バレルの方を見ながらそう尋ねるユーノ。

バレルはその問いに答えた。

「簡単に言えば次元漂流者だね。元いた世界から突然飛ばされたんだ。」

そこにいるフェイも僕と同じだよ。」

「最初は侵入者扱いでビックリしたけど…事情を話したら

この艦に乗せてもらえる事になったの。」

途中からフェイも質問に答える。

ユーノは更に質問した。

「ここに来る前はどんな世界にいたんですか？」

「地球だよ。」

その言葉になのはは驚いた。

「えっ…！じゃあ私と同じ…」

「僕も最初はそう思っただけだね…」

なのはの言葉に今度はクロノが割って入る。

クロノは続けてなのはに質問した。

「UCE、ギガノス、マクロス、ネオ・ジオン、木星連合、火星の後継者

この中に聞いた事のある単語はあるかい？」

「いえ、わかりません…」

クロノの質問に全くわからないという風になのはは答えた。

「つまり彼らは、時空管理局が掴んでいない

全く別の地球から飛ばされてきた人間だと考えられるんだ。」

「じゃあ…一体どのような形で？」

ユーノが更に問いを重ねる。

すると、クロノはため息を吐いてからこう言った。

「そこがまた厄介でね…彼らの世界にはある意味ジュエルシールドより危険な代物があったんだよ。」

「どついう事ですか？」

首を傾げるユーノに、今度はフェイが口を開く。

「長い話になるけど…良かったら聞いてもらえる？」

ユーノは頷いた。

フェイは語り出す。

自分は機動兵器イクスブラウを駆る軍人であった事

とある戦場でバレルを救出し、彼もそのままイクスブラウの

パイロットとして、成り行きで軍人となった事

しばらくした後発見したバルドナ・ドライブ

それによって繋がりを持った2つの地球

ドライブの完全稼働による地球同士の衝突と、その阻止。

なるべく簡潔にしてフェイは説明した。

「凄い…バレルさんってロボットで戦う軍人さんだったんだ…まるで御伽噺みたい。」

「いやあ…僕にしてみれば君たちの方がよっぽど御伽噺みたいなんだけど…」

目を輝かせながら言うのはに、バレルは苦笑しながら言った。

「でも、何で全く関係がないアースラに飛ばされたんでしょう？そのバルドナ・ドライブというのは2つの地球を繋ぐだけでしかもあなた達が来た時には停止していたのでしょうか？」

特にバルドナ・ドライブの存在に驚きを示しながらも、ユーノが疑問を口にする。

クロノがそれに答えた。

「裏付けが無い以上、僕の憶測になってしまっただが…

バルドナ・ドライブというのが彼らの話通りの物なら

それは限定的とはいえ、次元空間内に巨大な通路を作る装置だ。

しかも、完全稼働すれば惑星規模の物体すら運ぶほどになる。

ロストログア扱いされても何らおかしくない非常に危険で不安定な代物と言えるんだ。」

クロノは腕を組み、下を向きながら更に続ける。

「異なる空間を無理矢理繋げるという事は、次元空間に歪みを発生させる要因になる。

しかもそれは一度完全稼働しているんだ。停止させたとはいえバルドナ・ドライブ周辺の時空は非常に不安定だったと考えられるんだ。

恐らく彼らは、偶然時空の歪みが強まった時にそれに巻き込まれ次元空間をさまよった結果、ここに流れついた可能性が高いんだ。」

「現に飛ばされる直前、私たちはイクスブラウで

バルドナ・ドライブ周辺の探索任務を行っていました。

任務内容は、最近多発している原因不明の失踪事件

その行方不明者達はバルドナ・ドライブ周辺で消えているから

その調査に向かってほしいというものでした。これらの事から考えれば、ハラウン執務官の理論通りと言えるんです。」

途中からフェイも補足し、一通りの説明をする。

話を聞いた上で、今度はなのはが尋ねた。

「じゃあ、何でバレルさんは魔導師をやってるんですか？

バレルさんの世界には魔法は無かったんですよ？」

「こればかりは僕にも説明が出来ない…ほとんど偶然によるものと言えない。」

彼のデバイス、イクスブラウは本来、彼が操縦していたロボットの名だ。

それが何故こちらに来る際にデバイス化したのかは全くわからない。

「

「でも、そのおかげでアースラの人達のお手伝い出来るからいいんだけどね。」

クロノが疑問に答え、バレルが少し笑いながら言った。

「でも、バレル君の才能には驚かされたわ。魔法なんて知らないって言ってたのに

ほんの二週間ちよつとで、クロノにも次ぐ強さになっちゃうんだから。」

「私も実を言うと本当は戦いたかったんですけど

デバイスのイクスブラウは1つしかありませんでしたしね…」

リンディがにこやかに言い、更にフェイが少し残念そうに言う。

「ともあれ僕達は元の世界が見つかるまでのその間

僕は魔導師として、フェイは事務周りの仕事を手伝うという形で

アースラに同行させてもらっているというわけなんだ。これでいいかな？」

「はい、丁寧にありがとうございます。」

バレルがユーノに向かって言い、それに対してユーノは礼を言った。

再びの沈黙、するとリンディが自分のお茶に砂糖を入れた。

「ええっ…」

その光景を見てなのは信じられないという風な顔をする。

だがリンディは特に気にした様子もなく、そのお茶を飲んだ。

（リンディさんっていい人だけど…こればかりはなあ…）

（バレル、気にしたら負けよ…人の好みは十人十色だわ…）

バレルとフェイが声に出ない会話をする。

お茶を飲んだ後、リンディが口を開いた。

「これよりロストログア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます。」

「えっ!?!」

リンディの言葉に、なのはとユーノは驚く。

「君たちは今回の事は忘れて、それぞれの世界で元通りに暮らすといい。」

「でも…そんな…」

クロノの言葉に戸惑いを見せるなのはに、今度はバレルが口を開く。

「こんな立場の僕が言えたものじゃないかもしれないけど…」

君たちの世界の存亡に関わる規模の話なんだ。

だから、ちゃんとした機関に任せた方がいいんだよ。」

「でも…!」

納得がいけないという風なのはに、今度はリンディが言った。

「まあ、いきなりじゃあ気持ちの整理もつかないでしょう」

今夜一晩2人でじっくり話合って、それから改めてお話をしましょう。」

「はい…」

なのはは俯きながら返答する。

それを見てリンディが続けて言った。

「バレル君、なのはさん達を送ってもらえる?」

「わかりました。2人共ついてきて。」

そう言って立ち上がるバレル。なのはとユーノはその後に続いた。

なのはとユーノは先ほどのビルの屋上に戻ってきていた。

「じゃあ僕はこれで…」

「あ、待って下さい！」

その場を離れようとしたバレルになのはが声をかけた。

「どうしたんだい？」

「バレルさん、ベルクトさんの事、何か知ってますか？」

なのはの質問に、少し表情を険しくしながらバレルは答える。

「…あいつと僕の関係は複雑だからね、すぐに話せるような事じゃあない。」

今言えるのは、あいつも僕と同じ世界の人間って事だけだよ。」

正確には少し違うんだが、と心の中で付け加えるバレル。

「まあ、詳しい事は次に会った時に話してあげるよ。」

今日はもう遅い、早く家に帰った方がいいよ。」

「はい、ありがとうございます…」

そう言っただけでユーノはその場を去っていった。

なのは達を送った後、アースラの一室でバレルとフェイは話し合っていた。

「じゃあ、やっぱりベルクトも魔導師として…」

「ああ…あれは恐らくブラッドアークだ。」

話していたのはベルクトの事だ。

アースラ内で彼の姿を確認した時、2人はとても驚いていた。

あの時バレルが戦闘に赴いたのも、イクスブラウの実戦テストよりも彼の姿を確認するという理由の方が大きかったのだ。

「彼はなんで、ジュエルシードを集めているのかしら…」

「詳しい理由はわからない、けど言えるのは…」

顎に手を当て考えるフエイに、バレルは言った。

「あいつはもう、世界を滅ぼすとかそんな事は考えてないと思う。
昔みたいなあの嫌な感じがしなかったし…」

何より、仲間を傷つけられて激昂していた。」

「あのベルクトが？」

顔を上げ、意外そうにフエイが言う。

「あいつもきつと変わったんだよ、こつちの世界に来て…」

でも、自覚があるかないかは別としても、

ジュエルシードが危険な物なのに変わりはない。

だからそれに関しては、また会った時に確かめればいい。」

少し笑いながら話すバレル、彼は更に続ける。

「それにさっきの2人、なのはとユーノも結局は一緒に戦う事になりそうだしね。」

「やっぱりバレルにもわかった？リンディ艦長の思惑。」

「成り行きとはいえ俺も軍人になってたんだ。その位は悟れるさ。」

そう、バレルとフエイにはリンディの考えが読めていた。

最初から関わってほしくないなら、わざわざ一晚時間を与えたりはしない。

恐らく彼女は、自分から手伝いを申し出るように仕向けたのだろう。

2人はそう思っていた。

「温厚そうに見えて、そういう部分では抜かりないんだよな。」

「賢い人ほど、爪を隠すものよバレル。」

バレルの言葉に、フエイがフツツと笑いながら答える。

そして、バレルが再び口を開いた。

「こんな形でまた戦う事になったけど…俺はもう迷わない。

あいつがこの世界で変わって、新しく仲間を作って

新しい目的の為に戦っているのかもしれない。

あいつにも譲れないものがあるのかもしれない

けど、それは俺も同じだ。異なつた世界とはいえそれが崩壊する危険があるなら、自分の力を使ってその阻止に協力したいんだ。

あの地球やのその人達の命が、簡単に失われていくのは見たくないから…

だから戦うよフェイ、俺たちを受け入れてくれたアースラの人達や何より、君を守る為にも…」

「バレル…」

フェイは顔を赤くしながらもバレルに近づく。

そして2人はお互いに抱き合った。

（だからベルクト…俺は俺の道を行くよ。

その為にまた、お前と戦う事になっても…）

第11話（後書き）

ということでもこちらも対面終了

バレルとフェイに関しては、まあそういう事です
正直かなり無理矢理臭い独自設定に見えるかもしれませんが
リリカルなのは的にはこういうのが一番しっくりくるかなあ…と思
いました。

原作の設定とかに矛盾が生じてたりしたら申し訳ないです…
あとデバイスに関しては突っ込まないで下さい。
そっちは全然考えてなかったから…

あと読者の皆さんから頂いたACEキャラの
デバイスの強化や武装の追加などに関してですが
その手のテコ入れはA・S編でまとめてやる予定なので
無印の間は恐らくないと思われるのでご了承下さい。
（特にガンアークの『アレ』については
A・S編の話に支障が出そうなので…）

ご意見、感想、指摘、ヘタレ作者への叱咤激励などをお待ちしてお
ります。

第12話（前書き）

ベルクトとアルフはフェイトへの思い、プレシアの事などを語り合う。

そしてなのはも、バレルとフェイに思いをぶつけていた。

第12話

その夜、ユーノは自分たちも協力したいという旨を伝える為にアースラと連絡をとっていた。

クロノは反対したが、リンディは身柄をアースラで預かる事と自分たちの指示には必ず従う事を条件にそれを受け入れた。

側で聞いていたバレルとフェイは、内心でやっぱりか、と思うのであった。

・その頃ベルクトは、マンシヨンの自室でアルフと話していた。フェイトの母親、プレシアについてである。

「そりゃ…アンタの気持ちもわからくはないよ…」

でも、いきなり殺そうとするのはやりすぎだよ…」

アルフは苦しい表情で呟く。

「何もしないで、ただ蹲っていたアタシが言えた義理じゃないかもしれないけどさ…でも…」

「わかってる、軽率な行動だったと…だが抑えられなかったあまりにも似すぎていたんで…」

「似すぎていた…？」

アルフが首を傾げる。ベルクトは目を瞑って語りだした。

「俺の父親、ジル・バルドナがそうだったからだ。」

子供を道具の様に扱い、息子と呼んでくれた事も1回もない。

プレシアの同類そのものだった…だから…」

一呼吸置いてから、ベルクトは一言呟く。

「殺した…俺自身の手でな…」

「…！」

想像以上の話に、アルフは驚きを隠せない。

子供が親を殺すなど、どう考えたって普通じゃない。

だが、それをやった男がここにいるのだ。

一体ベルクトは、どのような時を過ごしたのだろうか？

ジル・バルドナという人物はそれほどまでに酷かったのだろうか？

そんな事を考えていると、ベルクトが再び口を開いた。

「前にも言ったが、フェイトは優しい奴だ、だが優しすぎる…

故に母親の行動になんら疑問を持たない。

親が子を思うのも、その逆も当然だと思い込んでいる。

俺はフェイト程優しくはなかったんでな…

親が絶対などとも考えなかった。」

ベルクトは自嘲気味に言い、続ける。

「だが一番の問題は…プレシアが俺の父親以上に

冷酷で卑劣な人間だという事だ。」

「…どういうことだい？」

不安げな表情でアルフは尋ねる。

「俺の父親は俺を一度たりとも俺を息子と呼んだことは無い…

最初から俺を道具として扱い、そう接してきた。

だからこそ俺は、親は絶対ではないとすぐに思ったんだ…

だがあの女は違う…フェイトに拷問する際にも自分が

母であること、フェイトが娘であることを強調していた。」

ここまで言っただけでベルクトが俯き、険しい表情になる。

「つまり…あの女は娘という言葉でフェイトを縛り付けているんだ…

フエイトに忠実に命令を聞かせる為、アイツの思いを知った上でな……！」

そこまで聞いてアルフはハツとなり、そして拳を握る。それが本当なら酷い、酷いなんてものじゃあない。

親のために一生懸命になっている子の思いを利用するなど……

アルフの中のプレシアへの憎しみが更に強くなった。

そこまで言った後、ベルクトは突然目を瞑り、自嘲気味にこう言った。

「……幻滅したか？親を平気で殺すような奴だと知って。」

だがアルフはベルクトの方を向いて叫ぶ。

「そんな筈ないじゃないかい！アンタは何度もアタシたちを助けてくれた！」

殺したつてのには驚いたけど……それでもアンタはアンタだ！

アンタはアタシ達を裏切らないって言った！共にいたいとも！

そけだけで十分だよ！アンタの過去に何があったかは知らないけど……

アタシはアンタを信じるよ、アタシやフエイトにもベルクトは大切な存在だよ！」

一息で言い切るアルフ、ベルクトはそれを聞いて

安心したように微笑み、一言呟く。

「……ありがとう」

ベルクトはこの生涯で一番の喜びを感じたように思っていた。自分を信じると言ってくれた、それがこんなにも嬉しい事とは。

こんな自分を……親を殺し、世界を滅亡に導こうとした自分を

信じると言ってくれたことが純粹に嬉しかったのだ。

（いずれは…話す時がくるかもしれないな。）

信頼してくれるからこそ、話さなければならぬ事もある。

ベルクトは、いつかフェイトにもアルフにも自分の全てを話しその上で再び彼女たちの助けになろうと考え始めていた。

（だが…今はフェイトの方をどうにかせねばな…）

フェイトが純粹に母親を愛しているのも

それを知った上でプレシアがそれを利用してるのもわかる。

そしてあのプレシアの事だ、ジュエルシードを集め終えたら新たな目的の為にフェイトを使い続けるか

用済みとして処理するかどちらかなのは目に見えていた。

そこまで考えていたところでアルフがベルクトを見て言った。

「ねえ…ベルクト、何とかならないのかい…」

あの子にジュエルシード集めをやめさせられないのかい…」

「……」

「アタシ…もうあの娘があの子の為に傷付くのは見たくないよ……」

「…例えば、俺らが逃げようと言ったところで、フェイトは

一人でジュエルシードを集め続けるだろうな…」

「でもさあ！」

「…すまない、俺もどうすればいいかわからないんだ…」

目を瞑り申し訳なさそうにベルクトは言った。

実を言うと考えがないことも無い、プレシアを殺してしまえばいい。

だが、それではフェイトがどうなるかわからないのだ。

あれだけ入れ込んでいる以上、プレシアを殺したりでもすればどのような行動を取るのかわからない。

最悪の場合、第二の自分自身を生み出すと言っても過言ではない。
ベルクトが一番心配なのはそこであった。

フェイトの人生を縛り付けているのはプレシアだが
フェイトの心の支えもまたプレシアなのだ。

「二人とも…まだ起きてたんだ。」

そこまで考えていると、二人の前にフェイトが現れた。

まだ母親からもらった傷が癒えてないらしく、フラフラだ。

「フェイト…！」

アルフはフェイトに駆け寄って心配そうに言った。

「逃げようよ…フェイト…3人でどこかにさ…」

「それは…ダメだよ…」

「だって、時空管理局の奴らにまで目をつけられてるんだ！

この間会ったのだからかなりの使い手だし、

後ろにまだどんな奴が控えてるのかもわからない…」

アンタの母さんだって、フェイトに酷いことばっかするし…」

ここまで言うつと、フェイトが目を少し見開いて反論する。

「母さんのこと…悪く言わないで…」

「言うつよ！！だって…だってアタシ…」

アルフは涙声になってきていた。

「アタシ…フェイトのことが心配なんだよ…」

フェイトが悲しんだと…アタシの胸も千切れそうに痛いんだ…」

フェイトが悲しむのも、泣くのも…アタシ、嫌なんだよ！」

アルフは必死になってフェイトを説得する。

だが、フェイトの心は変わらない。

「少しだけ…私とアルフは精神がリンクしてるから

アルフが痛いなら…もう悲しまないし、泣かないよ…」

それを聞いてアルフは、床に顔を埋め、泣き出してしまった。

「アタシは…！フェイトに笑って…幸せになってほしいだけなんだ

…！！

なんで…！なんでわかってくれないだよ…！！」

泣きじゃくるアルフを見て、安心させるようにフェイトは言う。

「ありがとう、アルフ…でも私は、母さんの願いを叶えてあげたいの…」

「なら…約束してくれ。」

今まで黙って二人のやり取りを見ていたベルクトが口を開く。

二人がこちらを向いたのを見て、ベルクトは更に言った。

「フェイトは母親の言うなりではなくて、自分自身の為に頑張ると…そうするなら、俺もアルフも全力でお前を守る。」

「……うん約束するよ…ありがとうベルクト。」

フェイトは微笑みながらベルクトに言った。

（決着は…ジュエルシードを集め終えたらだな…）

口ではこう言っているが、フェイトの気持ちは変わらないだろう。

なら、自分やアルフがあの子の魔の手からフェイトを守らなければならない。

今は従順なフリをしつつ、無茶をするフェイトを守ってやらねばならない。

そして、全てが終わった後、フェイトとプレシアの関係にケリをつけよう。

（…待っているプレシア・テストロッサ…）

フェイトの思いを踏みにじる貴様は…必ず！！）

ベルクトは窓から見える月を眺め

プレシアに対する憎しみを燃え上がらせるのであった。

・アースラの一室

そこでクロノとオペレーターのエイミィ・リミエッタがフェイトについて調べていた。

「この黒い服の子…フェイトって言ったっけ？」

「フェイト・テストロッサ。かつての大魔導師と同じファミリームームだ

ミッドチルダの中央都市で、魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして

追放されてしまった大魔導師だ…」

画面を見ながらクロノが言った。

「その人の関係者？」

「さあね…本名とも限らないから…」

エイミィの問いに、クロノはそう答えた。

「ところで…初めての出演なのにアタシの尺少なすぎませんか？」

ごめんなさい、でも地の文に突っ込まないで。

ACEキャラがいる関係であなたの出演は減らざるを得ないんだよ。

「酷いなあ…」

「エイミィ、何わけのわからない事を言ってるんだ…?」

なのは達がアースラに移ってから十日目になる。

なのはが回収したジュエルシードは8、9、10の計三つ。
フェイトが回収したのは2、5の計二つ。

そして、残り6個の行方がまだわからないでいた。

なのはとユーノは食堂にいた。

「うーん…今日も空振りだったね…」

「うん、もしかしたら結構長くなるかもね…」

クッキーを食べながら向かい合って二人は会話する。
するとそこに、バレルとフェイがやってきた。

「隣、いいかな?」

「あ、はい。」

バレルがなのはの隣に、フェイがユーノの隣に座った。

しばらくした後、なのはが口を開いた。

「バレルさん、あの…ベルクトさんの事なんですけど。」

「…ああ、そういえば。」

思い出したという風にバレルは言った。

「私、前に言われたんです。私なんかにはフェイトちゃんの気持ちはわからないって…」

「そうか…あいつがそんな事を。」

「やっぱり、大分変わってるみたいねベルクト…」

バレルとフェイが意外だという風に言う。

「けど、ほっとけないんです…あの子きつと、ひとりぼっちなんです

一人きりが寂しいのは、私も少しわかるから…」

「…君はそのフェイトって娘を助けたいのかい？」

「はい…とても悲しい目をしていて

私とも、本当は争いたくない感じで…」

俯きながらひしひしと呟くのは、

そんな彼女を見てバレルは腕を組み、こう言った。

「…ベルクトが協力する理由はそこなのかもしれないな。」

「彼も、ずっと一人きりだったわけだしね…力になってあげたいのかしら…」

バレルの話じゃその娘を傷つけられた時に、激昂したって言うし…」

「…どういう事…ですか？」

バレルとフェイの言葉を聞いて、なのはは尋ねる。

「…前に言ったよね。話すよ、あいつと僕の事。」

バレルは語り出す。

自分とベルクトは違う世界に住まう同一人物だった事

自分はバレルじゃない何かにすぎないと言った事

その為に自分と、世界を憎み、滅亡に追い込もうとした事

彼の父親は自分に会う事にしか興味がなくロクな扱いをされず

だから自分の手で殺したと言った事

「…僕もあいつを止めようとしたんだ、でもあいつはなかなか応じなかった。

最後の最後で説得できたと思ったんだけど…

結局は遅かった。

あいつは最後に、ここからはお前だけの道だと

言い残して、そのまま消えてしまった…はずだったんだ。

でも、あいつはこっちで生き延びて、

そして変わってた。

それを見て思ったよ、僕のした事は無駄じゃなかったってね…」

「バレルさん…」

「多分、ベルクトはフェイトって子の助けになりたいんじゃないかな？

自分みたいに一人で苦しむ人が心配で、ほっとけないんだと思う。」

すると、なのはが顔を上げて言った。

「でも、ひとりぼっちの子にしてあげるのは

大丈夫？って言う事でも、心配してあげる事でもないと思うんです。

「……………」

「同じ気持ちをわけあえる事、悲しいのも寂しいのも半分こに出来る事だと思うんです。」

真剣な眼差しでなのは語る。

それを見てバレルが言った。

「…君は強いんだな、なのは。」

「えっ…いや、そんな事は…」

なのはは少し照れくさそうにする。

「僕と同じように巻き込まれた形なのに、迷わずに戦う道を選んで同じ境遇の子を救いたがっている。本当に立派だよ。」

バレルは最初、戦う事には消極的だった。

時にはもう一人の自分がいるのを不気味に感じ

戦うのを投げ出したくなった事もある。

だが、最終的には戦う意志を見いだし

もう一人の自分たるベルクトを救いたいと思うようになった。

だが、目の前にいる少女には迷いなど一切感じない。

戦う事も、フェイトを救いたい願いも、全て純粋な彼女の思いなのだ。

自分より幼いのに、立派な子だとバレルは感じていたのだ。

「先の事はまだわからないけど…あきらめない強い気持ちがあればきつと乗り越えられると思うわ、私はそう信じている。」

「だから、君もあきらめずに思いをぶつけるんだ。

その為に戦う事が必要なら迷わず戦えばいい。

その為の手伝いなら、僕やフェイもしてあげるから。」

フェイもバレルも優しい表情でなのはに言った。

「バレルさん…フェイさん…ありがとうございます！…」

2人の心遣いに感激し、なのはは立ち上がって礼を言った。

その時、アースラ内に緊急のアラームが鳴り響いた。

第12話（後書き）

ということそれぞれの思いでした。

各人物ごとの細かい心理描写は苦手なので
グダグダになってないか心配です…

感想、要望、質問などありがとうございます。

コンビネーションアタック…

全然考えていませんでした。

もし、機会があれば描くかもしれませんが

何分初心者なので、あんまり期待はしないで下さい…

タツクとマリナについてですが、

ネタバレになるのであまり語りたくないです

強いて言うなら、またかと思うかもしれませんが

出番はA・S編以降となります。

活躍期待している方はごめんなさい。

もうしばらくの辛抱を。

オリジナルの武装などについてですが
ぶっちゃけ言々と私、別サイトでオリジナル系関連で
大失敗してる前歴がありまして…orz
そっちの望みも薄いものと思つて下さい。
せつかくいろいろ案を考えて頂いてくれるのに
それを活用できないヘタレで本当に申し訳ないです…

次回は竜巻戦になります

原作あんまり覚えてないから見直してこないと…

ご意見、感想、指摘、ヘタレ作者への叱咤激励など、
まだまだお待ちしております。

第13話（前書き）

荒れ狂う海上

6つのジュエルシードを巡ってなのは達とフェイト達は…

第13話

曇天の海

その海上には巨大な黄色い魔法陣が展開していた。

「…煌めきたる天神よ、今導きの下、降り来たれ…」

魔法陣の近くで、フェイトが呪文を唱える。

その傍らで狼形態のアルフが心配そうに様子を見つめていた。

（ジュエルシードは多分海の中…だから、魔力流を打ち込んで

強制発動させて位置を特定、そのプランは間違っではない…けど、

フェイト…）

「…撃つは雷、響くは天雷…」

呪文を唱えるフェイトの近くで、ベルクトも筒を構える。

（俺がサポートしているとはいえ…主導はほとんどフェイトだ…

何時魔力の限界が来てもおかしくはない…）

「はああああ！」

フェイトが呪文を唱え終え、眼下の海に雷を打ち込む。

それと同時にベルクトも、筒の間の魔法陣から紫色の閃光を放つ。

すると、海の中からジュエルシードの光が6つ現れた。

「はあ…はあ…見つけた、残り6つ！」

フェイトが息を荒げながら言う、やはり相当魔力を消費してるようだ。

「アルフ、空間結界とサポートを！ベルクトは封印の手伝いを！」

「ああ…！」

「了解した。」

フェイトの指示に2人は頷きながら返答し

そして、表情を険しくして心の中で呟く。

（だから…何が起きようと、誰が来ようと！）

（俺たちがフェイトを守り抜く………！）

そしてジュエルシードは巨大な竜巻となる。

「行くよバルディッシュ…頑張ろう。」
そして、フェイトはベルクトと共に竜巻に向かっていった。

ーアースラ内

モニターを見たリンディは驚いて言う。
「何とも呆れた無茶をする子達だわ!」
「無謀ですね…間違いなく自滅します。」
クロノが冷静に呟く。

ちょうどそこに、なのは達がブリッジにやってきた。

「フェイトちゃん!」

モニターに映るフェイトを見て、なのはは叫ぶ。

「あの、私急いで現場に!」

「その必要はないよ、放っておけば自滅する。」

「え!」

なのはの要望を、クロノが振り向いて拒否した。その言葉に驚くのは。

「今の内に捕獲の準備を。」

オペレーターに指示を出すクロノ。

その様子を見て俯いてしまうなのは。

そんな彼女を見てリンディが言った。

「私たちは常に最善の選択をしなきゃいけないの
残酷に見えるかもしれないけど…これが現実よ。」

リンディの言葉を聞いて黙り込むなのは。

するとそこに、ユーノの念話が響いた。

（行って、なのは!）

（え…!）

なのは驚いてユーノの方に振り向く。

（僕がゲートを開くから、行ってあの子を。）

（でも…私があの子と話したいのはユーノ君とは！）

心配な顔をしてなのは言う。だが、ユーノは微笑みながら念話を送る。

（関係ないかもしれない…けど、なのはが困ってるなら僕は助けたいのはが、僕にそうしてくれたように。）

そしてユーノはゲートを開く。

なのはは驚きながらもそのゲートに駆け寄っていった。

「君は！」

「ごめんなさい！高町なのは、指示を無視して勝手な行動をとります！」

クロノの制止を無視して、なのはとユーノはフェイト達の所へ向かっていった。

「バカな…何やってんだあの子達は！」

憤慨しながらクロノが言う。

すると、今度は近くにいたバレルがゲートに向かっていく。

「バレル！君もか！」

「…彼女達2人だけじゃ心許ないだろう？僕も行くよ。」

「しかし！」

「わかってる、僕も軍人だったから何を優先すべきかくらいは、でも…」

尚も反対の意を見せるクロノに、バレルは振り向いて言った。

「誰かを救いたいと思う人の気持ちは

誰にも止められないくらい強い物なんだよ

僕はそんな人を無視できないんだ。」

そう、バレルは思い出していた。

もう一つの地球で出会い、共に戦った3人の友を

彼らも自身の大切な人を救うためならどんな無茶でもしていたのだ。

アースラの人達の助けになりたいというのは勿論だが

先程なのはにフェイトとの事で手伝いたいとも言ったし

何より、なのはの姿がかつての彼らと重なって見えたバレルは彼女を引き止める事など出来なかった。

バレルはゲートを潜り、なのは達の下へ向かった。

そんな光景を眺めて、リンディは呆れたようにフェイに言った。

「気持ちにはわからないけど… あんなのでよく軍人が務まるわけ

…」

「仕方ないですよ、バレルも彼女と似たような境遇でしたから。」

苦笑を浮かべながら返答するフェイ、そして心の中で呟いた。

（バレル… 気をつけて。）

海上

バレルはデバイスを起動させ、なのは達の後を追った。

「バレルさん！」

バレルの姿を見て、なのはとユーノは驚いていた。

「ごめんなさい… でも、私たち…」

「… 大丈夫だよなのは、君は間違っていない。」

「えっ！」

てつきり怒られると思っていたなのはは、意外そうな声を上げた。

バレルはそんな彼女を見て、優しく言った。

「言つたろ、君を手伝つて。それに…人を救いたいって思うことに理由とか、条件とかは必要ないよ。」

「バレルさん…」

「助けたいんだろ彼女を？さあ、早く行こう。」

「はい！」

なのはは力強く返事をした。

そしてバレルは叫ぶ。

「イクスブラウ、Gフォームに移行！」

バレルがそう叫ぶと、2つの翼と3つのブースターが装備されライフルの形が変形した。

「2人共、僕に捕まってくれ、一気に現場まで行く。」

言われてなのはとユーノはバレルのデバイスの翼部分に掴まる。

「プラスマコーティング起動！」

すると、バレルの周りが光に包まれる。

そしてバレルは2人を引き連れ、物凄いスピードで飛んでいく。

「凄い…これほどの速度が出せるなんて。」

バレルに掴まりながら、ユーノはただただ驚いていた。

荒れ狂う海上でフェイトとベルクトは必死に竜巻に立ち向かっていた。

すると、遠方から何かが向かってくる。

「あれは！」

近くでサポートを行っていたアルフが、それがなのは達なのに気づいた。

「フェイト達の…邪魔をするなあ!!」

アルフがバレルに襲いかかろうとする。

ユーノがシールドを展開してそれを防いだ。

「待ってくれ！僕らは戦いに来たんじゃない！」

「え！」

ユーノの言葉にアルフは驚く。

「まずはジュエルシールドを止めないとマズイ事になる！」

だから今は、封印のサポートを！」

そう言ってユーノは魔法陣を展開し、緑の鎖で6つの竜巻を縛った。アルフはそれを黙って見つめていた。

「フェイトちゃん！」

なのはとバレルはフェイト達の近くまで来ていた。

「…高町なのは。」

ベルクトは降り立ったなのはに向かってライフルの銃口を向ける。それを見てバレルがベルクトに叫ぶ。

「ベルクト！今はそんな事をしてる場合じゃ…」

「待ってバレルさん！」

なのははバレルの言葉を遮る。

銃口を向けたままベルクトは更に言った。

「…何が望みだ？」

「ジュエルシールドを止めるのに、協力してほしいんです…」

「時空管理局に…俺たちの敵になっておきながら？」

「……」

なのは俯いてしまう。

「貴様に何がわかる…戦いも、それによる人のエゴも…」

そこから生まれる孤独も絶望も知らないお前に、俺たちの何が…」

「確かに私は…ベルクトさんやフェイトちゃんに比べたら

満ち足りて、甘い人生を過ごしてきたのかもしれない…でも！」

表情を歪めながら言うベルクトに、俯きながらなのは呟く

そして、顔を上げて真剣な表情で叫んだ。

「それでも私は…！フェイトちゃんを助きたいんです！

一人きりの寂しさは…私も、少しだけどわかるから！」

「…！」

なのはの言葉を聞いて、フェイトとベルクトは驚く。

なのはは更に続ける。

「私が…フェイトちゃんを助きたいのは、何か理由や打算があるわけじゃない！

本気の気持ちなの！フェイトちゃんのような悲しい目をした子をほつとけないから！

例えその為に戦う事になっても…私は立ち向かう！

何度でもフェイトちゃんに思いをぶつける！だから今は…！」

ベルクトはライフルを降ろして呟いた。

「…なら、証明してみせろ。」

「え…」

「アルフやあの魔導師が抑えている、さっさと行くぞ。」

「…はい！」

なのはは力強く返事をした。

「ベルクト…」

バレルがベルクトに声をかける。するとベルクトがバレルを見て言った。

「…あいつはお前に似ているなバレル。」

「え？」

「お前に似てとんだお人好しで…真っ直ぐな奴だ。」
ベルクトが微笑する。それを見てバレルも微笑んだ。

「フェイトちゃん！」

フェイトの隣になのはが降り立つ。

フェイトは困惑した表情を浮かべていた。

すると、レイジングハートから桃色の光がバルディッシュに放たれる。

すると、バルディッシュの魔力が回復した。

驚いたフェイトがなのはの方を見る。

なのはは力強く頷いて答えた。

途中からアルフも加わり、2色の鎖が竜巻を抑えている。

「ユーノ君とアルフさんが抑えている間に…4人で一気に封印！」

そしてなのはは場所を変え、レイジングハートを構えた。

それを見た他の3人も、それぞれのデバイスを構える。

荒れ狂う海上に、桃色、黄色、青白色、赤褐色

4つの巨大な魔法陣が展開する。そして…

「ディバインバスター！！」

「サンダーレイジー！！」

「ブラウモデル、フルシユート！！」

「デモニックダークネス・マキシマム！！」

4つの巨大な閃光が6つの竜巻を飲み込んだ。

「アースラのブリッジ

「ジュエルシード、6個全ての封印を確認！」

「な、なんてデタラメな…」

「でも、凄いわ…」

フェイの報告を聞いて、クロノとリンディが信じられないという風に言った。

海上では天気が回復し始め、雲の間から日の光が漏れてきている。6つのジュエルシードを間に、なのはとフェイトは向かい合っていた。

（同じ気持ちを分け合う…そうか、私、この子と分け合いたいんだ。）

なのはは心の中で呟き、右手を胸の前に持ってきてこう言った。

「友達に…なりたいんだ。」

「！！！」

なのはの言葉を聞いて、フェイトは目を見開いて驚く。

その時だった。

アースラの艦内に警報が響く。

「別次元より本艦及び、戦闘空域に向けての魔力攻撃来ます！」

エイミイが叫ぶ、その直後、紫色の電撃がアースラにぶつかった。

「母さん……！」

「あの女……！」

同じく紫色の電撃が降り注ぐ空を見上げながら、フェイトとベルクトは呟く。

すると、電撃の1つがフェイトに向かって飛んできた。

「あああつ……！」

「フェイト……！」

直撃は免れたものの、フェイトはバランスを崩して落下していく。それを見たアルフが瞬時に人間形態になり、フェイトを受け止めた。そして、そのままジュエルシードを手に入れようと突っ込んでいく。だがあと少しというところで、突如現れたクロノによって止められてしまう。

アルフは表情を歪ませて叫ぶ。

「邪魔ア……するなア……！」

「うわああ……！」

クロノはアルフに吹き飛ばされてしまう。

アルフは再びジュエルシードの方を見て、そして驚いた。

「あつ……3つしかない……！」

すると、その眼下でクロノが見せつけるかのように
3つのジュエルシードを己のデバイスに収集する。

それを見たアルフが更に表情を歪ませ、叫ぶ。

「うっうっ……うあああ!!」

右手を掲げ、魔力弾を打ち込もうとする。

だが、ベルクトがそれを止めた。

「アルフ、退くぞ。」

「ベルクト!!」

「フェイトが戦闘不能、しかもあの女まで介入してきている。

このままここにいるのはマズイ……」

そう言うベルクトの左手には、残りのジュエルシードが握られていた。

「…わかったよ。」

アルフは掲げていた右手を下げた。

そして3人は撤退しようとする。それを見てバレルが叫んだ。

「ベルクト!」

ベルクトはバレルの方を見て言った。

「バレル…いずれ管理局が掴むだろうが…

この事件、首謀者はフェイトの母親だ。」

「え!？」

「フェイトは母親に命令されて、無理矢理ジュエルシードを集めさせられている。

俺は…俺とアルフはフェイトを守る為に、共にいるにすぎない。」

「ベルクト……」

ベルクトの突然の独白を、バレルは困惑しながらも聞いている。

ベルクトは更に続ける。

「フェイトを助ける、それが俺の目的だ。

管理局が俺や母親に手を出そうが俺たちには関係ない。

だが…フェイトに手を出そうとするなら…容赦しない…それだけ覚えておけ……」

そこまで言った後、アルフの転移魔法によって3人はその場から消えた。

「ベルクト…やっぱりお前は…」

バレルが呟く。

なのは、ユーノ、クロノ、バレルの4人は再び静けさを取り戻した海上で、しばらくの間立ちすくんでいたのであつた。

第13話（後書き）

という事で竜巻戦終了です。

ベルクトとバレルの共闘…ゲーム内のギスギスした2人の関係を見ていると

文はともかく、絵ではとても想像できないな…

サラツと本音を言っちゃったベルクト。

やはり彼、大分変わってきてますね。

作者自身最後にうまくまとめられるか心配だったりします。

いよいよ無印編も終盤に近づいてまいりました。

応援してくれている読者の皆様、これからもよろしく願いします。

ご意見、感想、指摘、ヘタレ作者への叱咤激励など、まだまだお待ちしております。

第14話（前書き）

一連の事件の犯人を掴む時空管理局
事は終局へ向けて急速に進み出す…

第14話

翌日の早朝

フェイトの住んでるマンションで、ベルクトは目が覚めた。

「む…フェイト？」

随分と辺りが静かなのに不自然さを感じた。

ふとテーブルの上に目がいく。

そこには置き手紙があった。フェイトの物だ。

ベルクトはそれを手にとって読んだ。

内容は至って簡潔だった。母さんの所に行ってくるから待ってほしいと。

（……何もなければよいが…）

手紙を読み終わった後、ベルクトは不安になっていた。

前回あんな事があったのだ。流石のフェイトも

ベルクトを再び母親の下に連れて行くのに抵抗があったのだらう。

とはいえあのプレシアの事だ。

また前と同じように、フェイトを痛めつけるのは目に見えている。

アルフが同行しているとはいえ、やはり不安であった。

（迂闊だったな…）

気づかなかった自分を攻めるベルクト。

そしてふと、昨日の事を思い出す。

（高町なのは…）

ベルクトはなのはの事が気になりだしていた。

フェイトを助けたと言ったあの時の顔、間違いなく本気であった。

そして、一人きりの寂しさは自分もわかるとも言っていた。

「……………」

頭に手を当て、ベルクトは以前彼女に言った事を思い出す。

（目の前にある…全ての者を救える程、世界は…甘くはない！）

（そんな甘い考えのお前に、フェイトの気持ちがわかるものか！）

だがなのはは、自分の言葉を聞いた上で、それでもフェイトを助けたいと言った。

その為に戦う事が必要なら、何度でもぶつかるとも。

彼女のそんな真っ直ぐな気持ちを見て

ベルクトは自分の考えに疑問を抱き始めていたのだ。

（俺は…決めつけていたのかもしれないな…）

手を当てたままベルクトは思う。

よくよく考えれば、世界滅亡を心に決めた動機も

自分はバレルの偽造品で、この世界に自分の居場所など無い

だから、滅ぼす。そんな感じの決めつけからだった。

だが今の自分はどうか？

世界が違うとはいえ、ベルクトという個を確立し

フェイトやアルフも自分を認めてくれている。

自分の居場所がちゃんと存在しているのだ。

今回にしたって、目的が同じで譲り合う事ができない以上

争い合う以外の方法など存在しないと思っていた。

だが昨日は、途中でプレシアや他の時空管理局の魔導師が介入した
とはいえ

ああして協力仕合う事が出来た。

争い合うばかりではなかったと言えるのだ。

とっさにバレルに自身の目的を話したのも

彼や、その近くにいるなのはに賭けてみたい
そんな思いがあつたからなのかもしれない。

（フェイト…高町なのは…バレル…）
頭から手を離し、俯きながらベルクトは
しばらくの間考え続けるのであつた…

アースラの会議室

なのは、ユーノ、バレルの3人は今回の件についてのお叱りを受けていた。

普段温厚なリンディも、流石に険しい表情をしていた。

そして、本来なら厳罰に処すべきものだが
結果に得る物もあつたので、不問という形で話は終わった。

「さて…問題はこれからね…クロノ、何か事件の大元に心当たりが
？」

表情を崩さないまま、リンディはクロノの方を見て言った。

「はい、エイミィ、モニターに出してくれ。」

「はいはい。」

腕を組みながら様子を見ていたクロノが前に出ながら言い
エイミィが通信でそれに答える。

そして会議室中央のテーブル上に、プレシアの姿が映し出される。

「あら。」

リンディはそれを見て、少し驚いたようだ。

「そう、僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師、プレシア・テスト
ロツサだ。」

モニターを見ながら、クロノが説明する。

「専門は次元航行エネルギーの開発、偉大な魔導師でありながら
違法研究と事故によって、放逐された人物。

登録データと、さっきの攻撃の魔力波動も、一致しています。」

「じゃあ…あのフェイトという少女は…」

「親子…というわけね。」

フェイが洩らした疑問に、リンディが答える。

「フェイトちゃん、あの時…母さんって言ってた…」

その…驚いてるっていうより…怖がってるみたいでした。」

「あの黒衣の魔導師…ベルクトが言っていた事は

あながち間違いじゃないのかもしれない。」

少し俯きながら呟くなのは言葉の聞いて、クロノが言う。

「事態は…思っているよりも複雑そうね…」

腕を組みながら、リンディが固い表情で言う。

そして立ち上がり、更に言った。

「とにかく、あなた達は一休みしておいた方がいいわね

特になのはさんは、あまり長く学校を休んでも良くないでしょう。

一時帰宅を許可します。ご家族と学校に顔を見せておいた方がいい
わ。」

「はい…」

リンディの言葉に、頷きながらのはは答えた。

時の庭園

部屋の中央に倒れているフェイトにアルフが駆け寄っていく。

「フェイト！フェイトッ！！」

ベルクトの予想通り、フェイトはプレシアに

また鞭による折檻を受けたのだった。

「フェイト……」

倒れているフェイトを優しく抱きしめ、涙を流すアルフ。

そして、プレシアがいる部屋の扉に顔を向けた。

「ゴホッ！……ウウッ……」

階段の上、8つのジュエルシールドを前に、プレシアは咳き込んでいた。

自分の手と周りが、血で赤く染まっている。

「たったの8つ……これではアルハザードに届かない……」

もうあまり時間が無いわ……私にも、アリシアにも……！」

苦しげな声でプレシアは呟く。

その時、部屋の扉が勢いよく破壊された。

「……？」

プレシアは少し驚きながら振り向く。

そこに立っていたのはアルフだった。

顔には凄まじいまでの怒りが浮かんでいる。

「フンッ……」

そんなアルフを見て、大した事はないという風に鼻で笑うプレシア。アルフはプレシアに向かって突進していく。

だが、掴みかかる直前で、突如紫色の魔法壁が出現し、それに跳ね返されてしまう。

アルフを冷たい目で見下ろすプレシア。

アルフは再度突進し、魔法壁を無理矢理破壊して、プレシアの胸倉を掴んだ。

「アンタはあの子の母親でッ！あの子はアンタの娘だろうッ！あんなに頑張ってる子に、何であんな酷い事が出来るんだよ！！」
凄まじい形相でプレシアに迫るアルフ。

だが突如、現れた第三者によって蹴り飛ばされる。

「ガッ……！」

階段の下に落下し、苦しげに蹴られた腹部を抑えるアルフ。

「いけないワンちゃんだ事……あのお人形さんはペットの躰も出来ないのかしら？」

現れた第三者ーアンジェが、アルフを見下しながら言った。

「人形……誰が、人形なのよ……」

アンジェを見上げる形で、アルフが立ち上がりながら言う。

「人形は人形よ……金髪で黒い服を着た……女の子の二・ン・ギ・ヨ・ウ！」

チツチツチツと人差し指を振りながら

小馬鹿にしたような顔でアンジェは言う。

「……貴様アアアア!!」

怒りの表情で叫びながら、アルフは魔法陣を展開する。

「……セトアップ、エリゴル・カスタム。」

それを見たアンジェが呟く。

その直後、彼女の体が光に包まれ、全身に紫色の重厚な鎧が装備された。

「ハアアア!!」

アルフが魔法陣から鎖をいくつも発生させ

アンジェの体を何重にも縛り上げる。

だが、アンジェは涼しい表情をしたまま呟いた。

「エナジーシエイブ。」

周囲に黒いフィールドが展開する。

そして、光の鎖は拘束力を失い崩れ落ちる。

その光景を見て、アルフは目を見開いて驚く。

「今の……ベルクトの……!!」

「……エナジーフレーム。」

アンジェが更に呟くと、彼女の体と周辺が赤紫のフィールドに包まれる。

その状態のまま、アルフに向かって突進した。

そして、アルフはそのまま吹き飛ばされ、背後の壁に叩きつけられる。

「あつけないわねえ……ベルクトも堕ちたものだわ……」

こんな甘ちゃんに情けをかけるなんて……」

倒れるアルフに近寄りながらアンジェが言う。

アルフは口から血を出し、苦しげに言った。

「アンタ……ベルクトの事……知って……うっ!!」

「さあね……答える意味なんて無いわ。あんたは死ぬんだから……」

傷を抑え苦しむアルフを見下しながら

右手を彼女に向けてアンジェは言った。

そして、右手の装甲に光が収束していく。

「さよなら…」

アンジェがそう呟くと同時に、紫色の閃光が発射された。

「……」

だがアルフはその直前、床下を破壊し、時の庭園から脱出した。
次元空間に落ちていくアルフ。

「どこでもいい…転移しなきゃ…ゴメン、フェイト…少しだけ待ってて…」

そう言って、アルフの姿は消え去った。

「……帰ってきたか。」

玄関が開く音を聞いて、ベルクトは思考を打ち切ってそこに向かう。
玄関には、やはり傷だらけになったフェイトがいた。

（やはりか…）

予想通りの結果になってしまい、表情を歪めるベルクト。
ふと、ある事に気づいた。

「フェイト、アルフはどうした？」

「……………」

「…フェイト？」

黙り込むフェイトを見て、嫌な予感がするベルクト。

やがてフェイトが呟いた。

「怖いから…逃げ出したって…母さんが…」
「なっ……………!!」

その言葉に目を見開き、反射的にフェイトの肩を掴むベルクト。
同じように目を見開いて驚くフェイトに、ベルクトは尋ねた。

「貴様は…信じるのか？」

「……………」

「母さんが言ってたから…………アルフは逃げ出したと…そう言うのか？」

冷たい表情で言うベルクトから目をそらし、ポツリと呟く。

「母さんが…言ってたなら…」

「ッ!!」

ベルクトはフェイトの頬を平手で叩いた。

パシィ!

乾いた音が玄関に響く。

「ベルクト……………」

「……………」

頬を抑えながら、寂しげな表情でベルクトを見つめるフェイト。
ベルクトは何も喋らない。

暫しの沈黙、やがてベルクトが口を開く。

「……プレシアは、他に何と言っていた。」

「……残りのジュエルシードを、急いで持ってこいて……」

「そうか……」

フェイトが寂しげな表情のまま問いに答える。

（クソッ……！）

ベルクトは内心で自分自身に苛立っていた。

フェイトはああ言っていたが、あのアルフが逃げ出すわけがない。間違いなくプレシアが手を下したとしか思えない。

自分が行かなかったばかりに最悪の事態が起こってしまったのだ。

（……時間が無いか。）

ベルクトは思う。

昨日の介入、アルフへの対応、プレシアがなりふり構わなくなってきた。

このままではいずれ、その魔の手がフェイトに伸びるのも時間の問題だ。

21個のジュエルシード、その全ての所在はハッキリしている。

となると、相手側もこちらのジュエルシードを入手すべく動き出すだろう。

（なら……賭けてみるのも手か……？）

思い出すのはあの白い魔導師、高町なのは。

確信は持てないが、彼女がいずれフェイトの前に現れる。そんな気

がしていたのだ。

「……フェイト」

また暫しの沈黙を挟んだ後、ベルクトが言った。

「残りのジュエルシードは全て、あの高町なのはという少女が持っている…」

となれば、いずれお前の前に姿を現すと俺は思う。」

「……………」

「その時に、全てのケリをつける。母親の事や、自分自身の事に。」

「ベルクト……………」

「忘れるな。俺はお前の味方だ、決してお前を裏切ったりはしない。それはあいつも、アルフも同じ筈だ。

だから…もっと自分のパートナーを信じてやれ。」

「ベルクト…!!」

フェイトは泣き出し、そのままベルクトの胸に抱きつく。

ベルクトはそんな彼女をただただ見つめていた…

海鳴市、アリサ・バニングスの屋敷、そこに狼形態のアルフがいた。彼女は転移で海鳴市に移動、傷だらけで倒れていたところを

偶然通りかかったアリサに保護されたのだ。

今彼女の目の前には、フェレット姿のユーノがいる。

（一体どうしたの？君たちの間で何が…）

後ろを向いて俯きながらアルフは念話を返す。

（アンタがここにいてるって事は、管理局の連中も見てるんだろうね…）

アースラのブリッジにいたクロノがそれを聞いて、モニター越しに答える。

「クロノ・ハラオウンだ。どうも事情が深そうだ…」

正直に話してくれれば悪いようにはしない。

君の事も、君の主、フェイト・テストロッサの事も…」

目を瞑り、アルフは答える。

（話すよ全部…だけど約束して、フェイトを助けるって…）

あの子は何も悪くないんだよ…）

それを聞いていたフェイトとバレルが呟いた。

「やっぱり…ベルクトは彼女の事…」

「ああ…あいつの言った通りだった。」

（なのは…聞いたかい？）

（うん…全部聞いた…）

アルフの話を聞いた後、ユーノとなのはが念話で会話していた。

（君の話と、現場の状況、アルフの話と現状を見るに

この話に嘘や矛盾はないみたいだ…）

アースラのブリッジでクロノが言った。

「プレシア・テストロッサを捕縛する。艦長の命があり次第
任務をプレシアの逮捕に変更する事になる。

君はどうする…高町なのは？」

モニター越しにクロノがなのはに尋ねる。

（私は…）

少し俯いて考えた後、顔を上げ、強い表情でなのはは答えた。

（私は、フェイトちゃんを助けたい！

アルフさんやベルクトさんの思いや、私の意志

フェイトちゃんの悲しい顔は、私も何だか悲しいの…だから助けた
いの！）

それを聞いて、クロノが微笑を浮かべながら言った。

「わかった。フェイト・テストロッサについてはなのはに任せる。」
続いてアルフが、念話でなのはに言った。

（なのは…だったね、頼めた義理じゃないけど…

ただどお願い、フェイトを助けて…）

（うん、大丈夫、任せて。）

そして今度は、バレルがモニター越しに言った。

「なのは、残りのジュエルシードは全て彼女が持っている。
近い内になのはの前に現れると思うんだ。」

（はい…）

「その時が勝負だよ。彼女に、自分の全てをぶつけるんだ。」

あきらめなければ、きっと彼女に伝わるよ。」

（はい！）

なのは力強く返事をした。

「何か…随分と立派になったわね…他人にあんな事を言えるなんて…」

「いや、フェイ…立派だなんて、そんな…」

笑顔でフェイに言われ、頭をかきながら照れまくるバレル。

「…コホン！」

だが、クロノの咳払いで2人は我にかえた。

数日後の早朝、海鳴臨海公園

そこに、なのはとバレル、フェレット姿のユーノと狼形態のアルフがいた。

なのはは目を瞑り、叫んだ。

「ここならいいよね…出てきて、フェイトちゃん！」

波の音が響く、そして背後の林がざわめき

そこからフェイトとベルクトが現れた。

（ベルクト…！）

（アルフ、無事だったか…）

アルフの無事を確認して、安堵の表情を浮かべるベルクト。

そしてアルフはフェイトを見て、心配そうな顔をして言った。

（フェイト…もうやめようよ…あんな女の言うことなんて聞いちゃ

ダメだよ…

このままじゃ不幸になるばかりじゃないか…だから…)
だがフェイトは首を左右に振る。

それを見たなのは手を掲げ、バリアジャケットを纏う

「ただ捨てればいいってわけじゃない…逃げればいいってわけじゃ、もつとない…」

きっかけはジュエルシード…だから賭けよう

お互いが持つてる、全てのジュエルシードを！」

なのはがそう言つと、彼女の周りに所持している

ジュエルシード全てが表れる。

フェイトの周りにも同様に表れた。

「それからだよ…全部、それから…」

なのはは真剣な表情で言いながら、レイジングハートを構える。

そんな光景を見ながら、バレルはベルクトに念話を飛ばす。

(ベルクト…)

(わかってている…全ては、この決闘が終わってからだ。)

無表情を崩さないまま、ベルクトは答えた。

そして、なのはが言つた。

「私たちの全ては…まだ始まつてすらいない…」

だから、本当の自分を始める為に…

始めよう、最初で最後の本気の勝負！」

そして、フェイトも無言のままバルディッシュを構えた。

なのはとフェイト、2人の最初で最後の決闘が、今始まつた。

第14話（後書き）

ということでは決闘開始。

ベルクトとフェイトが凄いシリアスな空気に…
こんなん本当にゲームの彼からは想像できない…

何気にアンジエも第暴走

ゲームでの扱いの悪さの鬱憤を晴らしているかのようだ（笑）

次回、引きを見ればわかる通り
無印の大イベント、なのはとフェイトの決闘になります。

ご意見、感想、指摘、ヘタレ作者への叱咤激励など、まだまだお待ちしております。

第15話（前書き）

なのはとフェイトの決闘
そして動き出すプレシア

今回は後書きは無しです。

第15話

「どっちが勝つんだろうな…」

「さあな…今の高町なのは強い、戦い方次第ではフェイトにも匹敵する。」

2人の決闘を眺めながら、バレルとベルクトが呟く。

ふとバレルが尋ねた。

「しかし…珍しいじゃないか。」

「何がだ？」

バレルの方を見て、ベルクトは首を傾げる。

「お前が変わったのはわかるけど…」

それでもお前は、決闘とか真剣勝負とか

そついう手段を実行に移すとは思えなかったからな。」

バレルはそう思っていた。

如何にベルクトが変わったとはいえ。

彼はそういうのを好むガラでは無いはずだ。

まして、以前会った時の口ぶりや、調べ上げた情報から基づけば彼の一番の優先順位はフェイトの筈だ。

なのはが残りのジュエルシードを所持しているとはいえ、フェイトは母親の命で無理矢理動いているに過ぎない。

いずれ向こうからやってくるのはわかっていたが

わざわざこのような回りくどい形を取らなくてもいいのではないか？
通常なら2人で向かってきた方が効率的な筈
そうバレルは思っていたのだ。

バレルから顔をそらし、暫く沈黙した後、ベルクトは言った。

「…時空管理局はもう、犯人を特定したのだろうか？」

「ああ…俺たちは今、プレシアの逮捕を最優先任務としている。」

「…この場には全てのジュエルシードが存在している。

あの女が動かない筈がない…その動きを管理局が必ず掴むだろう。
それが狙いだ、だが…」

顔を俯かせ、ベルクトは続ける。

「…本当は、フェイトの為なのかもしれない…」

「彼女の？」

「ああ…フェイトは優しい…優しすぎる奴だ…」

故に母親の言葉に何ら疑問を持たずに、それをこなそうとする。

最近のあいつは、追いつめられた感じさえしていたんだ…」

「……………」

ベルクトの言葉を黙って、真剣な顔で聞くバレル。

ベルクトは顔を上げ、バレルの方を向いて、更に続けた。

「思い出したんだ、お前との事を。」

「え…俺？」

予想してなかった言葉に少し驚くバレル。

「俺がここまで変わったのは、お前が俺に何度も言葉をかけてくれたからだ。」

あの高町なのはと同じように、真っ直ぐな気持ちでな…」

「……………」

「俺は変わったとはいえ、あんな身の上だったしな。」

本当の意味で人を助けるといのが、どういう事なのか

深い部分まではわからん…だから、いつそ賭けてみる事にした。
高町なのは…あの白い魔導師が、フェイトの何かを変えてくれるのをな…」

「ベルクト……」

ベルクトの言葉を聞いて、つい微笑みを浮かべるバレル。
ベルクトもバレルを見ながら微笑む。

「人を…誰かを助けるといのは、難しいなバレル。」

「…焦る必要はないさ、せっかく変わって

やり直す機会に恵まれたんだ。

目の前の事を終わらせて、それからじっくり考えればいいさ。」

「……そうだな。」

海上、互いのデバイスがぶつかり合う、そして2人は距離を取る。

フェイトはフォトンランサーを放つ為に、バルディツシュを構える。
それに対してなのはもディバインシューターの発射態勢を取る。

「ファイア！」

「シュート！」

桃色と黄色の魔力弾が辺りを飛び回る。

なのはは縦横無尽に飛び回り、フォトンランサーをかわす。

フェイトはディバインシューターを引きつけ、シールドを展開してそれを防ぐ。

だが、フェイトが気づいた時、なのはは既に次弾の発射態勢に入っていた。

「シュート！」

再びフェイトに向かって魔力弾が放たれる。

フェイトはバルディッシュに魔力刃を形成し、それらを切り裂いてゆく。

再び距離を取って相対する両者。

フェイトは呼吸を荒げながら、なのはの實力に驚いていた。

（初めて会った時は、魔力が強いだけの素人だったのに…

でも、もう違う…速くて強い…迷ってたらやられる…）

額に汗を浮かべるフェイト、だが直後に真剣な表情になる。

（でも…私は、負けられない…私の事を思ってくれてるアルフや…私を裏切らないって言うてくれたベルクト…そして、母さんの為にも！）

そしてフェイトはバルディッシュを構え、

足下に巨大な魔法陣を展開する。

それと同時に、なのはの周りにいくつもの魔法陣が表れては消えてを繰り返す。

「あっ！！！」

その直後、なのはの両手、両足が光のリングによって捕らえられた。そしてフェイトは自身の周辺にいくつもの魔力弾を生み出していく。その光景を見たアルフが焦りながら叫ぶ。

「ライトニングバインド…マズい！フェイトの奴、本気だ！」

「なのは！今サポートを！」

ユーノがそう言うが、なのははそれを拒んだ。

「ダメ！2人とも手を出さないで！これは私とフェイトちゃんの一騎打ちだから！！」

眼下の2人の方を向きながらなのはは叫ぶ。

だがアルフは心配そうに言う。

「だけど、フェイトのアレは本当にマズいんだ…このままじゃ！」
「大丈夫！！」

アルフの声を聞いて、真剣な顔で答えるなのは。

「…唸りし天神よ…今導きの下、撃ちかかれ…」

フェイトが呪文を唱え、右手を掲げる。

「フォトンランサー・フランクスシフト…」

そして右手を前に振り下ろし、叫んだ。

「打ち砕け、ファイア！！」

無数の黄色い魔力弾がなのはに向かっていく。
そして魔力弾がなのはにぶつかり、爆発した。

「なのは！」

「フェイト！」

それを見て叫ぶユーノとアルフ。

「なのは…大丈夫か…」

「……………」

バレルは心配そうな表情で、ベルクトは無表情のままそれを見つめる。

「はあ…はあ…」

爆煙を見つめ、息を荒げながらも、左手を掲げ魔力を集中するフェイト。

そして煙が晴れる。

「はは…撃ち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね…」

そこには、ほとんど無傷のなのが立っていた。

「凄い…あれだけの攻撃を受けて…」

「……何て奴だ。」

その様子を見ていたバレルとベルクトが信じられないという風に言った。

「今度はこっちの……番だよー!!」

そしてなのははレイジングハートを構え、デイベインバスターを放つ。

「ッ!…ええい!」

それを見たフェイトが左手の魔力を、なのはに向けて放つ。だがそれはデイベインバスターの閃光に容易く打ち消された。

「あつ…！」

フェイトは驚きながらもシールドを展開し、桃色の閃光を受け止める。

（直撃…でも、耐える…あの子だって耐えたんだから…！）

必死な表情でそれを防ぐ、羽織ったマントが破け、徐々に押されるフェイト。

そして、何とかそれを防ぎきった。

苦しそうな表情を浮かべるフェイト。

だが、なのはは更に新たな魔法を放つべく、レイジングハートを掲げた。

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション！」

なのはの眼前に魔法陣が表れ、桃色の光が収束していく。

それを見たフェイトが、再びシールドを構えようとするが

「…バインド！」

彼女が気づいた時には、両手、両足が光のリングで拘束されていた。そしてなのはは、フェイトに向けて、レイジングハートを振り下ろした。

「これが私の全力全開！スターライト・ブレイカー！」

魔法陣から、ディバインバスターとは比較にならない

巨大な桃色の閃光が放たれ、フェイトに直撃した。

スターライト・ブレイカーを受けて、気を失い落下していくフェイト。

「フェイトちゃん！」

なのはが叫ぶ。

だが海面に落ちる直前に、ベルクトがそれを受け止めた。

「フェイト…」

心配そうな表情を浮かべつつも

ベルクトはフェイトを抱えたまま、なのはの前に行く。

「ベルクト…」

「立てるか？」

気がつき、自分の名を呼ぶフェイトに尋ねるベルクト。

フェイトは頷いて答え、ベルクトの横に立った。

「ベルクト…私…」

俯き、寂しげな表情でフェイトは呟く。

ベルクトはフェイトの頭に手を置き、優しい表情で言った。

「大丈夫だ…お前はよくやった、気に病む事はない…」

「うん…」

ベルクトの言葉を聞いて、少し表情が和らぐフェイト。

そしてベルクトはなのはの方に振り向く。

「高町なのは…」

「ベルクトさん…」

少し沈黙した後、ベルクトは言った。

「……お前の勝ちだ。」

その直後、バルディッシュからジュエルシードが放たれる。

その時、空が急激に曇り、辺りに紫色の電流が降り注ぐ。

その1つがフェイトに直撃した。

「ああああ!!」

「フェイトちゃん！」

倒れるフェイトを見て叫ぶなのは。

それを再びベルクトが受け止める。

そしてバルディッシュから放たれたジュエルシードは
電流が降り注ぐ雲の彼方へと飛んでいった。

「3人共、大丈夫か!？」

そこに、バリアジャケットを纏ったバレルも飛んでくる。

ベルクトはフェイトを抱えたまま、表情を歪ませ、空を見上げて呟いた。

「プレシア……!」

アースラブリッジ

エイミィが慌ただしくボードを叩きながら叫んだ。

「ビンゴ! 遂に尻尾掴んだよ!」

エイミィの言葉を聞いて、冷静にクロノが答える。

「よし… 不用意な物質転送は命取りだ、まずは座標を…」

「もう割り出して送ってるよ!」

クロノの言葉に得意気に答えるエイミィ。

そしてリンディが立ち上がり、命令を下した。

「武装局員、転送ポートから出動!、任務はプレシア・テストロッサの身柄確保です!」

バレル達の前に魔法陣が表れ、そこにフェイの姿が映し出された。

「バレル、すぐになのはさん達を連れて帰還して！」

「フェイ！これは一体！」

「プレシアの居場所を遂に掴んだわ！」

魔法陣に映し出された人物を見て、ベルクトが驚きを見せる。

「フェイ…お前もこの世界に…」

「久しぶりね…でもそんな空気に浸ってる場合じゃないわ。」

ベルクトの姿を見て、一瞬表情が和らぐが、すぐに引き締め直す。

そしてフェイは続けてバレルに言った。

「とにかく詳しい動きは戻ってから話すわ！」

ベルクトとフェイトさんも連れてきて！」

「ああ、わかった。」

バレルがそう答えると、魔法陣は消え去った。

そしてバレルはベルクトの方を向き、固い表情で言った。

「ベルクト…いいんだな？」

「…ああ。」

ベルクトは無表情のまま答えた。

時の庭園

王座に座りながらプレシアは苦しげに呟く。

「…次元魔法はもう、体が持たないわ…それに、今のでこの場所も掴まれた…」

「あのお人形さんも潮時…という事かしら？」

傍らで様子を見ていたアンジェが、笑いながらそう言った。

「どうする？管理局の奴らが挙げて攻めてくるわよ？」

早くしないと、アレにも危険が及ぶんじゃない？」

プレシアは俯きながらアンジェの言葉を聞く、そしてこう答えた。

「…防衛はあなたに一任するわ、ただ…絶対に、アリシアだけは、守り抜くのよ…」

「了解よ…フツ、久しぶりに暴れられるわ…」

プレシアの言葉を聞いて、満足げに言いながら、アンジェは部屋を後にした。

1人になり、俯きながらプレシアは呟く。

「たったの8つ…これで上手くいく保障は無い…だけど、時間が無いのも事実。」

そして立ち上がり、目を見開いて言った。

「だからもういい…全てを終わらせましょう。」

第16話（前書き）

アースラに来たベルクトとフェイト
そして明かされる衝撃の事実…

第16話

アースラのブリッジ

なのは、ユーノ、アルフ、バレルが

フェイトとベルクトを伴って帰還した。

因みに2人の腕には拘束具がつけられている。

「お疲れ様。」

リンデイがなのは達の方を向いて言う。

そしてフェイトとベルクトに顔を向けた。

「それから…フェイトさん、ベルクトさん、はじめまして。」

「……………」

フェイトは待機状態のバルディッシュを握り締め、顔を俯かせる。

（とりあえずは、これで良いか……）

拘束具をつけたままベルクトは考える。

アースラのモニターには、時の庭園の様子が映し出されている。

管理局の戦力がどの程度かはわからないが

あれだけの人数を導入すれば、フェイト以外に頼れる者のいないプ

レシアを

恐らくは捕縛出来るはずだ。

ふとベルクトはフェイトの方に顔を向ける。

「……………」

フェイトは俯いたまま黙り込んでいる。

やはり母親が捕まるのが辛いのだろう。

ベルクトは少し、胸が締め付けられるような思いがした。

（だが…フェイトの為にも…）

そう、フェイトは母親に心を捕らわれている。

本来ならベルクトは、自分自身でそれを何とかしたかったのだが

皮肉にも、フェイトの味方でいたのが災いしていたのだ。

自分やアルフがプレシアに手を出せば、フェイトが黙ってはいない。

彼女は誰よりも母親が大切だった。

だが、彼女は仲間にも大きな信頼を寄せている。

故に、自分が信じている者同士が争うなどというのは

彼女にとっては耐え難い苦痛になる。

ならいつその事、フェイトを含めた自らが管理局の側に落ち

その上で管理局にプレシアを任せた方がいい。

そういう考えに至ったのだ。

敵の手を借りるなどというのはベルクトにとっては、本来望む事ではない。

だが、感情的にプレシアに食ってかかってしまう自分やアルフに比べれば

彼らの方が、感情的にならない分落ち着いた対応が出来ると言える。現に、先ほどバレルから聞いたが、管理局はプレシアを逮捕するつもりである。

いきなり目の前で殺したりしないなら、辛い思いをさせるとはいえ、フェイトが良からぬ事態に陥ったりはしないだろう。

それに管理局にはバレルやフェイ、そして今はアルフもいる。

アルフがわざわざ自分から管理局に身を置いているという事は少なくともフェイトには、管理局側から

何か過剰な対応をされる事は無いと言えるに等しい事だ。

そして高町なのは、

フェイトと真剣に向き合い、彼女の事をとて思っている人間がここにいる。

ベルクトの中で、なのはに対する評価は変わっていた。

最初は孤独や絶望を知らぬ、甘い子供だと思っていたが

竜巻でのやり取りや今し方の決闘などを経て

彼女もまた、孤独の悲しみを知り、その上で

フェイトを救いたいと思っている。

バレルと同じで、真っ直ぐな強い少女という風に認識するようになった。

今後どのように事態が転がるかはわからないが、

フェイトと真剣に向き合い、そして勝利をおさめた彼女なら

自分たちと同じように、今の悲しみに暮れるフェイトを

支えられる筈だと思い始めていたのだ。

そこまでいろいろ考えて、ベルクトは管理局側に来たのだが
(何だ……この胸騒ぎは……)

先ほどからベルクトはどうも落ち着かなかった。

何か……とてつもない事が起こりそうな気がしていたのだった。

モニターには丁度、局員達がプレシアを取り囲んでいるのが映されていた。

「プレシア・テストロッサ、あなたを逮捕します！」

局員がそう言いながら、周囲に散らばっていく。

そして局員の1人が隠し通路らしき物を見つけた。

それを見た瞬間、プレシアが目を見開く。

「あの女は……何をやっているのよ……！」

そして局員達が通路の先に進み、中の様子が映し出された。

「え……？」

モニターに映された光景を見て、なのはが驚く。

いや、なのはだけではない、その場にいた全員が驚いていた。

そこには、巨大なガラス管があり、中が液で満たされている。その中央に…

「フエイ…ト…？」

ベルクトが目を見開いて呟く。

その中央には、フエイトに瓜二つの少女が浮かんでいたのだ。

「私のアリシアに近寄らないで！！」

次の瞬間、プレシアが管の前に突如現れ。

凄まじい形相で局員の1人を吹き飛ばした。

「撃てー！！」

その光景多少たじろいだが、他の局員がプレシアに向けて魔法を放つ。

だがプレシアに当たる直前に、攻撃の全てが何者かによってかき消された。

「ふん…せっかく楽しめると思ったのに、雑魚しかないじゃない…」

攻撃を全て防いだアンジェは、不満気に言いながら右手を掲げる。

「マルチプルレーザー！」

アンジェの右手から何発もの赤い小さな閃光が放たれ、局員に襲いかかった。

「うわああああー！！」

攻撃をまともに受ける局員達。

それを見たリンディが立ち上がり、慌てて叫んだ。

「いけない！局員達の送還を！」

その光景を見て、バレルとフェイ、ベルクトが驚く。

全身に奇妙な鎧を纏っているが、見間違える筈もない。

「あいつまで…」

「アンジエ…！あなたがどうして!？」

「貴様も…いたというわけかアンジエ…」

それを聞いて振り向き、笑いを浮かべながらアンジエは答えた。

「随分と懐かしい顔がたくさんいるじゃない…」

ベルクト…フェイ…そしてバレルまで…フツ…最高だわ。

あら、ワンちゃんまでいるのねえ…無事だったみたいね。」

その言葉を聞いて歯を噛み締め、険しい表情になるアルフ。

そんな彼女を見てベルクトが尋ねた。

「アルフ、あいつを知ってるのか？」

「ああ…以前、アタシはアイツにやられたんだ…」

その言葉を聞いて驚きを浮かべるベルクト。

そしてベルクトは彼女の方を向いて言った。

「アンジエ…貴様が何故プレシアという？」

「白々しいわね…自分が殺しておきながら…」

表情を歪め言うアンジエ。アースラのブリッジにいた

ベルクト等の漂流組以外の人間が

その言葉の真意がわからずに首を傾げる。

だが、アンジエは直後に、また笑いを浮かべた表情になった。

「まあでも…これからが楽しみだからいいわ…」

利用される事に気づかない、哀れなお人形さんの末路…」

妖しげな笑みを浮かべながらアンジエは言い、プレシアの方に近寄

った。

「説明してあげなさいな、プレシア。」

「アリ…シア…？」

目を見開き、何かなんだかわからないという風にフェイトは呟く。それを聞いて振り向き、プレシアは語り出す。

「聞いていてフェイト…せっかくアリスシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ…役立たずでちっとも使えない…」
そこまで言ってプレシアは、アリスシアが入った管に近づく。

すると、突然エイミイが俯きながら言った。

「…最初の事故の時にね…プレシアは実の娘を亡くしているの…
彼女が最後に行っていた研究は、人造生命の精製と死者蘇生の秘術…
フェイトという名前は…彼女の研究につけられた開発コードなの…」
その言葉を聞いてアースラの人間のほとんどが驚く。
特に過剰に驚いていたのはバレルだった。

「じゃあ、あれは…そして、フェイトは…俺やベルクトと…」

言いながらベルクトの方を見るバレル。

ベルクトも口を開いたまま、目の前の光景を見つめていた。

「よく、調べたわね…その通り…」

アリスシアの入った管を撫で回しながらプレシアは続ける。

「だけどダメね…ちっとも上手くいかなかった…作り物は所詮作り物。」

失った物の代わりにはならないわ…」

その言葉を聞いて、フェイトは肩を押さえて震えだした。

それを見て、バレルが怒りの表情を浮かべながら言葉を発する。

「じゃああんたは…自分の自己満足の為に、こんな…こんな事を…
！」

「そうよ、プレシア・テストロッサは自分の慰めの為だけにフェイトちゃんを作った…」

ワンちゃん、私が以前言った意味がわかった？

そこにいるのは、ただの女の子のお人形よ！」

バレルの言葉に、アンジェがケラケラと笑いながら返答する。それを聞いて更に震えだすフェイト。

アルフの表情がよりいっそう険しくなる。

そして今度はフェイが叫んだ。

「じゃあ、あなたは！人の命を道具のように弄ぶというの！フェイトちゃんはまだ必要ないから見捨てるといの！」

「そうよ…フェイトはただの人形、そしてもう必要ないわ…だから、どこへなりとも消えなさい！」

勢いよく振り向きながらプレシアは叫んだ。

「……………」

「フェイトちゃん！」

その瞬間、目から光が消え失せ、バツタリと倒れるフェイト。なのはがそれを受け止めた。

「バカな…何もかも…何もかもそうだと…」

「ベルクト！しっかりしろ！」

ベルクトも俯きながら震えている。

バレルが駆け寄って落ち着かせている。

その直後、エイミィが叫んだ。

「た、大変大変！屋敷内に魔力反応多数！」

それを見てクロノが言う

「何だ…何が起こっている！」

続いてフェイが叫ぶ。

「屋敷内にAクラス以上の魔力反応多数！」

60…80…まだ増えているわ！」

それを聞いて、リンディが険しい表情で呟く。

「プレシア・テストロッサ…何をするつもり？」

プレシアが手を翳す。

すると、管から拘束具が外れ、宙に浮く。

プレシアが部屋に向かって歩き出すと、アリシアの管もそれについてきた。

すれ違いざまにプレシアはアンジェに呟いた。

「あなたも…もう要らないわ…私たちの旅立ちまでの時間稼ぎをした後、消え失せなさい…」

アンジェはそれに了解の意を示し、そしてアースラの人間に言い放つ。

「ベルクト…バレル…あなた達も早く来なさいな…」

最近、激しい運動をしてなくて退屈なのよ。」

そう言った後、アンジェの姿は消え去った。

部屋の中央まで来た後、プレシアは両手を上げる
すると、彼女の周りにジュエルシードが表れた。

「私たちは旅立つの、忘れられた都、アルハザードへ！

そして取り戻すの…全てを！！」

プレシアが叫ぶ。

その直後、ジュエルシードが光り出した。

アースラ内に警報が鳴り響く。

「次元震です！中規模以上！」

「ジュエルシード8個発動！このままでは次元断層が！」

「転送可能距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動を！」

オペレーターの指示を聞いて、リンディが指示を飛ばす。

そして、クロノが立ち上がり、駆け出しながら叫ぶ。

「僕が止めてくる、ゲート開いて！」

それを見たバレルがクロノの後を追う。

「バレル！」

「1人じゃ危険だ！僕も行く！」

「……わかった、援護を頼む！」

駆けながら、バレルの方を向いてクロノが言った。

そして、2人はゲートのある場所へと姿を消した。

「アハハハハ！！アハハハハハ！！」

プレシアの狂ったような笑いがアースラに響く。

「私たちは、アルハザードで全ての過去を取り戻すのよっ！！

フハハハハ！アハハッ！！ハハハハハハハ！！」

高らかに叫ぶプレシア。

なのはは、そんな彼女をモニター越しに強い表情でじっと見つめていた。

（胸騒ぎの原因はこれだったのか…）
落ち着きを取り戻し、アースラの天井を見上げてベルクトは思っていた。

子を道具のように扱う親

自分と瓜二つの人間が存在する事

もう1人の自分が本物と呼ばれ、自分は紛い物

本物は今、手が届かぬ場所にいる

再会を望み、新たな世界を夢見て、それに心血を注ぐ親

細かい背景の違いはあれど、フェイトと自分は似ている。

あまりにも似すぎていたのだ。

ふと、ベルクトはフェイトを見つめる。

フェイトは目から光が失われ、生きている気配が感じられないような気さえた。

そんな彼女を見て、ベルクトは目を瞑り俯く。

（何故…こんな事になってしまったのだろうか…）

ベルクトはあまりにも壮絶すぎる事実を目の前にして、
今は、呆然と立っている事しかできなかった…

第16話（後書き）

ということ、フェイトの真実の発覚です。

ようやくここまで来れたか…という気分です。

ACEとリリカルなのはのクロスという無茶を始めたのも
フェイトとベルクト、2人の存在が大きかったです。

結果的に私の至らなさで、ベルクトのキャラがかなり変わってしまい
求めてたのと違う！って思った方には非常に申し訳ないですが…

でも、ここまで続ける事ができたのも

万を超えるアクセスや

温かみのある感想を書いてくれる読者の皆様の励みと

その期待を裏切りたくないという気持ちがあったからだと思います。
本当にありがとうございます。

そして、最後の時まで読んでくだされば幸いです。

ご意見、感想、指摘、ヘタレ作者への叱咤激励など、まだまだお待ち
しております。

第17話（前書き）

時の庭園で始まる戦い。

そしてベルクトは、フェイトとアルフに全てを語る…

今回は後書きはなしです。

第17話

アースラ内の通路を

なのは、ユーノ、ベルクト、フェイトを抱えたアルフが走っていた。因みにベルクトは、拘束具を外されている。

しばらく走っていると、反対側から走ってきたクロノとバレルに出会った。

両者は互いに立ち止まり、驚いたような顔をする。そしてなのはが尋ねた。

「クロノ君、バレルさんもどこへ？」

「時の庭園に行つて、プレシア・テストロッサを止める……」

あんな非常な奴を……野放しには出来ないだろう……？」

目を細め、どこか淒まじい形相で答えるバレル。

それを見て若干戸惑いつつも一歩前に出て、強い口調でなのはとユーノが言った。

「わ、私も行きます！」

「僕も！」

2人の言葉を聞いて、クロノが固い表情で答える。

「……わかった。」

続いてユーノがアルフの方を向いて言った。

「アルフは、フェイトについててあげて。」

「あ……うん。」

アルフがそれを了承する。

そして今度はバレルがベルクトに言った。

「ベルクト、お前はどうするんだ？」

「……………」

「状況が状況だ、君はかなり高位の魔導師だという報告を聞いている。」

「できることなら、共に来てくれるとありがたい…」

途中からクロノも言葉を発する。

ベルクトは暫く黙った後、言った。

「……少しやる事がある。それが終わったらすぐに合流する。だから、先に行つててくれ。」

それを聞いてバレルとクロノが頷いて答える。

そしてクロノが高らかに言った。

「よし、行くぞ！」

クロノ達4人がゲートの方に走り去つたのを見送つた後
ベルクトはフェイトに顔を向ける。

「フェイト……………」

フェイトは未だに、目から光を失い呆然としていた。

そんな彼女を見た後、歩き出しながらアルフに言った。

「…とりあえず病室に運ぶぞ、このままでは良くない…」

「ああ、わかつた！」

アルフの言葉を聞いた後

2人は駆け出し始める。

そして、走りながらベルクトは考えていたのであった。

（話すべき…なのかもしれないな…）

時の庭園入口

そこには、多数の傀儡兵が武器を構えて待ち構えていた。

「いっぱいいるね…」

「まだ入口だ…中にはもつというよ…」

ユーノが洩らした言葉に、クロノが返答する。

すると、なのはが心配そうな顔で尋ねた。

「クロノ君…この子達って…」

「近くにいた人間を攻撃するだけの、ただの機械だよ。」

前を向いたままクロノが答える。

それを聞いて、なのはがホッとしたように言った。

「そっか、なら安心だ。」

そして表情を固くし、レイジングハートを構えるが

「この程度の相手に、無駄玉は必要ないよ。」

クロノがそれを右手で制した。

そして、己のデバイスを構える。

それを見て傀儡兵が数体襲いかかってきた。

「はあっ！」

クロノがデバイスを振り下ろす。

『ステインガースナイプ』

声と同時にクロノのデバイスから青白い光が放たれる。それは、襲いかかってきた傀儡兵を瞬時に切り裂いた。

「は、早い！」

そのあまりの早業に、なのはは驚きながら言う。

「スナイプショット！」

クロノが叫びながら再び振り下ろす。

すると、光は螺旋を描いた後、残りの傀儡兵のほとんどを貫いた。更にクロノは奥に残った大型の傀儡兵の前に瞬時に降り立つ。

傀儡兵が手にした斧を振り下ろす。

クロノはそれをかわし、傀儡兵の頭上に立ち、デバイスを突き立てる。

『ブレイクインパルス』

そして次の瞬間、傀儡兵は光を発しながら爆散した。

あまりの光景に、目を丸くしながら立ち尽くすなのはとユーノ。

そんな中、バレルがクロノに近づきながら、感心したように言った。

「やっぱり…クロノは凄いね、僕じゃまだかなわないや。」

それを聞いて振り向き、微笑を浮かべながらクロノは言った。

「最近、戦闘事は君ばかりだったからね。僕も少しは活躍しないと。」

そう言った後、なのは達の方を見て叫んだ。

「ボーっとしてるとおいていくよ！」

その言葉で2人は我を取り戻し、慌てて駆け出した。

暫く廊下を走った後、広い部屋に出た。よく見ると、道が2つに分かれている。

そして、やはり大量の傀儡兵もいた。

それを見てクロノが叫んだ。

「ここからは二手に別れよう！なのはとユーノは最上階に行って駆動炉の封印を！」

「クロノ君とバレルさんは？」

心配そうに尋ねるのはに、バレルが振り向いて答える。

「僕とクロノでプレシアを止めてくる、それが仕事でもあるからね。」

「言いながらバレルは前に立ち、更に続ける。」

「今僕がこいつらを蹴散らす…そしたら、君たちは先に行ってくれ。」

なのははそれに頷き、飛行態勢をとる。

「イクスブラウ、Hフォーム！」

バレルが叫ぶ。

すると、彼の体のあらゆる所に重火器が装備され、

両手に2つの巨大な銃を持ち、頭部がゴーグルのついたメットで覆われた。

「グレネードショット！」

腰部の発射口から、やや大きめの魔力弾が発射される。

そしてそれは、部屋を中心まで飛んだ後

巨大な爆風を巻き起こし、大量の傀儡兵を吹き飛ばしていく。

それと同時になのはが、ユーノを抱えて飛び上がった。

「バレルさん、クロノ君、気をつけてね！」

なのはが飛行しながら2人の方を見て叫ぶ。

2人はそれに対して笑顔を返した。

アースラの病室

中央のベッドにフェイトが横たわり、その傍らには心配そうな顔を
したアルフがいる。

ベルクトは近くの壁に寄りかかっていた。

（同じだった…というわけだ…）

ベルクトは考える。

彼女も自分と同じ、何かの偽造品と呼ばれる存在だった。

そして、その事実を知り、心を閉ざしてしまっている。

そう、かつての自分と同じようになってしまったのだ。

（だが…それが正しいわけがない…）

かつての自分はその事実を知り、父に、世界に絶望して

そして全てを壊す為に狂気に堕ちた。

だが、それは間違いだと気づかされた。

もう一人の自分であった、バレルに。

自分は自分ではない。誰かの偽物などではないと教えられた。

そうしてベルクトは、自分は自分であると認め

偶然もあつたとはいえ、新たな人生を始める事が出来たのだ。

（…同じ過ちを踏ませない為に…全てを話そう。）

フェイトの分身たるアリシアは、既にこの世に存在しない。

ならば、自分が教えてやろう。かつて自分がバレルに教えられたように。

彼女が、自分と同じように狂気に墜ちないようにする為に…
そう決心したベルクトは、フェイトの方に向かって歩み寄った。

「…ベルクト？」

急にこちらに近づいてきたベルクトを見て、アルフが言葉を発する。

「フェイト、アルフ…これから言うことをよく聞いてくれ。」

そしてベルクトは真剣な表情で語り始める。

「今から俺の全てを話す…」

場の空気が重くなる

フェイトは変わらず光の宿らない目で、上を見上げている。

アルフはベルクトの急な発言に戸惑っていた。

「俺は…俺はかつてバレルだった。」

「はっ!？」

ベルクトの言葉の意味が分からず、間抜けな声をあげるアルフ。

ベルクトは続ける。

「俺とバレルは、バルドナ・ドライブの鍵として生まれた

違う世界に存在する同一の人間だった。」

「えっ…?」

その言葉にアルフは驚き、そして過去にベルクトが言った事を思い出す。

(じゃあ…ベルクトはまさか…)

「俺は自分の父、ジル・バルドナにその事を教えられ

そして、バレルとは違うバレルじゃない紛い物だと言われ

バルドナ・ドライブ使用の為の道具として使われた…だから、殺した。」

(!!!)

アルフの予感的中していた。そして全てを一度に理解した。

目の前にいるこの男も、フェイトと同じだった…

以前自分に話した父を殺した理由、プレシアに会った時の対応全てが納得いくようになった。

啞然としているアルフを見やりながら、ベルクトは更に続ける。

「だが…父を殺した後でも、俺の絶望は消えなかった。

自分は誰かの紛い物、この世界にいる意味が存在しない…

そういう風に捕らわれてしまった…

そして愚かにも、全てを壊すと思うようになったんだ…」

「どついう事だい…？」

恐る恐る尋ねるアルフに、ベルクトは表情を変えずに答える。

「バルドナ・ドライブは完全稼働に至ると、2つの世界を完全に繋げる。」

それは、違う2つの世界をぶつけ合う事を意味する。

つまり…俺はかつて世界の滅亡を謀ろうとしたわけだ…」

「なっ…!!」

想像以上の内容にアルフは絶句する。

ベルクトは自嘲気味な口調で更に言う。

「バカげているだろう？だが、当時の俺にはそれが全てだった…

自分が存在する意味が無いと決めつけ、狂気にまみれていたんだ…」

場の空気が更に重くなる。

フェイトは何も言わずに、ただただベルクトの話を聞いている。

「だが…そんな俺を救ってくれたのがバレルだった…

俺は本物だという決めつけであいつにも憎しみを向けた。

でもあいつは、真っ直ぐに俺と向き合い何度も俺に言葉をかけてきた。

フェイト…高町なのはがお前にそうしたようにな…」

フェイトの方を見ながら語るベルクト。

アルフはそんな彼を寂しげに見つめている。

「そしてバルドナ・ドライブが完全稼働に至り

俺はあいつとの最後の戦いに挑み、そして敗れた…

全てを失い、茫然自失する中であいつは俺にこう言った…」

一呼吸置いて、表情を更に固くしてベルクトが言った。

「俺は俺で…君は、君だ。とな…」

「……！」

その言葉を聞いた直後、フェイトの目に光が戻る。

「フェイト！」

そんな彼女を見て、目にうつすら涙を浮かべながらアルフは叫んだ。
フェイトはベルクトの方に顔を向ける。

ベルクトは少し笑みを浮かべ、更に言葉を紡いでいく。

「その言葉でようやく俺は気づいたんだ。」

俺はバレルの偽物ではなく

ベルクトという一人の人間だという事にな…

そしてお前たちに出会い、俺自身の…ベルクトとしての道を
歩いていく事に決めたんだ。」

そこまで言った後、フェイトに対して背を向ける。

「確かにお前は、アリシアだったのかもしれない…

だが、俺の知る限りではアリシア・テストロッサは既にこの世に
いない。

その肉体は今もプレシアの傍らに存在する。

俺やアルフと一緒にジュエルシードを探した覚えなど無いはずなん
だ。」

振り向き、真剣な表情でフェイトに一言言葉を放った。

「お前は…誰だ？」

それを聞いて、目を見開くフェイト。

ベルクトは再び背を向け入口の方に歩き、言った。

「行くぞアルフ、プレシアを潰しに行く。」

「えっ…！ちょっと待ちなよベルクト！」

予想だにしない発言を聞いて、慌ててベルクトの方に駆け寄るアルフ。

隣に来たアルフにベルクトは言った。

「今バレルや高町なのはも戦っているが状況は芳しくない。行つて援護をしてやつてくれ。」

「でも…」

「…言うだけは言った。後はフェイト本人が決める事だ。

だから、俺たちは先にプレシアを…」

俯くアルフにベルクトは真剣な表情で囁く。

それを聞いてアルフは顔を上げ、フェイトの方を向いて言った。

「フェイト…ちよつとの間待っててね。

そして全部終わったら…アタシが大好きな

本当の優しいフェイトに戻っておくれよ…」

寂しげな笑みを浮かべながらそう言つて、アルフは部屋を後にした。

アルフが去つた後、ベルクトが表情を崩さぬままフェイトの方を向いて言つた。

「フェイト、俺はお前の味方だ。だが、プレシアの味方ではない。

そして奴がああ言つた以上俺はもう自分の感情を止められん。」

ベルクトは振り向き、入口の方を見て更に言う。

「このまま目の前の運命を受け入れてジツとしているのも

母親をまだ愛し、彼女の人形に戻るのも

運命に抗い、新たに戦おうとするのも

全てはお前自身の道で、お前が決める事だ。」

フェイトは背を向けるベルクトを見ながら、彼の言葉を聞いていく。

「俺としては…フェイト・テストロッサとしての道を歩んでほしい。

だが、例えそうでもそうでなくとも、お前がどんな道を行こうと俺はお前を裏切らない。お前の助けになるように行動する。」

「…もう一度言う…後は、お前自身が決める事だからな…」
そう言っただけでも、部屋を後にした。

ゲートに向かいながらベルクトは思っていた。

自分もバレルの言葉を聞いて変わったのだ。

だが、バレルはきつかけにすぎなかった。

変わると決心し、己の道を決めたのは己自身なのだ。

それはフェイトも同じだ。

フェイトの道を決めるのはフェイト自身だ。

自分は言える事は全て言ったつもりだ。

後は彼女自身の判断に委ねるしかない。

そう、だからこそ今は

（プレシア…フェイトを物のように扱い

拳げ句捨て去った…そんな貴様を許すわけにはいかない…！）

フェイトの道を閉ざしていた元凶を潰しに行く。

顔に怒りを携えながら、ベルクトは時の庭園と向かっていった。

第18話（前書き）

決意を固めるフエイト
そして駆動炉で待っていたのは…

第18話

アースラの病室

フェイトは1人になった後、ぼうつと天井を眺めていた。

（…ベルクトも…私と同じだった…）

自分と同じ誰かのコピー

そして親から道具の様に扱われる存在

離れていったもう1人の自分を求めて猛進して…

（でも…ベルクトはそれを知って、そして自分の親を殺した…

そして、私も母さんの道具にすぎないと…知ってしまった…）

（だけど私…あんなにはつきり捨てられたのに…まだ、母さんの事
気にしてる…）

ふとフェイトの視界にモニターが入る。

時の庭園の様子が映し出されていた。

そこには、なのは、ユーノの前に

丁度到着したアルフとベルクトが映っていた。

（アルフ…ずっと側に居てくれた…

言うことを聞かない私にきつと随分と悲しんで…）

（何度もぶつかった、真っ白な服の女の子…

初めて私と真っ直ぐに向き合ってくれて…）

（ベルクト…突然出会った…私と同じ境遇だった…大切な仲間…

いつも私の事を考えてくれて…何度も裏切らないって言うってくれて
…）

そう、みんな自分の事を考えてくれていた。

立場は違えど、自分に沢山の言葉を投げかけてくれたのだ
なのに…なのに自分は…

フェイトはベッドから上半身を起こし、思いつめたような表情になる。

（私はずっと、母さんの為だけに生きてきた…

母さんに笑ってほしい…認めてほしくてここまでやってきた…

それが出来なきゃ…他の事に意味なんてないって…

それが…私の道だと思ってた…）

（でも…私はあのアリシアって娘の出来損ないで…

母さんは、もう私なんかいらなんて…）

自分の道は母の役に立つ事のみが目的だった。

だが、その母に捨てられてしまった。

自分の母に自分の道を閉ざされてしまったのだ。

ベッドの端に座り直し、フェイトは考え続ける。

（でも…ベルクトは違った。一度は狂気に飲まれても…

ベルクトっていう自分を始める事ができた…

自分で…自分自身の道を選び取っていた…）

（じゃあ…私は、私の道は今までどこにあったのだろう…

私は、私だけの道を歩んで…いや、それが閉ざされて…）

母の言っていた事を思い出す。

自分のこの身体はアリシアの物で…

脳裏に宿る優しかった母の姿も…与えられた記憶で…
自分は身も心も…アリ…シ…ア…？

そんな考えが頭の中を支配していたその時

（お前は…誰だ？）

ふと、ベルクトの言葉を思い出した。

（……違う…私は…私は…！）

ハッとなり、首を左右に振る。

確かにこの身体と過去の記憶はアリシアの物なのかもしれない。

だが違う、アリシアはアルフやベルクトの事なんて知らない筈だ。

あの白い服の女の子と戦ったりもしていない。

アリシア・テストロッサは、もう存在しない筈の人間なのだ。

そう、だから私は…

フェイトは立ち上がり、待機状態のバルディッシュを手取る。

（私は…フェイト、フェイト・テストロッサ…アリシアじゃない…）
握ったバルディッシュが杖形に変形する。

いたるところにヒビが入りボロボロだ。

そんなバルディッシュを顔に寄せて、フェイトは涙を流す。

「そうだよ…バルディッシュ…お前も…ずっと側にいてくれた…」

フェイトはバルディッシュを抱きしめ、涙を流し続ける。

「お前も…このまま終わるのなんて…嫌だよ…」

バルディッシュに光が宿り、主に答える。

そしてフェイトはバルディッシュを構え、表情を固くした。

「私は…与えられた道を黙って進んでるだけだった…」

他に道があるのを考えないで…目を瞑っていた…」

他に道はいくらでもあった筈なのだ。

アルフやベルクトがそれを示唆してくれていたかもしれない。

だけど、自分は母の役に立つ道が絶対だと思い込んでいた。

いわば、母が用意した道を自分の道と決めつけて黙って歩いていたのだ。

だから…道が閉ざされたというのもまた、決めつけなのだ。

母が今まで敷いていた、私が勝手に歩いていた道を閉じただけ…

私は…私が決めた道を歩いていたのではない。

いや、自分の道を探す事すらしていなかった。

「受け入れるのも…母さんの所に行くのも…抗うのも…全て私自身が決める事…」

フェイトが目を瞑り魔力をバルディッシュに流すとバルディッシュが瞬時に修復していく。

「私はまだ…自分の道を決めてすらない…」

だから…私は抗う…本当の自分を始める為に…

過去の…アリシアだった自分を捨てる為に…」

そしてフェイトは目を見開き、バリアジャケットを纏う。

足下に黄色の魔法陣が展開し、辺りに魔力光が舞う。
「だから、一緒に頑張ろう…バルディッシュ…
私の道を…フェイト・テストロツサとしての道を歩く為に…」

時の庭園

螺旋形に通路が伸びる部屋で、なのは達は傀儡兵と戦っていた。
空中を舞いながら、なのはは桃色の魔力弾を放ち、傀儡兵を倒して
いく。

「クッ…数が多い！」

傀儡兵に飛びかかりながらアルフが叫ぶ。

「一匹一匹は雑魚だが…さすがにしつこい…」

ブラッドシットライフルで傀儡兵を撃ち落しながら

ベルクトは苦虫を噛み潰したような顔で呟く。

「早く何とかしないと…」

大型の傀儡兵を鎖で縛りながらユーノが言う。

すると、突如鎖が千切れ、大型の傀儡兵が動き出す。

「マズイ！」

ユーノが叫ぶ。

そして傀儡兵は手に持った斧を振り上げ

それをなのはに向かって振り下ろす。

「なのは！」

「あっ……！」

ユーノがなのはに向かって叫ぶ。

なのははそれに慌てて気づくが

眼前には巨大な斧が迫っていた。

「サンダーレイジー！」

だが、攻撃がなのはに当たる前に

上空から降り注いだ電撃によって、傀儡兵は爆散する。

4人は驚いて上を見上げる。

そこには、バルディッシュを構えたフェイトが浮かんでいた。

「フェイト！？」

「……フツ。」

アルフは信じられないという風な声を出し

ベルクトはフェイトを見て、少し笑う。

フェイトがなのはの前に降り立つ。

互いに見つめ合って微笑みを浮かべる2人。

だがその時、部屋の壁が破壊される。

驚いてなのはとフェイトがそちらを向くと

そこには先ほどのより更に大型の傀儡兵がいた。

「大型だ……バリアが強い……」

「うん…しかも、あの背中の砲台…」

なのはの言うとおり、傀儡兵は2門の砲台を抱えている。するとフェイトが前に出ながら言った。

「だけど…2人でなら…」

「いいや、3人だ。」

声のした方に2人が振り向くと、いつの間にかベルクトがいた。ベルクトは2人を見やりながら話す。

「一斉射撃でバリアを破いて、奴を仕留める…やれるな？」

「はい！」

「うん…」

ベルクトの言葉になのはとフェイトは笑顔で頷きながら返答する。

「いくよ…バルディッシュー！」

フェイトが飛び上がり、バルディッシュを構える。

「こっちもだよ、レイジングハートー！」

なのはも同様にレイジングハートを構え

「……やるぞ、ブラッドアーク。」

ベルクトも両肩の筒を前に展開した。

傀儡兵が背中の砲台に光を収束させていく。

だがそれが発射される前に

「サンダースマッシャーー！！」

「デイベインバスターー！！」

「デモニツクダークネス・マキシマムー！！」

3つの巨大な閃光が傀儡兵に直撃する。

そしてそれはバリアを破き、傀儡兵を飲み込みながら時の庭園の外壁を打ち砕いていった。

「フェイトちゃん！」

地上に降り立った後、なのはは嬉しそうにフェイトの方に振り向く。

「フェイト！フェイトッ！！」

人間形態になったアルフが泣きながらフェイトに駆け寄り、抱きついた。

そんな彼女を見て、フェイトは穏やかな声で言った。

「心配かけてごめんね…私は、もう大丈夫だから…」

アルフにそう言った後、フェイトが顔を上げる。

すると、ベルクトがこちらを見ていた。

「ベルクト…」

「決めたんだな…自分の道を…」

「うん、私は…私はフェイトとして生きていたい。

だから…母さんの所へ行つて、そして全部終わらせる…

それからまた始めるよ…私の全てを…」

「そうか…」

フェイトの決意を聞いて、ベルクトは目を瞑りながら微笑みを浮かべるのだった。

アースラブリッジにクロノからの通信が入る。

「エイミー！他のみんなはどうしてる！」

「なのはちゃんとユーノ君は駆動炉へ」

フェイトちゃんとアルフ、ベルクトは最下降へ向かってるわ！」

「そうか…やはり向かわせて正解だったな…」

クロノの言葉を聞いていたフェイは、ふと疑問に思い尋ねる。

「ハラOWN執務官、バレルは一緒じゃないのですか？」

「彼には途中で駆動炉の方に向かってもらった。

そこから、傀儡兵じゃない大きな魔力反応を感じたから！

恐らくは…さつきプレシアと一緒にいた君たちの同郷者だ！」

クロノの言葉を聞いて、フェイが呟く。

「アンジェ…」

かつてのベルクトの副官で、自分の上司だった女性。

その彼女が魔導師となり、プレシアの部下となっている。

このままいけば戦う事になるのは必然だろう。

（バレル…）

フェイは顔を俯かせ、駆動炉に向かった

自分の大切なパートナーの無事を祈るのであった…

フェイト達と別れた後、駆動炉にたどり着いたなのはとユーノ

その周りにも、やはり大量の傀儡兵がいた。

「さつきまでの奴と…大分違うみたいだ…」

ユーノが呟く。

先ほどまで戦ってきた傀儡兵と違って

ここにいるそれは、大分見てくれが違う。

全身が非常に肥大化しており、顔に光る黄色い目が不気味である。色も、何体か青やブラウンなどの色違いはいるが、その大半はグレイである。

何より、魔力反応は先ほどまでの傀儡兵よりも上回っていた。なのはとユーノが深刻な表情で傀儡兵達を見渡していると突如上空から声が響いた。

「辿り着いたのはオチビちゃん2人…つまらないわバレルやベルクトだったら良かったのに…」

2人は声のした方を見上げる。

そこには、傀儡兵達と同じような紫の鎧を纏った青髪の女性が浮いている。

「あなたはっ！」

なのはが女性―アンジェを睨みながら叫ぶ。

先ほどのやり取りでフェイトを人形呼ばわりしたのを思い出していたのだ。

アンジェはなのはを涼しい顔で見下ろしながら言った。

「まあいいわ、管理局の雑魚よりはよほど腕がたちそうだし…」

精々私を楽しませて頂戴ね…ここでの仕事も最後になりそうだし…」言いながら右手を前に掲げる。

すると、傀儡兵の目に光が宿り、その全てが稼動し始める。

その様子を見てなのはとユーノも表情を強め身構える。

そして、アンジェが不気味な笑みを浮かべながら更に言った。

「覚悟なさい…あなた達の相手は私のエリゴル・カスタムと

私の忠実な手足…グリゴリ部隊よ…」

第18話（後書き）

更新が遅れてすみませんでした…

生意気にも軽いスランプになり、話が全く思い浮かばなかったのです…

こんな文でも期待して待っている方々には大変申し訳ないです…

次回はアンジェ対なのはが中心となります。

ご意見、感想、指摘、ヘタレ作者への叱咤激励など、まだまだお待ちしております。

第19話（前書き）

アンジェ&グリゴリ部隊と戦うのは、ユーノ

第19話

時の庭園、駆動炉の部屋

大量のグリゴリを前にして、ユーノが身構えながら言った。

「防御は僕がやる、なのはは攻撃に集中して！」

「うん…いつも通りだね！」

なのはは力強い声で返答する。

近くにいた数体のグリゴリが両腕を上げ、なのはに向かって魔力弾を放つ。

「ええいつ！」

ユーノはそれを見て、なのはの前に立ちシールドを展開してそれらを容易く防ぐ。

なのはがレイジングハートを構え、足下に魔法陣を展開する。

「デイベインシューター、シュート！」

掛け声と共に、桃色の魔力弾が数発、グリゴリの群れに向かって放たれる。

魔力弾に当たったグリゴリはあっけなく破壊される。

すると今度は別のグリゴリが数体、上空から襲いかかってきた。

「チェーンバインド！」

それに気づいたユーノは振り向き、魔法陣を展開して光の鎖でそれらを縛り上げる。

「シュート！」

そして再びなのは再びデイベインシューターを放ち、それらを破壊した。

なのははその直後、空中に飛び上がり、

眼下にいるグリゴリの大群向けてレイジングハートを構える。

「デイベイン……バスター……！」

そして桃色の閃光が大量のグリゴリを飲み込み、破壊した。

直後、紫色の閃光がなのはに向かって飛んできた。

「……！」

なのはは驚きながらも、シールドを展開してそれを防ぐ。

そして閃光が放たれた方に振り向くと、やや離れた位置にアンジエがいた。

「私とも、遊んでほしいわね。」

アンジエが右腕の装甲からエネルギーブレードを展開し

なのはに向かって突っ込んでいった。

なのははそれを上空に飛び上がってかわす。

「マルチプルレーザー……！」

アンジエが右手を掲げて、いくつもの小さな赤い閃光を発射する。

なのははそれを縦横無尽に飛び回りながら回避していく。

それを見てアンジエは、笑みを浮かべながら呟く。

「へえ……なかなかやるじゃない……だけど、余所見は禁物よ？」

「え……！」

その言葉を聞いて、なのはは辺りを見回した。

すると、離れた位置にいた2体のブラウンのグリゴリが

大きめの黄色い魔力弾を形成し、それを放つのが見えた。

「ッ！！」

なのはは、すんでのところでそれをかわす。

しかしその束の間、今度は別のグリゴリが数体

なのはに向かつて襲いかかってきていた。

とっさにレイジングハートを構え、閃光を放ち、それらを撃墜する。

更に今度は、別の青いグリゴリが実刃のブレードをなのはに向かつて投擲する。

なのはは避けようとするが、ブレードはなのはの左手を掠める。

「痛っ！……」

痛みに顔を歪め、なのはは体制を崩してしまう。

その隙を狙って、他のグリゴリが魔力弾を放とうとする。

だが発射直前に、鎖によって拘束された。

とっさになのはが振り向くと、魔法陣からいくつもの鎖を展開しそれを必死に制御しながら、苦しい表情を浮かべるユーノが見えた。

「ユーノ君！」

なのはが心配そうな顔をして叫ぶ。

「フッフ…お友達の心配をしてる場合じゃなくってよ？」

だが直後に背後からアンジェの刃が迫る。

なのはは手の痛みに顔を歪めながらも、シールドを展開する。

（いくらなんでも…これじゃあ…）

ユーノは焦っていた。

今も、10体近いグリゴリを鎖で止めているが

その数はまだまだたくさんいる。

なのはも先ほどからある程度撃墜してはいるが

あのアンジェという魔導師がそれを妨害する。

自分は結界魔導師の為、攻撃はなのはに任せきりになってしまっただ。

ましてや、いくら防御や捕縛が専門とはいえ

これだけの敵を足止めし続けるのはかなりの無理がある。

状況はかなり思わしくなかった。

1体の青いグリゴリがユーノに向かって突っ込んでくる。

「くっ…！」

ユーノは苦しみながらも、それに向かって新たな鎖を向ける。

だがそれは、直前にグリゴリから放たれた白い光球を縛り上げた。

「囿っ！？」

ユーノが驚いて叫ぶと同時に、光球は爆発した。

直後、ユーノの前にグリゴリが降り立ち、両腕でユーノを掴む。

「しまった！」

「ユーノ君…！」

なのはは慌てて、ユーノの方に向かおうとするが

「余所見は禁物って…言っただでしょう！」

アンジェが魔力刃を携えながら、その行く手を阻んだ。

ユーノを掴んだグリゴリが不気味に目を光らせる。

すると、ユーノからグリゴリに向かって、紺色の鈍い光が流れていった。

「くっ…あああ…！」

ユーノがその苦痛に表情を歪ませ、叫び声をあげる。

「ユーノ君に一体何を…！」

その光景を見て、怒りの表情を浮かべながらなのはは叫ぶ。

「彼の魔力をちょっと頂いただけよ…
元々、グリゴリの専門はそっちだからね…」
アンジエが何でもないという風に答えた。

「ああ……」

魔力を大量に奪われ、ユーノはうつ伏せに倒れ込む。
先ほどまで展開していた魔法陣と鎖も、その姿を消す。
そんな彼に対して、グリゴリが右腕を向け、光を収束させる。
なのはがそれを見て、再びユーノの方へ向かおうとするが
やはりアンジエはそれを見逃しはしなかった。

「エナジーシェイプ。」

アンジエが呟くと同時に黒いフィールドが展開する。

「ああっ！」

それに巻き込まれたなのはは動きを止められてしまう。
そして、グリゴリの攻撃は正に発射直前まできていた。

「おしまいね…」

アンジエが冷たい表情で呟く。

「ユーノ君ッッ……!!」

この位置では直接向かって、砲撃でも間に合わない。
目に涙を浮かべ、必死に叫ぶなのは。

そして、ユーノに向かって正に閃光が放たれようとしたその時
「ペネトレイトキャノン！」

壁を突き破りながら黄色い閃光が表れ、

それは、ユーノの側にいたグリゴリを破壊した。

「2人共大丈夫か！」

壁の向こう側には、バレルが立っていた。

「バレルさん！！」

目に涙を浮かべながらも、なのはは嬉しそうな表情で叫んだ。

「久しぶりねえ… やつとご対面ねバレル？」

「…… やってくれたな… 僕の仲間をよくも…」

顔に不気味な笑みを浮かべ、見下ろしながら言うアンジェに対してバレルは表情陰しくし、彼女を睨みながら言った。

その後、倒れているユーノに駆け寄り、彼を抱える。

「バレル…さん…」

「すまない… 僕が遅れたばかりに…」

大量の汗を浮かべ、息も絶え絶えに呟くユーノにバレルは申し訳なさそうに言った。

そして近くの壁に、ユーノを寄りかからせた。

直後、ユーノの鎖の拘束から逃れたグリゴリが

一斉にユーノに向かって襲いかかってきた。

それを見たバレルは、両肩のポッドの蓋を開ける。

「ラピッドファイヤ！」

バレルが叫ぶのと同時に、大量の魔力弾が発射され向かってきたグリゴリを全て撃墜した。

「コイツらまで再現するなんて…」

苦い表情で言いながらも、バレルは前に出ながら上空にいるのはに向かって叫んだ。

「なのは！周りの敵は全部僕が片付ける！

君はアンジエを止めてくれ！」

そしてバレルは上空に飛び上がった後

両腕のライフルを構え、体の各所に装備された武器を全て展開する。

「ハイブリッドオープンツ！！」

バレルの掛け声と同時に

魔力弾や閃光が何発も発射され、大多数のグリゴリが破壊されていた。

空中で相対するのはとアンジエ

「フツ…」

アンジエは一瞬表情を歪め、マルチプルレーザーを発射する。

なのはは高速で横に飛行して回避する。

「シュート！」

そしてレイジングハートを構え、魔力弾を放つ。

アンジエはそれらを余裕の表情で難なく回避し

右腕に魔力刃を形成してなのはに襲いかかる。

なのははそれを、とっさにレイジングハートで受け止める。

「くっっ…」

アンジエに押され、齒を食いしばりながらなのはは苦しげな声を出す。

アンジエはそれを見て、ニヤリと笑った後

レイジングハートごとなのはを切り払う。

「あっ！」

なのはは体勢を崩しながら落下していく

だが、途中で踏みとどまり、表情を固くしデバイスを構える。

それを見たアンジエも、右腕をなのはの方に向けて光を収束していく。

「デイベインバスター！」

「エナジーライフル。」

2つの閃光が同時に放たれ、ぶつかり合い、爆発を起こした。

爆発がおさまった後

なのははアンジエを見ながら、険しい表情で叫んだ。

「どうして… どうしてこんな事！」

「プレシアに言われたからよ？」

少し怪訝な表情になりながらも、アンジエは普通に答える。

「こんな事になって… フェイトちゃんやたくさんの人が傷ついたのに！」

「そんなの知らないわね… 私は戦えればそれでいいんだし。」

「だからって！ 周りの人を傷つけるなんて絶対に間違ってる！」

「善悪なんて関係ないわ… 私は私が楽しければそれでいいのよ。」

「…！…！」

声を荒げて叫び続けるなののはに対して

アンジエはうつとしいという感じに吐き捨てた。

なのははその言葉を聞いた瞬間

自分の中で凄まじいまでの怒りが膨れ上がっていた。

なのはは基本的に他人に対して本気で怒ることは少ない。

例え敵だとしても、相手の心配をしてしまう優しい人間なのだ。
フェイトの事はもちろんそうだし

最初に傀儡兵を見た時も、相手が同じ人間だったら…
と、そんな風に心配して、クロノに尋ねたほどなのだ。

だが目の前にいるこの女性はずう。

自分のワガママの為だけに大勢の人間を傷つけたのだ。

「許さない…あなたは絶対に許さない！」

顔に怒りを浮かべ、なのはは思い切り叫ぶ。

それを聞いてアンジエも、苦々しい表情になりながら叫んだ。

「平和ボケした世界に暮らす甘ちゃんには、わからないわよ！
もういいわ…終わりにする！エナジーフレイム！」

アンジエが叫ぶと、彼女の体が赤紫の光に包まれる。

その状態でなのはに向かって突撃した。

「ッ！！」

なのはは慌てながらも、ギリギリのところまで上に飛び上がってそれをかわす。

そしてかなりの高度まで来た所でレイジングハートを構える。

足下とデバイスの先に魔法陣が表れ、光が収束していく。

「いくら距離をとったって、隙だらけなのよ！」

アンジエがそう叫び、再びなのはに向かっていこうとする。だが直後、光の鎖によって体を縛られた。

「何ッ！？」

予想外の展開に驚きを隠せないアンジエ

その眼下には、息を荒げ、体がガタガタと震えながらも魔法陣から鎖を展開しているユーノがいた。

「あの子、まだあんな力が……！！」

身動きがとれない状態でアンジエが焦りながら言った。

「ハア……ハア……なのは……今の内にッ！」

必死の表情でユーノが叫ぶ。

なのははそんな彼を心配そうな表情で一瞬見やった後

すぐに表情を固くし、アンジエに視線を向け、そして叫んだ。

「スターライト……ブレイカー……！！」

そしてレイジングハートから、巨大な閃光がアンジエに向かって放たれた。

「アアアアアア……！！」

アンジエはまともにそれを食らい、叫び声をあげながら地面に落下していった。

「ユーノ君！」

地上に降り立った後、なのはは心配そうな表情でユーノに駆け寄った。

再び倒れたユーノをなのはは抱きかかえる。

「なのは…は…ごめんね…心配させて…」

「もう…ユーノ君…」

「全く…無茶をして…」

目を細め、か細い声で呟くユーノを見て、なのはは目に涙を浮かべる。

そんな様子を見てバレルは呆れ半分と心配半分といった感じの心境で言った。

「うっ…」

地面に倒れアンジエは苦しげな声をあげる。

すると、なのはとバレルが自分の方に近づいてくる。

2人を見ながら、アンジエは笑いながら言った。

「フフ…お見事だったわ…私にはもう、抵抗する力は無いわ…」

駆動炉は好きにするといいわ…」

バレルは彼女を見ながら、少し寂しげな表情で言った。

「アンジエ…どうしてお前は…」

「バレル…アンタやそこのお嬢ちゃんには到底わからないわ…」

あの荒んだ世界から来た私には…生きるだけで必死だったのよ…」

相手を傷つけないとかいう情けは、自分の命を落とすのを早めるだけよ…」

そして、自分の楽しみを見いだせるのは…戦う事だけだった…」

私には…戦う以外何にも無いのよ…」

アンジェは幼い頃から戦って生きてきた。
様々な脅威が存在したもう一つの世界では
生き残るだけで必死だったのだ。
生き残り、そして自分の楽しみを見いだすには
上官の命令に従い、言われたままに戦うしかなかったのだ。

だからこそ、ベルクトは許せなかった。
バルドナ・チャージが貯まったと同時に
自分や部下を見捨てて、1人で行ってしまった。
自分はいいように利用され、生きる術を奪われたのだ。
そして彼に挑み、敗れて、気がついたら時の庭園にいた。

行くアテの無かったアンジェはプレシアの部下となり
ただ彼女の言うがままに行動したのだ。
だが彼女にはどうでもいいことだった。
自分が生き残り、そして戦うことができれば。
ベルクトの姿を見た時には流石に驚いたが
それも、あまりこだわりはしなくなっていた。
プレシアに素直に従っていたのも
自分の楽しみである戦いができれば何でもいい
そういう風に思っていたのだ。
「けど結果はこのザマ…魔法という新しい力を手に入れても…
私はまたこうして無様に負けてしまった…」
そしてなのはに敗れたアンジェは、急激に自分の感情が冷めていっ

ていた。

もう自分には何にも無い…敵を打ち倒す力さえ無い
何もかもがどうでもよくなってきたのだ。

「だからもういいわ…どうせたまたま拾った命だったしね…

一つだけ…ベルクトに直に会えなかったのは残念だったけど…」
目を瞑り自嘲気味にアンジエは呟く。

すると同時に、彼女の体が不気味に光り出す。

「…マズイ!」

直感的に嫌な予感がしたバレルは、なのはを押し倒しながら横に飛んだ。

直後、アンジエの体が異常に輝き、そして爆発が起こった。

そして爆発がおさまった後、そこにアンジエの姿はなかった。

「まさか…自爆するなんて…」

離れた位置で壁に寄りかかりながら、ユーノが呟く。

「どうして…」

「……………」

立ち上がり、アンジエがいた位置を見ながら、なのはは寂しげに呟く。

バレルも同様に立ち上がって黙りながら

ジッと、その場所を見つめていたのであった…

第19話（後書き）

という事でアンジエとの戦いでした。

今回の戦闘シーン…結構苦しかったかなと、今更ながら思っています…

（ユーノの扱いとか、バレルの都合良すぎる登場の仕方とか。）

アンジエに関してですが

せつかく出しといて単なるやられキャラにするのも惜しいのであんな感じになりました。

ベルクトがあれだけ荒んでたわけだから

きっとアンジエも苦労人だったんだろうなあ

という、作者の激しい自己解釈です、ハイ…

ご意見、感想、指摘、ヘタレ作者への叱咤激励など、まだまだお待ちしております。

第20話（前書き）

プレシアとの戦いに遂に終止符が打たれる…

第20話

なのは達と別れた後、フェイト、アルフ、ベルクトの3人は、最下層に向かっていた。

「もう少しで最下層に辿り着くよ…」

「ああ…」

赤光が薄暗く光っている通路を走りながらフェイトとベルクトがそうやり取りをした。

ベルクトは走りながら表情を険しくする。

この先に、フェイトをいのように扱い拳げ句に捨て去った張本人がいる。

自分が生まれ変わってから、初めて得た大切な仲間であるフェイトそんな彼女の人生を狂わせたプレシアを許すつもりなど更々無い。管理局は捕縛を考えているみたいだが

こんな状況になってしまった以上

ベルクトはやり取り次第では殺すのも辞さない考えでいたのだ。

（とはいえ…）

表情を少しだけ和らげ、ベルクトはフェイトに尋ねた。

「フェイト、プレシアに会ったらその後どうするつもりだ？」

「え？」

「さっきはああ言ったが、お前が自分の意志でここに来た以上俺の一存だけでは決められない。お前自身がどうしたいかによるんだ。」

フェイトが今、自分達とこうしていると

彼女は自分で立ち向かうと決めた筈だ。

ならば、自分の意志は二の次になる。

フェイト自身の意志を先に貫くべきだと思ったのだった。

ベルクトの言葉を聞いて、フェイトは少し俯きながら呟いた。

「私は……………」

時の庭園、最下層

眼下に次元空間が映るその場所で

プレシアは次元震を起こそうと、必死に魔力を注いでいたのだが突如、揺れがおさまる。

驚きながらプレシアが振り向くと

「終わりですよ、プレシア・テストロッサ。」

やや離れた位置に、足下にエメラルドグリーンの魔法陣を展開し背中から薄く光る2枚の羽を携えたリンディが立っていた。

「次元震は私が抑えています、駆動炉付近にいた魔導師も消滅…

直に駆動炉も封印される、あなたの下にも執務官が向かっています。

目を瞑り、強い表情でリンディは言葉を続ける。

「忘れられし都アルハザード…それは存在するかどうかさえ曖昧な

…ただの伝説です。」

それを聞いてプレシアは眉間に皺をよせる。

「違う…アルハザードへの道は次元の狭間にある！

時間と空間が砕かれた時、その狭間に現れる輝き…

道は確かにそこにある！」

「あなたはそこに行つて何をするの？」

失った時間と、犯した過ちを取り戻すの？」

どこか相手に対する哀れみさえ感じさせる口調で話すリンディ。

プレシアは、アリシアの方に振り向いて、表情を歪ませながら語った。

「そう…私は取り戻す…私とアリシアの、過去と未来を…

こんな筈じゃなかった…世界の全てを…！」

そこまで言つた直後

部屋の一角から青い閃光が現れ、爆発する。

プレシアが振り向くと、そこには頭から血を流しながらも

彼女の方を強い視線で見下ろすクロノがいた。

「世界は何時だって、こんな筈じゃない事ばかりだよ！」

流れる血で片目が塞がりながらも、クロノは叫び続ける。

「その現実から逃げるか立ち向かうかは個人の自由だ！

だけど…自分の勝手な悲しみに、無関係の人間を巻き込んでいい権

利は…

どこの…誰にもありはしない…！」

クロノが叫んだその直後、今度はフェイト達が最下層に到着した。
「……………」

地面に降り立った後、フェイトは寂しげな表情でプレシアを見つめる。

プレシアはそんな彼女を無表情で睨む。

しばらくした後、ベルクトが前に出る。

「…久しぶりだな、プレシア・テストロッサ。」

「……私を…殺しにきたのかしら…？」

「そうしたいのは山々なんだが…」

ベルクトがそこまで言った後、今度はフェイトが前に出た。

「フェイトが話があるそうだ。」

フェイトを睨みながら、プレシアは苦しげに吐き捨てる。

「何をしにきたの…あなたにもう用は無いのよ…」

プレシアの言葉を聞いて、フェイトは目を瞑り両手を胸の前に置き、語り始めた。

「私は…私はアリシア・テストロッサではありません…
あなたが作った…ただの人形だったのかもしれない…」

でもそれは違う…私は人形じゃない…あなたに生み出してもらってあなたに育ててもらった…フェイト・テストロッサという1人の人間です！」

その場にいる全員が固唾を飲み込んでただ黙ってフェイトの言葉を聞いている。

すると、プレシアの表情に妖しい笑みが浮かんだ。

「フフフ…アハハハ！！」

それが何だと言うの！？

今更あなたを娘として扱えとも言っのー！！」

狂ったように、高らかに笑いながらプレシアは叫ぶ。

フェイトは表情を変えずに続けた。

「あなたは…私の事を何とも思っていないのかもしれない…でも、どんなに酷い事をされても…

私をここまで育ててくれたのはあなただった…だから…」

そこまで言って、フェイトは目を開き、右手を前に差し出す。

「もし、あなたが再び望むなら…私はあなたの力になる…」

私があなただの娘だからじゃない…あなたが…私の母さんだから！」

そう、どんなに酷い仕打ちを受けても

拳げ句あんな簡単に捨てられても

自分、フェイト・テストロッサという人間を生み出し

そして育ててくれたのは紛れもない彼女なのだ。

だからフェイトは賭けたのだ。

プレシアが再び自分を受け入れてくれる事を

アリシアの代わりではなく、フェイトとして…

「フツ…下らないわ…」

だが、現実残酷である

プレシアは冷たい表情でフェイトに吐き捨てる。

「私の娘はアリシアだけよ…用済みの人形なんかもういらぬのよ…側に置いたところで…ただ苦痛になるだけだわ！」

「……！」

フェイトはその言葉を聞いて目を見開く。

そんな彼女を見て、ベルクトは前に出て、静かに怒りながらプレシアに言った。

「結局…貴様は決めつけて…ただ逃げてるだけだ。」

「どういう事かしら…？」

「失った幸せに固執して…他のたくさんの幸せを見る事が出来なかつたんだよ…」

段々と口調が荒くなりながらベルクトは続ける。

「何故フェイトを娘として扱わなかった？」

捨てられた今でも…こんなにも貴様に親身になってくれているのに…貴様が受け入れさえすれば…幸せな暮らしが出来た筈だろうに…

自分でそれを認めないで、新たな道を歩むのを放棄した…

貴様の幸せは…アリシアでしか満たされないと云うのか？」

「そうよ…そんな出来損ないの人形じゃあ満足出来なかった…」

結局…私が幸せを取り戻すには…アリシアを蘇らせるしかないのよ！」

「死んだ人間は生き返らない…例え外見を真似ても…

死ぬ前までにあった魂までもが同じわけじゃあない…

どんなに足掻いても…本来なら、命は一度きりなんだよ…！」

「違う…アルハザードに行けば達成できる…」

アリシアを完全に蘇らせる事ができる！

そして取り戻すのよ！過去も未来も…たった一つの幸福も！」

そこまで言ってプレシアは、手にしていた杖を地面に突き立てる。
すると紫色の魔法陣が展開すると同時に、庭園が激しく揺れ始めた。
「！…ああっ！」

その揺れにバランスを崩し、リンディが倒れ込む
彼女が展開していた魔法陣も同時に消えた。
すると揺れは更に激しくなり、庭園が崩れ始める。

直後エイミイから通信が入る。

「艦長ダメです！庭園が崩れます、戻ってください！
この規模なら…次元断層は起こりませんから！
クロノ君達も、早く脱出して！」

それを聞いてクロノが答える。
「了解した！フェイト・テストロッサ！君たちも早く脱出の準備を
！」

だが、フェイトはその場に立ちすくみ、プレシアを見つめている。
ベルクトも彼女の傍らで、無表情になりながらプレシアを見ていた。
「私は向かう…アルハザードへ…！」

そして全てを取り戻すのよ…！」

そう叫んだ直後、プレシアが立っていた地面が崩壊し

彼女は次元空間に落下していく。

「母さんっ！」

フェイトが慌てて駆け寄ろうとしたが

「フェイト！」

側でずっと様子を見ていたアルフが、フェイトを取り押さえた。
アルフに押され、フェイトは地面に倒れ込む。

「ああ…」

そして、次元空間に落下していくプレシアを呆然と見つめるのであ

った…

「フェイト…」

ベルクトはフェイトをの手を取り、彼女を立ち上がらせる。

「このままじゃ危険だ…脱出するぞ…」

「……………」

寂しげな表情で言うベルクトを見つめながら、フェイトは何も言わずに立っている。

だがその時、庭園の一部が崩壊し、巨大な落石が彼女達の頭上に迫った。

「あ…!!」

「チツ…!!」

フェイトとアルフがそれに気づき目を見開く。

ベルクトは舌打ちをしながらも、急いで筒パーツを展開した。

だがその直後、天井から現れた桃色の閃光によってそれは破壊された。

「あ…!!」

フェイトが驚いて声を洩らす。

「フェイトちゃん！」

「みんな！大丈夫か!？」

その先にはなのはと、ユーノを抱えたバレルがいた。

そしてなのはは手を差し伸べながら叫んだ。

「早く！私たちの方に!」

フェイトは一瞬戸惑いを浮かべたが
なのはの方に飛んで、その手を掴む。

それを追うようにして、ベルクトとアルフも飛び上がった。
そして、アースラへと転移していった。

直後、庭園が崩れ去り、爆散していく。
転移の最中でベルクトは心の中で呟く。

（プレシア…結局貴様も、昔の俺のようにただ逃げてるだけだったか…）

そしてフェイトも同様に、呟いていた。

（さようなら、母さん…私は、私自身で…私の道を歩みます…）
フェイトの目には、うつすらと涙が浮かんでいた…

第20話（後書き）

ということで、時の庭園での戦いは終了です。

プレシアとの対話シーンに関しては、いくつかパターンがあったのですが

他が全てベタすぎるとか、悲惨すぎるとかの理由でお蔵入りとなり結局原作をなぞるこのパターンが一番無難だという結論になりました…

そのようなボツネタ集とかも、機会と余裕があったら公開したいと思います。

次回、いよいよ無印編最終話になります。

第21話（前書き）

無印編、最終回です。

第21話

アースラの一室

時の庭園から戻ってきたなのは達は、簡単な治療を受けていた。

「そういえば、フェイトちゃんは？」

備え付けのベッドに座り、ケガをした左手に包帯を巻いてもらいながら

なのはは、その場にフェイトがいないのを疑問に思い、クロノに尋ねる。

「アルフとベルクトと一緒に護送室だ。

彼女達はこの事件の重要参考人だからね…

申し訳ないけど、しばらく隔離される事になる。」

エイミイに、頭に包帯を巻いてもらいながら、クロノは答える。

「今回の事件は、一歩間違えれば、次元断層さえ起こしかねなかった極めて重大な事件なんだ。管理局としても

関係者の処遇には慎重にならざるをえない。それはわかるね…？」

「うん…」

冷静な口調でそう言うクロノに、なのはは少し俯く。

「ふふ… かわいい♪」

クロノに巻いてある包帯の端をリボンの様に結んで

エイミイはうつとりとした表情を浮かべる。

「エイミイ… やり直し…」

そんな彼女を見て、クロノは呆れ顔でそう言うのであった。

護送室

薄暗い光が差し込む檻の中で

フェイトとアルフは床に座り込み、ベルクトは壁に寄りかかっていた。

ふとアルフはベルクトに声をかけた。

「ベルクト…アタシら、どうなるのかな…？」

「…この後の処遇についてか？」

「うん…」

俯きながらそう言うアルフ。

何せロストログアの不等所持や、次元断層の発生未遂

その他の事象も加えたら、とんでもない重罪になる。

そして、主犯はプレシアだったとはいえ

この事件に現在最も深く関与しているのはフェイトと言える。

自分が口頭でフェイトには何もしないでほしいと言ったとはいえ

やはり、組織というのはそう都合良くは動かないだろう。

アルフはそこを心配していたのだ。

「こっちの常識を知らない以上何とも言えんが…

フェイト自身の意志でない事と、

強制的にやらされていた事を強く主張すれば

いくらか罪は軽減されるだろうな…」

「でも…やっぱりフェイトにも何らかの罰はあるんだろう…？」

「…まあ、後はあの艦長や執務官とやらの手腕次第だろう…」

こればかりは俺にもどうにもできん…」

視線を下に向けて、目を瞑りながらベルクトは淡々と答えた。

今現在、この事件に関係している管理局側の人間で最も地位が高いと言えるのが、リンディ艦長
次いでクロノ執務官と思われる。

そして、あの2人の対応を見る限りでは
自分とはもなく、少なくともフェイトには
重罰を課したりはしないだろう。

仮にアテが外れても、近くにはバレルやフェイ
そしてあのなはという少女もいるのだ。

きつとフェイトに対してプラスになる証言をしてくれる筈だ。

それらの事で考えれば

フェイトによほど重い罪を問う確率は低いはずだと
ベルクトは思っていたのであった。

しばらく沈黙が続いた後、ベルクトが
フェイトの方を向いて尋ねた。

「フェイト、お前は どうしたい？」

「え……」

フェイトは下げていた顔を上げて、ベルクトを見つめる。

「お前は、フェイト・テストロッサとして今後歩むのだろうか？
何か…思っている事はあるのか？」

どこことなく、少し心配そうな口調で尋ねるベルクトに
フェイトは少し笑みを浮かべながら答えた。

「私も、ベルクトと同じ…新しい自分が始まったばかりなんだ…
だから…これからどうするかは、ちゃんと自分で考えて
自分で決めていこうって思ってるよ…」

「そうか…」

ベルクトはフェイトに近寄り、そして笑みを浮かべる。

「なら、俺はお前を助ける為に、今後も生きよう…」

今後は誰かの言いなりじゃなくて、お前自身が
決めた道を歩む為の手助けをする。

それが…俺の決めた道だ。」

「ベルクト……ありがとう…」

フェイトはベルクトの親身な言葉を聞いて
顔を赤らめ、目にうつすら涙を浮かべながらも
嬉しそうな表情でお礼を言った。

「ベルクト…アンタって…ヒック…本当にいい奴だね…」
そんな2人のやり取りを見て

アルフは感動し、大量の涙を流すのであった。

アースラ内のバレルの個室

そこで治療を受け終わったバレルとフェイが話し合っていた。

「じゃあ…アンジエはそのまま消滅したわけね…」

「ああ…」

バレルは少し悲しげな表情で答える。

「俺…少し後悔してるのかもしれない…」

ベルクトだってあんなに変われたのに…

あいつを、あのまま黙って見てるしかできなくて…」

アンジエが自分達に酷い事をしてきたのは事実だ。

だが、戦いに敗れた後の彼女の言葉を間近で聞いて

本当はアンジエもベルクトと同じだったのではないかと？

自分がベルクトにそうしたように、彼女も救えたのでは？

そんな風にバレルは考えていたのだ。

「でも…全部の人間を必ず救えるなんて出来ない…」

人間には限度つてもものがあるのも事実なの…

ましてや、彼女や私達は軍人だった。

本来なら…そう考えるの自体、おかしい事なのかもしれないわ…」

「それはわかってるつもりだ…でも…」

やっぱり俺、納得しきれないんだ…甘いのかな…」

バレルは俯きながらひしひしと語る。

フェイはそんな彼の手を取って、柔らかな表情で言った。

「失った者は還らない…」

確かに、人が死ぬというのはとても悲しい事だわ…

だけど、いつまでも過去の事を引きずっていたら

それが原因で、今ある大切な者を失う事になるかもしれない…」

「フェイ…」

バレルは顔を上げて、フェイを見つめる。

フェイは目を瞑り、更に続けた。

「だから…過去は悪魔で思い出としてとっておく…」

そして、今日の前にある大切な人を守る為に

全力を尽くすしかないと思うわ。

失ってから気づくのは、とても悲しい事だから…」

「うん…」

「だから、バレル…あまり落ち込まないで…」

前を向いて歩いていきましよう…」

偶然だったとはいえ、ベルクトも救えたんだから…」

変わることができた彼を、また失わない為に…」

そして、私達を受け入れてくれたこの世界の人達を、死なせないために…」

私も、バレルの側に居る…ずっとあなたを守っていきたいから…」

「うん…ありがとう、フェイ…」

2人は互いに微笑みを浮かべ、顔を近づけていく。

そして、口付けを交わした。

次元震の余波がおさまるまでの数日

なのは達はアースラ内で過ごす事になった。

そしてその間にクロノから聞かされたフェイト達の処遇…

本来なら次元干渉犯罪は、数百年の幽閉が普通の重罪だが
状況が特殊な上、彼女達が自らの意志で

次元犯罪に加担していないのはつきりしている為

心配する必要はないというものであった。

「何も知らずに、ただ母親の願いを叶える為に一生懸命だった娘や
そうやって言いなりになっている娘を可愛そうに思っ
それを打開する為に、ただ必死だった人達を罪に問うほど
時空管理局は、冷徹な集団じゃないから…」

クロノは最後に、優しい表情でなのは達にこう言ったのだった。

数日後

アースラの食堂内で

リンディ、なのは、ユーノ、バレルの4人が話し合っていた。

「次元震の余波はもうすぐおさまるわ。」

ここからなのはさん達の世界になら、明日にでも戻れると思う。」

「よかった〜!」

リンディの言葉を聞いて、なのはは嬉しそうに答える。

次いでリンディは申し訳なさそうな口調で言った。

「ただ…ミッドチルダ方面の航路はまだ空間が安定しないの…」

だから、ユーノ君については、しばらく時間がかかるみたい…」

「そうなんですか…」

すこし残念そうにユーノが呟く。

「それに、バレル君とフェイさんの世界に関しても

まだ足取りが掴めてないの…」

だから、まだ帰す事は出来そうにないわ。」

「いえ、全然大丈夫ですよ。

僕達がこうしていられるのも、リンディさんの計らいのおかげなんですから…」

だから、僕達に関しては、あまり気にしないで下さい。」

「ありがとう…そう言っただけで済ませてあげたいわ。」

バレルの言葉を聞いて、リンディは笑みを浮かべた。

「まあ…僕は急いで帰る必要はそんなに無いんですが…」

でもその間、僕までここで世話になるわけにもいかないし…」

悩みながら言うユーノを見て、なのはは明るい表情でこう言った。

「じゃあ、家にいればいいよ！今までどおりに！」

「なのは…いいの？」

ユーノは驚いて、なのはの方に振り向く、

「うん！ユーノ君さえ良ければ！」

「じゃあその…お世話になります。」

にこやかに笑顔を浮かべてなのはが言う。

ユーノは少し照れ臭そうにそれに答える。

リンディはそんな2人のやり取りを微笑ましげに見ていた。

そして、翌日、なのは達が帰る事になった。

「フェイト達の処遇は決まり次第連絡するよ。

大丈夫さ…決して悪いようにはしないから…」

「うん、ありがとう…」

クロノの言葉を聞いて、なのははお礼を言った。

「ユーノ君も、帰りたくなったら連絡してね。ゲートを使わせてあげるから。」

「はい、ありがとうございます。」

リンディに対して、フェレット姿のユーノも、同様にお礼を言った。

「じゃあ、そろそろいいかな？」

近くで慌ただしくキーボードを打ち込んでいたエイミイが顔を上げながら言った。

「それじゃ……」

「うん、またね。クロノ君、エイミイさん、リンディさん。」

クロノ達3人は、なのはとユーノに向かって手を振った。

そしてゲートが起動し、なのは達は元の世界へと帰っていった。

更に数日後

クロノはフェイト達を呼び出して、今後の処遇について話していた。
「フェイトの身柄は本局に移動、それから事情聴取と裁判が行なわれる。」

「けど大丈夫、ほぼ確実に無罪になるように手配しておいたから。」

「ホントかい!？」

クロノの言葉を聞いて、アルフが驚きながらも嬉しそうに声をあげる。

「ああ、あれからクロノ、かなり熱心に証拠集めしてたし…」

「バレル!そういう余計な事は…」

バレルがそう言うのを聞いて、クロノは彼の方に振り向いて慌てて言った。

バレルはそんな彼の反応を見て笑いを浮かべる。

そんな2人のやり取りを見ながら、フェイト、アルフ、ベルクトがクロノの方を向いて笑顔で礼を言った。

「…ありがとう。」

「ありがとうねクロノ…フェイトの為に一生懸命に…」

「俺からも礼を言わせて貰う…感謝する、クロノ・ハラウン。」

3人から同時に礼を言われて、クロノは顔を赤くして照れるが

「ん…コホンツ!…」

咳払いを一つして、真剣な表情になり、フェイトにこう言った。

「聴取と裁判、その他諸々は結構時間がかかるんだ。」

その前に、何かしておきたい事とか、そういう要望はある?」

それを聞いてフェイトは下を向いて、少しした後言った。

「本局に行く前に…1度だけ、あの娘と話したい…」

翌日、海鳴臨海公園

クロノ、フェイト、アルフ、ベルクトが海を眺めながら
目的の人物の到着を待ちわびていた。

しばらくした後…

「フェイトちゃ……ん!!」

肩にフェレット姿のユーノを乗せたなのはが

明るい笑みを浮かべ、手を振りながら駆けてきた。

フェイトもなのはの姿を見て、微笑みを浮かべた。

なのはが3人の近くまで来た後、ユーノがアルフの肩の上に移動する。

そして、クロノがなのはの方を見て、穏かな表情で言った。

「あんまり時間は無いんだが…しばらく話すといい。」

僕達は向こうにいつてるから。」

そう言つて、クロノとアルフ、ベルクトはその場を離れていった。

2人きりになった後、互いに海を見つめ合う、
やがて、なのはが口を開いた。

「あはは…いっぱい話したい事あったのに
フェイトちゃんの顔見たら、忘れちゃった…」

「そうだね…私も上手く言葉にできない…」

「ただ、嬉しかった…真っ直ぐ向き合ってくれて…」

「フェイトちゃん…」

「なのはがフェイトの方を向く。」

「話しかかったのもそうだけど…もう一つ…」

「来てもらったのは、返事をしたかったから。」

「え?…」

「フェイトは少し顔を赤らめ、続ける。」

「君が言ってくれた言葉…友達になりたいって…」

「!…うん、うん!」

「なのはは力強く頷く。」

「だけど私…どうしたらいいかわからない…」

「どうしたら友達になれるのかな…」

「そこまで言ってフェイトは俯く、」

「やがて、なのは優しい表情で言った。」

「簡単だよ、友達になるのは凄く簡単。」

「フェイトがなのはの方に顔を向ける。」

「名前をよんで。最初はそれだけでいいの、ちゃんと相手の顔を見て、はつきり名前をよぶの。」

私、高町なのは、なのはだよ！」

フェイトはなのはの顔を見て口ごもりながらも言った。

「なのは……」

「うん……そう！」

なのはが頷く。

そしてもう一度、今度ははっきりした声で言った。

「なのは……」

「うん……！」

目を潤ませながら、なのははフェイトの手を握る。

「ありがとう……なのは……」

「フェイトちゃん……！」

涙を浮かべながら2人は見つめ合う。

そして、互いに抱き合い、泣きあうのであった。

「……うつつ……ベルクト……」

「何だ？」

離れた位置で様子を見ていたアルフは

感動して泣きじゃくりながらベルクトに言った。

「アンタも、クロノも……ヒクッ……なのはも……周りがみんないい奴ば
つかりだよ……」

フェイトも……うつつ……きつと幸せになれるよ……」

「……ああ、そうだな。」

腕を組ながらベルクトは答える。

そしてフェイトの方に視線を向けた。

（やっと……フェイトも自分を始められるのか……）

俺は…やっとあいつの…本当に見たかった姿を見れたな…)

涙を浮かべながらも、今のフェイトの笑顔は本当に嬉しそうに見えた。

ベルクトはそんな彼女を見て、柔らかな笑みを浮かべ、こう思っていた。

フェイトに出会って、彼女の助けになりたいと決意して本当に良かったと…

やがて、クロノが立ち上がって、フェイトの方に近づいてこう言った。

「時間だ…そろそろいいかな。」

フェイトはクロノの方を向いて、頷き、彼の方に歩いていった。それを見て、アルフとベルクトも彼に近づいていった。

「フェイトちゃん!」

なのはが叫ぶ。

フェイトはなのはの方に振り向いて、笑顔を浮かべてこう言った。

「ありがとう、なのは…きつとまた…」

「うん…きつとまた。」

2人は互いに手を取り合った。

そして、その手を離れた時に、ユーノが肩に戻ってきた。

そしてなのはは3人の方を見て、笑顔で言った。

「ありがとう、アルフさんも元気で…」

「ああ、いろいろありがとうね、なのは。」

アルフも笑顔でなのはに礼を言った。

「クロノ君も…またね。」

「ああ…」

クロノも同様に笑みを浮かべる。

「ベルクトさん…」

「高町なのは…」

ベルクトはなのはの名を呼び、そしてフツと笑って言った。

「フェイトの事…これからもよろしくな。」

「はい!!」

なのはは力強く答えるのであった。

そして4人はゲートを開き、アースラへと帰っていった。

アースラに戻ってきた後、ふとフェイトがベルクトの方を見て言った。

「ベルクト、私…いろいろ考えたんだけど。」

「ん…?」

ベルクトはフェイトの方に顔を向ける。

「私…今まで誰かに助けてもらってばかりだった。
アルフやベルクト…クロノや管理局の人だってそう…」

そこまで言って、フェイトは柔らかな笑みを浮かべて続ける。

「だから私も…今度は助ける側になりたい。

私を助けてくれた人の、助けになるために生きてみたい…

それが、私が決めた、私の新たな道…」

「そうか…」

その言葉を聞いて、ベルクトも笑みを浮かべる。

「ベルクトが私の助けになってくれたように…」

私も…ベルクトの助けになりたい…だから…その…」

「…？」

段々口調がおぼつかなくなってきたフェイトを見て、ベルクトは首を傾げる。

「えつと…つ、伝えたい事があって…その…ベルクト…」

私の顔を、しっかり見てくれないかな…」

「？…ああ…」

意味がよく理解できないが、ベルクトは言われた通りにする。

そしてベルクトがフェイトに顔を近づけた瞬間

「……！」

フェイトはベルクトと唇を重ねた。

「えっ！」

「嘘……！」

「まあ……」

その場でその光景を見ていたアルフ、バレル、フェイは三者三様に
驚き

それを目を点にして見ていた。

やがて、フェイトは口を離し、顔を真っ赤にしながら呟いた。

「ベルクト…す、好きです…」

「……………」

ベルクトはただただ呆然と立ち尽くしてフェイトを見る事しかできなかった。

しばらくした後、フェイが彼に近づきながら言った。

「やれやれ…あなたも隅に置けないわねベルクト？」

「いや、フェイ…ちょっと待て…俺はそういう経験がだな…」

珍しく焦りを見せながらベルクトは言う。

そこにバレルが追い討ちをかけた。

「モテる男はツライねベルクト？」

「な…！バレル！フェイとイチヤイチヤしてる貴様が言うか！」

ベルクトはバレルに向かって慌てて怒鳴る。

そんな3人のやり取りを見て、フェイトとアルフはおかしくて、笑いあった。

そして、フェイトは心の中でこう思っているのであった。

あの日、ベルクトに出会える事が出来て、本当に良かったと…

第21話（後書き）

ということで無印編はこれにて終了です。

いやあ…ようやくここまで来る事が出来ました。

ここまで読んで下さった読者の皆さんは本当にありがとうございました。

初心者を書いた駄文故に

色々おかしな所が多々あったと思いますが

楽しんで読めたのなら幸いです。

終盤、原作をなぞる展開が多かったので

ACEキャラがあまり目立たなくなってしまったのが最大の反省点です。

（読者視点で見たらもつと他に突っ込む箇所が山ほどあると思われますが…）

最後の最後でフェイトが告白、そして慌てまくるベルクト。

無印の骨組み構成時から

ラストに必ずやりたいと思ってたイベントです。

だから…フェイトファンも、ベルクトファンも…

そんなに怒らないで下さいね…？

次回からいよいよあの2人も登場する

A's編が開始です。

（これとは違う別枠で掲載します。）

ただ、作者自身ここまで来るのに大分無理して飛ばしてきたので
今までに比べると更新は遅れ気味になると思われます。ごめんなさ
い。

一応、簡単ではありますが予告編を書いたので
連載開始までの間に期待を膨らめます材料にしてもらえたらなと思っ
ています。

最後にもう一回

ここまで読んでくれて本当にありがとうございます！

A's編でまたお会いしましょう！

次回予告

ジュエルシードを巡る、後にPT事件と呼ばれる事になる戦いから
約半年…

少女、八神はやてが持つロストロギア、闇の書を巡り
本来交わる事の無い者達も加わり
再び新たな戦いが巻き起こる…

-ここは何なんだ…

-うち、八神はやてって言うんよ

-闇の書の起動を、確認しました…

-最近思っの…こういう生活も悪くないって…

-はやてを…助けなきゃ！

-これが…私たちの新しい力だ…？

-俺たちがこれからする事は…本来は間違った事だ…

-これが俺の新たなデバイス…

-異なった武装の同時併用…

- バレルばかりに、戦わせるわけにはいかないもの！

- 何故あなた達がこんな事を！

- アレを使つて結界を無理矢理破壊する…！

- とんでもない…あれを1人の魔導師が起こしたのか…？

- 仲間を死なせるのは…もう、嫌だから…

- だけど…何も言わずにただ相手を攻めてたら…前と同じだから…

- 貴様ら…最初からそれが目的で！

- この世に正義の味方なんて者はいない…

- もう1人！？

- 何故、私達以外に…

- デバイスになつても…真価を見定める必要があるか…

- それが…あなたと彼の目的なのですね…？

- あなたは…まさか…！

- 私は私自身の力で成し遂げたいのですよ…

A C E + リリカルなのは
part 2
＼ 4 人の騎士と 2 つの翼 ＼

闇の書を巡る戦いに
あの 2 人が介入する…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8958h/>

ACE + リリカルなのは ~ もう1人の黒い魔導師 ~

2010年10月10日21時48分発行